

世界同時革命・世界革命戦争・世界プロレタリア独裁

鉄の戦線



3

共産主義者同盟鉄の戦線編集委員会

鉄の戦線 第3号

もくじ

はじめに	1
第1部 政治・軍事戦略と組織方針	6
第1章 我々の政治主張	
第1報告 「非合法党の体系的領導下、今秋斗争 に先進国武装斗争の火柱を」	7
第2報告 「世界プロ独立と中国外交」	15
杉田正夫	
第2章 党の軍事戦略と軍紀	20
第1報告 「攻撃の軍事戦略とは何か」	20
第2報告 「共産主義を鉄の五大規律に打固め 党風と軍紀に結実せよ」	29
第3章 攻撃的非合法党の組織体系	39
第1報告 「帝国主義の侵略反革命勢力と対決する 蜂起・戦争派一叛軍行動委員会を建設せよ」 山下闘士（叛軍行動委員会代表）	39
第2報告 「破防法弾圧と闘う会を武装斗争の 陣型として構築せよ」 青樹繁雄（破防法弾圧と闘う会）	45
第II部 革命論	50
第1章 我々の革命論の到達点	51
第2章 蜂起を組織する単一党への道 羽山太郎	64
第3章 唯物史観と「資本論」「帝国主義論」 （夏期合宿レジメ）	69
第1報告 西部地区合宿レポート 日野弘蔵	69
第2報告 北部地区合宿レポート 町田必殺	72
第3報告 南部地区合宿レポート 須藤一鉄	79
第III部 黒田体系の根底的解体 さらぎ徳二	82
序 黒田理論体系は如何に解体すべきか	82
第1章 「行為的現在における場所的立場」批判	84
第2章 西田哲学を批判する党の実践的根拠とは何か	101
第3章 黒田三段階論批判	107

三号発刊にあたって

(一)

四・二八闘争に「二派糾合・八派解体」を掲げて清水谷三派集會
一日向一派との党派闘争を関西派との「連合」の下に遂行して以来、
我々は「首都に不拔の前衛党を構築せよ」の合言葉の下に、蜂起・
戦争派の大道を歩み、その時点においては独自路線として、6月闘
争においては「自衛隊の沖繩派兵を直接攻撃せよ」のスローガンの
下、六・三〇防衛庁闘争を貫徹してきた。

更に地下正規軍建設との関連において「党一軍一統一戦線」の全
領域の再整備に入り、八・二三「破防法弾圧と闘う講演集會」―九
・九「東京叛軍行動委員会（仮）結成」をもって党の外環を建設し、
この怒濤のようなりやねりをもって九・一六三里塚闘争に登場し、鉄
の公然軍団において成田駅前における検閲の機動隊をコッパミジン
に粉砕し清水水・駒井野への快進撃をなしとげるまでに自己飛躍し
てきた。

この過程は同時に、中核派の左傾的突出による八派政治の解体・
「明治グループ」と「宮下グループ」への分解、赤軍派と京浜安保
共闘の統合の過程でもあった。

この未曾有の党派再編は、当然のことながら、帝国主義権力とど
のようを闘いを展開し人民戦線派をいかに解体するか、という基
本的問題と表裏一体となって進行している。中核派にあっては、四
・二八清水谷集會に触発され、恒常的平和闘争と八派政治の危機を
「危機論」と大衆的武装闘争の左傾化で脱出しようとして分裂し突
出を試みた。一方、宮下グループは弱者連合の本性まる出しに、た
だ「ソヴェト」を何かしら蜂起と無関係に単色に展望し、地下正規
軍建設にも、大衆的武装闘争の突出にも共に踏みきれず、すでに階
級闘争の高い地平から完全に脱落してしまつた。

我々は、地下正規軍建設と共に、公然闘争次元においても蜂起・
戦争派としての大道を歩み、首都に断固たる政治潮流として登場し

その第三は、ブント諸派批判を中心としたものであり、『同盟脱
落諸派の解体にむけて』及び『宇野体系の根底的解体にむけて』と
して提起した内容である。

だが、鋭い目をもった読者諸兄は、一読し直ちに次のことに気が
ついたのであろう。

即ち、「2号」の展開の大部が、第一に、論理性（主義）と歴史
性（主義）の問題に対する解答という領域の問題、第二に、かかる
論理性と歴史性を「党」において統一する「党」の指針を唯物史観
に立脚して提起する領域の問題、という二つの領域が「一本の赤い
糸」として2号全体を貫いていることを。

何故に、我々は「論理性と歴史性」だとか、「論理的任務と歴史
的任務の党における統一」だとかいう問題にまで立ち至って意志統
一しなければならなかつたのだらうか？

そこで、我々は、問題をもとに戻し、2号が問われていた課題を
別の角度から検討したいと考える。

第一の問題は、現在の「先進国武装闘争」の突きあたって壁
・困難性とは何か、ということであった。

このことは、先進帝国主義国の市民社会が、ベトナム・インド
ナ革命戦争の永続的拡大を背景として、米国内にみられるような価値
観の根底的動揺を示しつつも、未だ、日本のごとく後進国革命戦争
に直接的に軍隊を派遣して反革命的介入をしていないことにも規定
され全面的崩壊に至っていない段階で、即ち「憎しみの組織化」に
よつては武装闘争の主体は形成されなかつたという問題の解明であり、
又、武装闘争の端的段階において、スターリン主義者を公然と自
称し、「スターリンの教えに従つて、一にも武装、二にも武装、三
にも武装」を語る京浜安保共闘が、その「対象的世界把握」のデタ
ラメサ（東風が西風を圧する式のもの）や「獲得すべき未来」につ
いてのデタラメサ（「国社会主義論」にもかかわらず、武装闘争の

たことを深く確認し、かかる実践的飛躍を踏え「三里塚機動隊セ
ン戦から10・11月自衛隊直接攻撃へ」ばく進する今、鉄の戦線3号
を全都・全国の革命的同志諸君に贈り、我々への革命的結集を訴え
るものである。

(二)

三里塚第二次代執行粉砕闘争―機動隊セン戦を契機に、武装闘
争―蜂起・戦争にむけた闘いは、「名もしれぬ」武装派小グループ
の自然発生的闘いをも内包しつつ、着実に、そして徐々に、「封じ
込められた軍事」の一時代を突破しようとしている。武装闘争の自
然発生的性は明らかに上昇しつつある。このことは疑いのない事実で
ある。

このことは、主体的に把握するならば、そうであるが故に、「軍事
を組織する党」が、自然発生的の大波小波にもかかわらず断固とし
てかかる階級攻防の中に存在して闘いをけんいんし、かつ、かかる
軍事の自然発生的性を、その戦闘性を十二分にひき出しつつ、なお「
共産主義」において統合しうるか否か、共産主義を軍事を組織する
党の党風と軍紀として高めることができるか否か、が問われている。
だから「鉄線3号」が問われている基本的課題は、「2号」が問
われた課題「武装闘争の突きあたって壁をいかに突破する
のか」と基本的に同一である。

我々は「2号」において三点の問題を提出した。

その第一は、ブント諸派への基準であり、かつ「党の革命」の基
軸としての「共産主義と軍事」の「共産主義」の内実の提起であり、
『綱領獲得のための諸前提（メモ）』及び『宇野批判・第五章・II』
で提起した内容である。

その第二は、「二派一八派」に対する基準であり、かつ、「党の
革命」の基準としての「共産主義と軍事」の「軍事」の内容の提起
であり、『世界プロ独への軍事問題』として提起した内容である。

先頭に立っているという冷徹な問題の内的解明であり、

かつ、主体的に把握しえなかつた武装闘争を「ヤッタ」かどうかだ
けでなく、「ヤッタ」上でなお党一軍を維持発展させることを我々
自身がどのように遂行したのか、という問題の解明である。
結論的にいえば、我々は、先進国武装闘争の現局面における最高
の困難性・突きあたって壁を「技術」の問題として総括しては
ならないと考えている。我々の内なる「団結の質」―同盟の団結の
質として総括しなければならぬのである。

だからといって我々は、闘わずして敵前逃亡した日向一派の諸君
のように、日和つたが故にこのような事を言っているのではない。
我々はブント九回大会が獲得した「軍事を組織する党」―「RG路
線を首都において最も大胆に貫徹し、最初のRG戦として××署攻
撃―蒲田進撃を圧倒的に遂行したのであり、闘つたが故の総括とし
て「党」の団結の質・基準、共産主義的団結の基準を語っている
のである。日向一派が当日ビビって闘わずして逃亡し、「党がなかつ
たからだ」と、まるでその「党」の外に自己を置いて語つたとは
全く異なる地平であることは言ひまでもない。

我々が2号において、唯物史観の人類史の根源的四契機を語り、
労働―階級闘争を語り、そして革命家マルタスの一身において、実
践的に「共産主義者同盟」↓第一インテラーとして結実したところの
「党」を語ること、かかる「党」↓「世界党」の指針の上に立って
従来我々がブントの立脚点としてきた戦略確定のための「对象的世
界把握」及び「獲得すべき未来」への実践的接近を逆転して再把握
しようとしていること、これは全て、かかる「先進国武装闘争」の
突きあたって壁に、ブントが、そして我が派が主体的につきあつた
実践的営為の総括にもとづくものなのである。

そして第二に、この「先進国武装闘争」の壁の突破の為に我々に
つきつけられた問題が、同時に、第一ブントの分解・再建の過程で
東京に生れた「革通主義」の流れをくむ我々の主体的総括・飛躍と、
併せ問われてきたものだといふことが踏えられなければならない。

「論理性と歴史性」の問題についても、少くとも「対象の世界把握」における「論理性と歴史性」についての一定の結論は、例えば「暴革命」で一つの核心的問題として提起されながら、かかる領域の問題はなかりにされてきたのである。我々は2号でこれを全面的にとりあげ、スターリン主義の歴史主義と即自的反スタ主義の論理主義を止揚するものとして「対象世界が論理を歴史的過渡性をもって展開させること」に立脚して、我々の全面展開を行い、スターリニスト右派人民戦線派武装闘争への敵対、というレーニンが京浜共闘の諸君によって見事に葬りさられた中で、我々の新たなる党的基準の構築とスターリン主義及び即自的反スタ主義批判の基準の構築にむかっただのである。かかる領域の問題が現下の党建設に不可欠であると考えたのである。

(三)

我々は(二)において、2号に問われた課題を内的にとらえかえし、第一に、現在の「先進国武装闘争」が突きつけられている困難性を本質的に「党」的団結の質に求め(スターリン主義・即自的反スタ主義批判の新たな視点にもなるのであるが)①論理性と歴史性②その統一としての「党」の指定において解明したこと。そして第二に、このことが同時に、我々の革命主義的傾向からの飛躍をも賭けたものであることを明らかにしてきた。

だとしたら、ここで我々は、第二次プロントについて一つの視点からの総括をしてきたことになる。

即ち、第一次プロント・第二次プロントが日共スターリン主義に対して自己を定立させていった時、それは戦略確定のための帝国主義論を中心とする「対象の世界把握」と、世界革命戦争―世界プロ独論を中心とする「獲得すべき未来」への実践的接近の領域であったことである。

今、我々は「論理的任務と歴史的任務」「これを統一した党」の指定をする時、かかる獲得された「党」の位置から、プロントが血の

闘いの中で獲得した領域の全てを再統合することが問われている。だが、このことは、日向派のように第二次プロントの戦略的任務を清算して宇野に回帰し、党の指定は黒寛式「自覚」の党にのりうつるのとは全く異っていることを確認しなければならぬ。

即ち、我々は第二次プロントが獲得してきた「世界同時革命・世界革命戦争・世界(単一)党建設―世界(単一)プロ独樹立」を、現代マルクス・レーニン主義の最高の理論的水準にあるものと確認している。このことは絶対に踏えられなければならない。

「有限の自己」が「論理的任務を歴史的現在」において、「党」に自己を体現して遂行する時、かかる「党」の運動が「共産主義運動」と位置づける時、この「党」はスターリン主義的「戦略」や革命的「自覚」をもった「党」であるはずがなく、第二次プロントが獲得してきた理論的水準を「獲得物として確保」した「党」でなければならぬのであり、まさに我々のみがこのことを言いさされる位置にあるのである。なぜなら我々は1号において「世界同時革命・世界革命戦争・世界(単一)党建設―世界(単一)プロ独樹立」という第二次プロントが獲得した「対象の世界把握」と「獲得すべき未来」における現代マルクス・レーニン主義の最高の成果を、プロント内党内闘争において、諸フランクが日共式「世界一因同時革命」に屈服する中で、唯一防衛し発展させてきた部分だからである。我々はいかかる過程を踏えて、2号において更に「党」の解明にむかっただ、ということをはっきりさせておかなければならない。

そして我々は、今かかる「党」的団結の飛躍の上にたって、第二次プロントの理論的・実践的到達地平を踏え、かつ「党」の立場からこれら全てを逆転させて位置づけることが問われているのであり、当然、本3号の位置は、「党」の解明を踏えての、再度の全面展開であるといわねばならない。

ここで我々は、かかる我々の到達地平との関連において、我々が「連合」している関西派の同志との理論的基準とその相互止揚の基

準に、若干触れておきたいと考える。

関西派の同志の現在の到達点は、第一に、武装闘争―軍事の断固たる維持・発展という実践的契機を基礎にすえて(理論的には)、第二に、資本主義の原則的批判、第三に世界党史観の獲得、としてまとめることができよう。

我々は、関西派の同志が、第一の基準(武装闘争―軍事)をもつが故に「連合」したのであり、かかる基準から自己の理論を検証し発展させんとする立場をもっていることを正しく評価しなければならぬ。又「先進国武装闘争」の突きあたって壁についても「技術」の問題として総括しようとせず、内的意志統一の問題として総括しようとする立場も正しく評価しなればならぬ。そして、かかる立場から、第二の「資本主義の原則的批判」と第三の「世界党史観」が出てきたことも一応了解しうるものである。

だが我々は、関西派の同志の「資本主義の原則的批判」が産業資本主義下のプロレタリアートの分析にとどまり、又上向論理展開の不在の故に、帝国主義・過渡期世界の党の任務確定の武器たりえていないこと、又「世界党史観」が、革命家マルクスの一身において「唯物史観」に拘らざけられて「論理性と歴史性」の統一としての「党」として体現されたことを過看するが故に、マルクスの党―産業資本主義、レーニンの党―帝国主義、我々の党―過渡期世界の党への共産主義の発展として対象化することなく、ただ「レーニンの党」第三インターの歴史的総括からしか「世界党」を語っていないが故に、歴史主義的「党派闘争史観」になっていると指摘してきたのである。

であるが故に、関西派の同志は「方法論主義批判」「体系化批判」とするのではなく、「資本主義の原則的批判」から「世界党史観」への論理上向が問われているのであり、唯物史観―「資本論」・「帝国主義論」を一貫した方法で貫き、過渡期世界の党の「論理的任務と歴史的任務の統一」へと結実させることが問われているのではないだろうか。

(四)

「鉄戦3号」は、以上述べたように、2号で獲得した論理的任務を「党」において統一する立場を踏え、かつ、かかる高い地平において頭脳を逆転させ、再度、すでに獲得された論理的任務の成果を統一的に位置づけること、まずそれよりも地下正規軍の展開の意義とその任務を中心に加え、かつそれと「武装闘争の貫徹」という一本の赤い糸で結ばれた公然領域の諸任務。「叛軍行動委員会」―「破防法弾圧と闘う会」までも展開すること、このことを第一の眼目とした。

第一部「政治・軍事戦略と組織方針」は、かかる目的の下に掲載されたものであり、第一章においては、全面的な政治主張に、現下の中国外交に関する若干の集約的論文を附加した。又、第二章には、軍事論文を収め、アンドレ・グリスマンの「防禦の軍事学」に対し、クラウゼヴィッツに立脚し「攻撃の軍事戦略」を「重心論」を中心に展開し1号2号の「戦争論」「軍事戦略論」を発展させ、かつ地下正規軍の最も高い質において党を統一する視点をこめて第二論文を掲載した。第三号は、八・二三「破防法弾圧と闘う講演集会」―九・九「東京叛軍行動委員会(仮)結成」を踏え、党の外環として設定した「叛軍行動委―破弾闘」の任務を提起した。

第二部「革命論」においては、第二次プロントにおける最も体系的理論としてあったさらき体系を、その「暴革命」―「先行性ファンズム論」にまで立ち至って再検討し、我が「鉄の戦線派」のきわめて一貫した継承性を総括的に提起することを眼目とした。無体系・無継承・無総括の三無主義と、その日ぐらしの「のりうつり」が横行した第二次プロントの崩壊過程の鉄火の試練を通じて、我々は最も体系的であるが故に最も動揺せず、最も体系的発展をとげたものであり、かかる軌跡を総括的にまとめあげた力作である。又、これとの関連において、第二章においては、トロツキー型統一戦線論・ソヴェト論の総括的論文をとりあげた。

第 I 部

政治・軍事戦略と組織方針

第 1 章 我々の政治主張

第 1 報告 「非合法党の体系的領導下、今秋斗争
に先進国武装斗争の火柱を」

第 2 報告 「世界プロ独と中国外交」 杉田正夫

第 2 章 党の軍事戦略と軍紀

第 1 報告 「攻撃の軍事戦略とは何か」

第 2 報告 「共産主義を鉄の五大規律に打固め、
党風と軍紀に結実せよ」

第 3 章 攻撃的非合法党の組織体系

第 1 報告 「帝国主義の侵略反革命勢力と対決す
る蜂起・戦争派一叛軍行動委員会を建
設せよ」

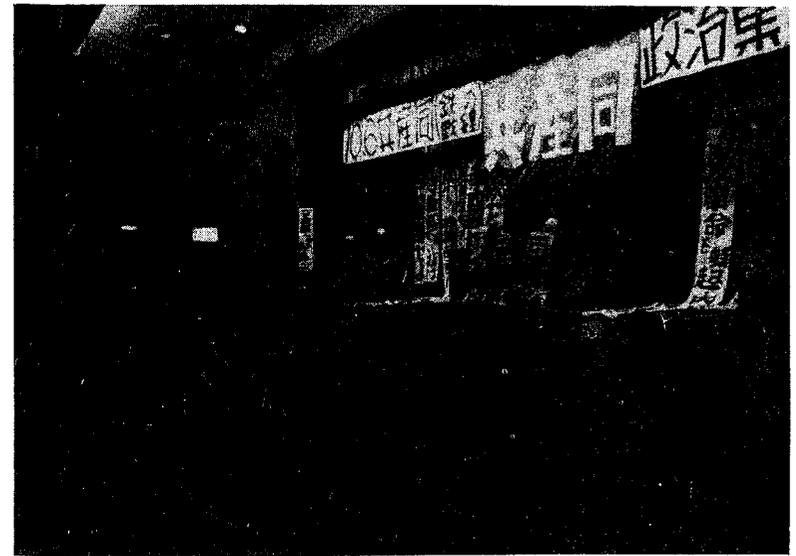
山下闘士（叛軍行動委員会代表）

第 2 報告 「破防法弾圧と闘う会を武装斗争の陣
型として構築せよ」

青木繁雄（破防法弾圧と闘う会）

第三部「黒田体系の根底的解体」は、2号における「宇野体系の根底的解体にむけて」と対をなすものであり、即自的反スタ運動の理論的二本柱としての宇野・黒田理論解体を目指すものである。黒田への基準は、その「場所的立場」にあてつつ、梯明秀―西田哲学への批判までさかのぼった貴重な論文である。

なお、第二部第三章「唯物史観と『資本論』『帝国主義論』」は夏の地区合宿レポートの一部であり、若干重複する部分もあるが、鉄戦2号の血肉化過程における戦士達の努力を高く評価していただきたいと考え、あえて掲載したものである。



10.6 共産同政治集会是10.11月斗争への熱い意志統一をかちとった力強く基調報告を述べる同盟仏議長。

第1章 我々の政治主張

第1報告 「非合法党の体系的領導下、 今秋斗争に先進国 武装斗争の火柱を」

第2報告 「世界プロ独と中国外交」 杉田正夫

第一報告

非合法党の体系的領導下
今秋斗争に先進国武装斗争の火柱を
國際国内党派斗争の現在の位置と先進国武装斗争
の政治―軍事戦略路線と展望

統一世界市場の分断開始と中共の三角核均衡路線にゆすぶられる
佐藤自民党政府危機をふまえ、人民戦線派と対決して帝国主義軍隊
解体攻撃を開始せよ！

帝国主義諸列強権力は下部構造の不均等発展がもたらすプロロク
階級斗争に狭撃され世界的にのたうち廻っている。常時戦争体制の構
造的頂点をなす米帝軍の「建国の神話」と「世界の民主主義を守る不
敗の十字軍」との螺旋的幻想で支えていた米帝軍の建軍イデオロギ
支柱の端緒的崩壊が下部構造の破綻と同時に交叉して進行している
現局面において、ニクソンの訪中及びドル兌換停止と日帝に対する輸
入課徴金10%と物価賃金凍結令となって露呈されたのである。我々は
一貫して来たところの米帝常戦体制とこれを支える帝国主義的世界的
下部構造が同時に破綻していることを階級斗争世界としての現代過
渡期世界における三プロロク階級斗争及び先行性フアンズム、人民戦
線、プロ独派の三巴構造において把えると共に中共のニクソン招待外
交が導く米中三角核均衡路線の反革命的な性格を三〇年代スタール
外交との関連において民族共産主義を根底的に止揚する世界プロ独樹立
―世界党建設という綱領的基準から國際国内党派斗争を通して世界
プロ独樹立と世界同時革命―世界革命戦争として斗いとる戦略との一
体的獲得を、歴史的任務と論理的任務の党による統一として確立する立
場から批判しつつ、同時に米中三角核均衡体制に対する日帝のアジ
ア侵略反革命体系の方向を明確に把握し、今秋政府危機の性格を諸党

派の対応との攻防軸において押えつゝ日帝の七二年をメルクマイル
とした自衛隊沖繩派兵の位置を戦略的環として、今秋から来春に至
る帝国主義軍隊解体―自衛隊解体斗争を先進国武装斗争の本格的火
ぶたを切るものとして我々は提起して来たのである。

現下の國際的政治―經濟の局面は、ニクソン訪中と中共のニクソ
ン招待外交とが米中三角核均衡体制へと固定化せんとしたその時
ニクソンは十五日午後九時（日本時間十六日午前十時）に、①ドル
の兌換停止②日帝に対する10%の輸入課徴金③対外軍事援助10%削
減④賃金・物価の九日間凍結を発表せざるを得なかった。ここに現
代過渡期世界における帝国主義的世界的の下部構造と有機的に結びつ
けた要―八金・為替本位制V、即ち金、ドル本位制は全面的崩壊を
開始したのである。

ポンドを基軸通貨として編成された金本位制が崩壊した後、第
二次帝国主義戦争後にドルを基軸通貨として再編された金、為替本
位制は、ドルを唯一の兌換可能通貨として確立することを大前提と
していた。不均等発展の矛盾が本質的矛盾を深部からこの金、為替
本位制をも常に突き崩す力として働き続けるが故に、即ち、この帝
国主義世界の本質的矛盾を権利者は三〇年代の経験を経る資本の下
部構造の法則に対して恣意的挑戦を諸列強権力は試みたのである。
これが法則に敵対する必然性に敵対する恣意的協調政策機構として
のIMF体制であった。そして、諸列強権力の法則的必然に挑戦す
る恣意的機構と、帝国主義段階における資本の本質、不均等発展の
必然的貫徹との、非和解的矛盾対立の顕在化こそが、第二次帝国主
義戦争後における世界的下部構造の矛盾の発現を変容させつゝ危機
を引き延ばした第一の基本条件であった。そして、この第一の基本
条件が、即ち恣意が必然に打砕かれる過程の引延して下には含する矛
盾の蓄積を、侵略、反革命戦争へと外化し続けねばならず、この矛
盾の恒常的外化の体制として産軍複合経済を基礎とする常時侵略反

革命戦争体制がANPO、NATOを両軸に反革命軍事同盟として
形成されていたのであった。これが現代過渡期世界の帝国主義の矛
盾の諸形態を権力の側から規定してきた第二の基本条件であった。
インドシナ革命戦争を頂点とする後進国の過渡的の革命戦争と端緒
的プロ独派が切り開く先進国武装斗争の國際的高揚は、前述第二の
基本条件を突き破り、第一の基本条件の破綻を促進し、かつ法則的
必然の爆発を引き出したのである。革命の銃口が過渡期世界の帝国
主義権力支柱の重心―帝国主義軍隊に革命の銃弾を叩き込み込み
ならば、常戦体制の世界的重心は均衡を失って崩れ始め、下部構造
の法則的必然をも呼び出しているのである。この世界的重心の動揺
を右から支え、全面的崩壊を全面的世界革命戦争のルツボに叩き込
むことを防いでいるのが中共の米中三角核均衡路線である。

常時体制と結合した統一世界市場の破綻が招く激動の過程は、三
〇年代のそれと異なり米帝はモノロー主義へ回帰出来ない。
即ち、三〇年代のアメリカ過剰生産恐慌・統一世界市場分断（通
貨体制の崩壊）―ブロック化―國內階級決戦の敗北―帝国主義戦争
の開始―ソ連の帝国主義戦争への参加という過程とは異なる。

第一に、常戦体制という世界的侵略反革命軍事スベンディングは、
三〇年代のニューディールの底抜けと第二次帝国主義戦争を経て朝
鮮動乱を契機に完成されたものであるからだ。即ち、一国的プロロ
キズムの枠内で実施されたスベンディング―ニューディールはたち
まち底が抜け、ケインズ理論が目指した国家のブルジョア財政革命
は第二次帝国主義戦争の中で、世界的かつ軍事的スベンディングと
してのみ実現しえたのである。この総括の上に立って確立された常
戦体制は、一応、金、為替本位制を基礎とするIMF体制と結合し、
不均等発展の法則に追いつめられるIMF体制の矛盾を外化する構
造をもっているが、金、為替本位制が根拠から破綻してしまつたか
らといって、今更、世界的、かつ軍事的スベンディングとしての常
戦体制の生産的基礎を崩して、三〇年代に失敗を経験した一国的ス

ペンディングとしてのニューディールに帰還することは出来ないのである。出来ることは、破綻した金・為替本位制の上に、即ち、軍事力を根幹とする政権の強制の下に経済圏を再編して軍事スペンディングを強行することだけである。したがって、米帝がモンロー主義に回帰して一国的スペンディングにとどまるなどと考えることは甘い幻想である。だからこそ、重心をぐらつかせて均衡を失い、再編の時を必要としている米帝に時を貸す中共の三角均衡路線は犯罪なのである。

第二に重要なことは①三〇年代の階級決戦と帝国主義戦争が、アメリカ過剰生産恐慌を契機として通貨体制の崩壊―世界統一市場分断を引き起こしているのに対して、②現在では、帝国主義諸列強権力が不均等発展の必然の法則に對し反必然的恣意政策としてIMF体制をもって挑戦し、必然による恣意の破壊過程の矛盾を常戦体制に外化したことであり③この常戦体制をベトナムを頂点とする後進国の過渡的革新戦争と先進国プロ独派の武装斗争が追いつめたが故に、下部構造の必然が上部構造の恣意を破壊する速度を早めたことである。即ち、過剰生産恐慌が不均等発展の必然性を全面化させて階級決戦と帝国主義戦争を呼び出したのではなく、現代過渡期世界階級斗争世界の主力が必然的法則による恣意政策の破壊の速度を早め、これを引き出したのである。だから④帝国主義は下部構造の破壊の上に更に上部構造の混乱、政府危機を招き、これを結ぶ重心―帝国主義軍隊が動揺し、解体傾向と反革命内外戦傾向へ動向をくりかえす。そしてわれわれの重心攻撃の政治的軍事的意味が決定的比重をますのである。帝国主義の矛盾を過渡期世界においても本質的に把握出来ず、体制間矛盾として把握する中共は、その「論理的任務」において完全に誤っているが故に、かゝる反革命的外交路線しかとりかえなかつたのである。今や、前述基本条件は第二のみならず前提的第一条件が音をたて、崩れている。即ち、帝国主義を有機的世界として結びつけてきた要環―ドルが兌換を停止したからである。ドルの金兌換を前提としてのみ金にリンクしていた日独仏英

どしをかけ、人民戦線勢力（日共―社会党左派）と社公民との攻防および、プロ独派の武装激突から内戦への激化を必ずや呼び出すにちがいない。従って、我々プロ独派の政治戦略と軍事戦略は、決して政府危機の連続へ目をうばわれることではなく、権力支柱―帝国主義軍隊、自衛隊への重心攻撃としての先進国武装斗争でなければならぬ。

統一世界市場の分断開始を基底とする常戦体制の重心動揺と中共の対応を媒介として、やがて開始され、連続するであろう政府危機状況の大波小波を貫くものは、あくまでも日米帝国主義軍隊の解体、自衛隊解体を目指す重心攻撃である。日帝独占体は、①ドルの兌換停止と②円の實質的切り上げと、③米帝の日帝に対する10%の輸入課徴金攻撃に直面し④他方、中共からの三角核均衡路線下の四国不可侵条約攻勢でゆさぶられ、政治委員会は秋の沖繩返還協定批准国会を契機に自民党内の閣僚再編から長期に亘る政府危機を招くだろう。階級攻防は日共人民戦線派の一定の伸長を可能としつ、プロ独派との武装対決を激化し、必ずや独占体主流―自衛隊―反革命軍事勢力―ニューライトの反革命内戦を呼び出し、三巴戦を更に深化する。政府危機をめぐってプロ独かフアンズムかが直ちに問われるのではなく、必ずや三巴戦の総過程において先進国武装斗争を貫徹しなければならぬのである。三巴戦の中で政府危機と先進国武装斗争の貫徹、帝国主義軍隊、自衛隊解体、反革命軍事勢力解体斗争が峰起、内戦への道である。

伊の諸列強通貨は、ドルの金兌換停止の前に金との関連を失い「紙片」と化してしまうからである。

世界貨幣において、金において統一される資本の世界的有機構造は、各帝国主義ごとの権力―国家に総括された資本力に對応する通貨圏を固めアウタルキー体制へ移らざるを得なくなるであろう。ドルの金兌換停止以前のポンド、フランの切り下げとマルクの切り上げは、ドルという下部構造における世界的重心―要環防衛を前提としたIMF機構内の矛盾調整策であった。だがドルの金兌換停止を前提とする前段階にあっては、円を切り上げようが、マルクも、ポンドが変動制またはフランが二重相場制をとろうが、調整効力は無質の矛盾に突入した段階での調整政策であるが故に、調整効力は無力である。事実、EC蔵相会議は八月二十日決裂し、各国は個別收拾へ移り対立は激化している。

世界統一市場は分断を開始し、下部構造からもゆさぶられるのである。中共が、米帝の均衡喪失を米中ソ三角核均衡へと固定化して日帝をも日中米ソ不可侵条約の枠へ押し止めようとする願望しようとも、日帝の基本動向は明らかに突き進まざるを得ない。米帝の10%輸入課徴金は明確に日帝の対北米輸出に向けられたものであり、日帝の円切り上げと自由化を迫ったものである。北米と東南アジアと二大市場とする日帝が米日間下部構造の対立を水平分業の局面で激化する時、日帝は東南アジア市場を先行性ブロッキシズム化せざるを得なくなるのである。

この日帝の二大生命線市場均衡の動揺を、中国大陸市場をエサに日中米ソ不可侵条約へと誘い込もうとするのが中共の対日外交路線であることは鮮明であるが、世界統一市場分断の開始は、一時的に日帝の個別独占体を引きつけて独占体間の動揺を引き出し、政府危機を惹起することが可能であつても、日帝独占体の主流は、先行的ブロッキシズムの方向を選ぶであつても、独占体の主流に反する政治委員会の登場があり得ても、日帝権力支柱の重心たたらんとする自衛隊幕僚とニューライトの結合せる侵略反革命勢力が右からのぶりも

(A) 過渡期世界における米中ソ三角核均衡体制の形成―中共のニクソン招待外交は世界革命戦争―世界プロ独に敵対し米中ソ三角核均衡体制を固定化する道である。

戦後過渡期世界の国際階級斗争の質を規定して来た要因は、ベトナム革命戦争の銃口が切り開いたインドナ革命戦争への国境を越えた拡大とこれを頂点とする後進国過渡的革新戦争の国際的昂揚および、先進国における端緒的プロ独派の暴力斗争の国際的爆發であつた。この二つの要因が六〇年代後半の世界革命の波を巻き起こし引きだされた要因であり、米ソ核均衡体制によって歪められた過渡期世界の国際階級斗争の壁を突破する要因であつた。後進国革命戦争は過渡期世界の質に規定されるが故に銃口をもって自然発生的に国境を越えざるを得なかつたが、革命党指導部の民族共産主義思想と世界プロ独樹立を目指す綱領戦略の未獲得という主体的限界性および後進国という帝国主義世界における位置の客観的限界性故に過渡的限界性を持っていた。従って、先進国における端緒的プロ独派の世界党―世界プロ独樹立を獲得するための、国際的国内的党派斗争と同時に進行させる先進国武装斗争のみが、過渡期世界の階級斗争の質を主体的に斗いとるという位置にあつたのである。先進国の端緒的プロ独派と後進国過渡的革新戦争の二つの力は「労働者国家」間および国内階級斗争を同時に生み出し、先進国プロ独派と人民戦線派との対立を激化しつ、人民戦線派を追い込み、かつ帝国主義権力の政体的転換としての先行性フアンズムへの権力性格転換を呼び出した。即ち、中ソ国境武力衝突を頂点とする対立、チェコ暴動と弾圧を頂点とする東欧の分裂を連続的に深化させた。その結果ソ連は人民戦線派共産党にとっての物質的基礎としての位置を低下させ、各国共産党内に分解と分裂を引き起こし、他方中国には、国際共産主義運動における総路線の破綻を突きつけ、中間地帯論と周

刃革命論の総決算から、国土を焦土と化しても世界革命戦争を世界プロ独樹立へ向けて貫徹するか否か問うていた。文革を呼びだした過渡期世界の階級斗争の質はかゝるものであった。だが文革は国際共産主義運動に於ける総路線(体制間矛盾の下での)一國社会主義建設可能論の根拠を本質規定し、米帝一元支配論、反米獨國國際統一戦線論、中間地帯論の周辺革命戦略論を否定的に総括して世界プロ独世界革命戦争への綱領戦略を獲得出来ず、民族共産主義思想を立脚点とする反ソ自力更生路線への転換及び一國社会主義綱領の原則とする枠内の奪権斗争へと集約され、文革左派プロレタリアートの後退を与えられた。帝國主義諸列強権力は、先行性ファシズムへと権力性格を転換し、プロ独派に追い込まれた人民戦線派を形ガイ化した議會へ包摂しつゝ、プロ独派襲撃攻撃を集中し、端緒的プロ独派は反革命軍事の壁に封じ込められざるを得ない。先進国におけるプロ独派の封じ込められた軍事の下での一時的退却と攻撃再開のための党的軍事的準備の必要性は、国境を越えたインドシナ革命戦争やパレスチナ解放戦争の後進国革命戦争に於ける過渡性を突破させ世界革命戦争へ索引する力を一時的にはあれ弱めた。先進国プロ独派の一時的後退と中国文革の民族共産主義一國社会主義原則による反ソ奪権的集約と文革左派プロレタリアート人民の後退、及び後進国過渡的革命的成長の永続過程における手詰り、こゝに中国のニクソン招待外交から米中ソ三角核均衡体制確立路線を許す革命的ニクソンの弱点があった。しかし帝國主義列強の側も就中、米帝も不均等発展法則に深部からゆさぶられ、国内プロ独派とインドシナ革命戦争の狭撃の前に常時侵略反革命戦争体制の経済的基礎と政治的国家統治イデオロギーおよび戦争貫徹のための建軍支柱を部分的に解体されはじめていた。又戦後過渡期世界は、米帝を基軸通貨国として再編された。米帝は国内的には政府投資軍事スペンディング主導型で産軍協同経済の成長を計り、これを基礎に反革命軍事同盟へと政治軍事的に集約し内的矛盾を常時戦争体制を持って、侵略反革命戦争へと外化してきた。常時戦争体制を支える國際国内軍事

帝を三角核均衡の下に固定化しようとするが中共の対外路線である。かくして、中共の米中ソ三角核均衡体制の固定化と日中米ソ不可侵条約への道は、世界同時革命「世界革命戦争」世界プロ独を目指す我々に敵対するものである。

北ベトナム労働党、南ベトナム民族解放戦線、ラオス愛國戦線、カンブチア民族民主統一戦線等が、こぞってニクソン招待外交に批判を加えたのは当然である。しかし、彼等の批判が未だ民族共産主義という原則の上に立つ大國主義批判である。かつてスターリンが一國社会主義の原則に立脚して、世界革命の利益を自國利益に從属させた時、毛沢東も民族共産主義の原則に立脚しつゝ、自國民族共産主義の利益を守るためにスターリンの民族共産主義と対決し、訣別した。今やその毛沢東が、同じ民族共産主義の立場に立つ、インドシナ三國の同志から批判をうけている。

民族共産主義の原則を根底的に批判止揚し、スタ・プハ綱領に根ざす一國社会主義と一國プロ独の連邦制を全面的に止揚しないかぎり、この矛盾はくり返されるのである。民族共産主義の自主独立を肯定し、その相互調和の上にプロレタリア國際主義を接木しようともそれは不可能であるのだ。こゝにこそ、共産主義と民族國家に関するマルクス主義の根底的な問題が含まれている。共産主義は資本と賃金労働を止揚するのみではなく、資本を総括してはいるが、決して資本のみの産物ではなく、私有財産社会をすべて総括してきた國家権力と、その根拠をなして歴史的存在してきた民族國家そのものを止揚するものである。かゝる人類史の転回が世界プロ独であり、世界党と世界プロ独を獲得する「世界党の闘い」なくして米中ソ三角核均衡体制を突き破ることはできないのである。

スペインディングは、当然、クリーピングイフレージョンを恒常化して体制の物質的基礎を崩そうとするが、これを押える力は米資本主義の國際資本本戦および通商戦における対外競争力、外貨獲得力、金ドル保有力であった。そして常軌体制を支える政治軍事的イデオロギーこそが建國の神話と、不敗の民主々々義十字軍という建國の神話と幻想の螺旋であった。帝國主義不均等發展は、常軌体制を支え経済的基礎力を打砕き、インフレの激化と国内階級斗争を誘発した。ポンド切り下げマルクの切り上げを転機とする全ての二重価格制は金・為替本位制の實質的崩壊であった。一九六七年に二四〇億ドルの金保有高を誘った米帝は一九七一年七月末で一〇五億七千万ドルまで低落した。米帝はIMFを通じてオランダとベルギーの外貨八億六千二百万ドルを引き出して防衛している。七〇年には、すでに西独に金、外貨保有高を抜き去られ、海外競争力で八〇億ドルを保有して米帝に迫る日帝に沖繩を返還して円切り上げと常軌体制へのコミットを迫っている。

ベトナムを頂点とする後進国革命戦争は、常軌体制を支える政治軍事的幻想の螺旋を吹き飛ばし、アメリカ国内の階級支配を社会秩序から崩壊させている。

ニクソンは、BPP、ウエザーマン等に対して襲撃攻撃を加え、社会秩序崩壊過程で噴出する諸階級のエネルギーがプロ独派へ集約されることを防ぎ、プロ独派への結果点を見い出せず、ヒッピー的にあるいはボルノ風に荒れ狂うアメリカ型社会革命派とハト派を政治的に集約し直し、下部構造を再編し直し、常軌体制をあらたな質の統治体制で確立する「時」が必要であった。だからこそ革命の側は、この米帝の弱点に追撃を加えることを又、経済的勃興帝國主義であり同時に政治軍事的イデオロギーが未確立である帝國主義の軍隊に重心攻撃を加え、敵の重心を突き刺す軍事攻撃をかけることが何よりも必要であったのである。この米帝に時を貸し与えて米中ソ三角核均衡体制へと固定化し、かつ、沖繩派兵から防衛拠点韓國、攻撃拠点台湾を固めアジア侵略反革命を軍事的に開始せんとする日

(B) 米中ソ三角核均衡体制に対する日帝のアジア侵略反革命路線の貫徹形態の性格

日帝は防衛拠点韓國、攻撃拠点台湾の軍事的確保を貫行せざるを得ない。従って、周の中米日ソ不可侵条約路線は破綻し、世界プロ独を目指す我々が、先進國武装斗争で三角核均衡と四角不可侵条約の反革命固定化を粉碎し世界革命戦争の硝煙の中に叩きこむこと以外に解体し止揚の道はないのである。

日帝独占ブルジョア内部の分裂、先行性ファシズムの流動過程の本質は、日帝ブルジョア内部に、就中、独占ブルジョア内部に分裂が始まっている。そしてこの分裂の政治反映として自民党内分裂「自民日中派と社会両党との野合がいわゆる政府危機を形成している。日帝の独占ブルジョアにとって、中國大陸市場と東南アジア市場をめぐる利害で分裂が表面化している。日帝総体として、社会的總資本の再生産構造を發展させている主動因は、対外競争力輸出である。輸出構造は、①北米市場、②東南アジア市場の二大市場圏が生命線であり、③北米市場において競争力をつけて勝利し、④東南アジア市場に重工業製品を柱に圧倒的シェアを確立してきたことが勃興を支え、一〇億ドル金、外貨保有に接近した要因である。しかし独占ブルジョア内部には、現在においても中國大陸市場によって産業の存立が支えられているものもある。例えば肥料産業がそれである。また世界市場へ売りつづけてきた各産業にとっては、個別独占内部に中国市場への誘発を感じた個別ブルジョアにもある。従って周四原則が台湾市場か中國大陸市場かを零か百かで突きつけた場合には、台湾市場をすて、も中國大陸市場を選択する個別ブルジョアが独占内部からも発生する。たしかに純粋に經濟ベースに限って、永遠に四角不可侵条約が守られるものと仮定し、貿易から利害得失のバランスシートをとるならば、日帝の總資本にとっても台湾市場より中國大陸市場の方が利益を上げる

ことはできよう。台湾におけるシエアが米帝を抜いて、一位を占めている日帝であっても、三角核均衡体制が永久に固定化し、かつ四角不可侵条約が永遠に保証されるものならば、即ち中共が東南アジアのいわゆる毛沢東系諸派を自国利害の下に統制して周辺革命を停止させようならば、正にこそって中国大陸市場へ台湾市場を捨て、乗り移ってゆくであろう。かつてナチの登場の前に恐怖したスターリンは、ナチスドイツをフランスブルジョアと其の軍隊の力を借りて包囲するために、フランス共産党を統制して、ブルジョア体制に一指もふれぬことを宣誓させ、フランス人民戦線のブルム政府に、フランスブルジョア軍隊がクーデターをかけない取引条件をとった。だが、その人民戦線政府でさえプロレタリアートの工場占拠斗争の波によってあっさりとい洗ひ流された。三〇年代の血の教訓を民族共産主義者なりに総括している諸党は、大國の自国利害の統制に対しては、自主独立路線と、中ソボナバリ路線との二つによってこれを民族共産主義的に避け、新ジュネーブ方式を公然と拒否させざるを得ない。従って周辺革命論を中国が放棄しても、東南アジアに、過渡的革命戦争が消え去ることはないし、中国が根拠地國家の位置を放棄すれば東南共産党への中共の影響は弱まり、後進國にあらたなプロ独派がパレスチナのように登場する。だから周恩来の中共日ソ不可侵条約は、必ず破綻するし、日帝は中国大陸市場へ台湾を完全に放棄して乗りうつることはできない。東南アジア市場の日帝にとつての位置は米帝とは、比べものにならないくらい重い、日帝にとっての生命線である。この生命線を軍事的に確保することが日帝総資本にとつての至上命令である。

この宿命性に、韓国を防衛拠点とし、台湾を攻撃拠点として押えねばならないのである。

日韓台軍事同盟の位置は、防衛攻撃の両面を結ぶものであり、その要が沖繩であることは軍事の初歩概念をもつものにとつて常識である。沖繩—台湾—インドネシアの回路が東南アジア市場も軍事的に押える攻撃的鎖の環である。以上の如く、日帝独占ブルジョア室内

関カンパニアと社共の院内倒閣闘争が政治焦点を国会を中心に作り出そうとする運動が9月から展開される。社会党は共産党へのまき返しを日中問題のヘゲモニーを利用して計る。日共は社会党のまき返しに対しルーマニア、北ヴェトナム訪問で日共、中共の和解によって対応しようとする。

中共は日先では日共を四つの敵の一つとした。だが第一の敵、米帝と取引して国連参加への道へ陥ち込んでいる。中共の米・中・ソ三角核均衡体制は武力均衡の下に日帝を押える狙いである。この道は武力共存の下に日帝の軍事力、核武装を押える道であるが故に、日共の議会主義革命路線—民主連合政府路線に適應するのである。だから日共は、米・中・ソ三角核均衡体制とその固定化を望む。そしてこの固定化の下で民主連合政府を追求しようとする。30年代のフランス共産党のように……。ヴェトナムのジュネーブ型停戦と中国国連加盟にもとづく武力均衡は日共にとつて望ましい。ルーマニアと北ヴェトナムへの官本の訪問は①三角核均衡と②ヴェトナム停戦と③中共との和解を展望したものである。

人民戦線派は、政府危機—倒閣国会カンパニア行動の中で一時期は伸長するであろう。だが後進國革命戦争と先進國武装闘争が旺盛に展開され、中共の三角核均衡体制の固定化を追求される人民戦線派は必ず破綻し、民主連合政府路線は先行性プロシズムの流動を経て挫折する。確実に我々はさせねばならぬ。プロ独派が固執の普遍的任務を果す時、「封じ込められた軍事の壁」を革命的軍事で突破するとき、プロ独派は確実に伸び人民戦線派と革マル派は退潮する。日本の新左翼は、混乱しつつ封じ込められた軍事という大局面の下での小局面で、この政府危機の波にのり政府危機から政治危機を引き出そうと狙っている。宮下四派は弱者連合大衆運動派として秋の方針を立てている。スケジュール闘争としての合法的国会闘争が組まれ大衆武装を社会革命と社会反乱とソビエト作りのために展開せんとして。この宮下四派の方針は倒閣運動への尻押しとして批准紛争闘争を闘うことにある。

部に中国市場派が發生し、それが自民党内部の親日中派と結合しているのである。従来になかった規模での分裂が根の深いところ起っていることは確実である。しかしだからといって、日帝独占体制が自己の政治的軍事的生存の厳しい現実を見失って三角核均衡体制に乗り四角不可侵条約を信じて、中国大陸市場へすべてをかけること考えることが誤りであり、帝國主義論の本質を見失うことになる。國家に総括されない資本主義は存在しなかったし、軍事力に保証を求めない帝國主義は存在したことはなかった。帝國主義の屋台骨をなし、國家と権力の命運を担っている、新日鉄や三菱独占体は、政策としての中国市場への対応を示しこそすれ、決して帝國主義の存立を如何なる市場構造とするのか、の基本をふみはずすことはない。イデオロギー的には出光のような三島自刃を全面的に謳歌するブルジョアジーを呼び出して来た。周恩来の市場をエサにした良いブルジョアジーと悪いブルジョアジーの分離路線や不可侵条約は、かつての独ソ、日ソ不可侵条約を提起したスターリン外交の二番目の茶番である。日帝政治委員会は、独占ブルジョアジー内部に根深い分裂をかかえたが故に政府危機を深化させている。

(C) 政府危機と大衆的武装斗争の高揚における諸党派の対応と我々の任務

秋の沖繩返還批准国会は、10月14日の天皇帰國を待って10月18日から開始される。自民日中派及び反佐藤グループと社・共連合との院内外勢力が政府危機を倒閣運動として展開せんとしている。国会では沖繩返還問題以前に秋の国連総会をめぐる重要事項指定問題が持ち出され佐藤退陣を迫り、佐藤内閣に批准させないというのが野党の方針である。沖繩返還協定反対の立場をとる社会党、共産党もその内実は日中問題、国連議席問題で院内倒閣を実現して批准を阻止するということである。したがって、社・共人民戦線派の院外倒閣

中核派は党内闘争の結果、「激動の7カ月派」が奪権しほぼ左派の方針が貫徹した。彼等はまた公然化していないが院内党派闘争に内的な判断を下し、プントの左翼の魂を最も継承するものが、鉄の戦線派と西派であることを確認したと伝えられ、赤軍の毛派への傾斜を批判しつつ、日向派の体質を右翼の体質への固定化として規定している。

これは70年代のマル学同機関紙「中核」の中谷論文が、黒田と宇野を折衷した日向を最良の部分と規定し、又ミニ革マル主義者・日向派は革マルがこの論文の筆者中谷が実は清水丈夫だと言ったことを真に受けて、「左派から評価された」と大いに気をよくしこの右翼路線への劣等感を丸出しにしていたわけであるが、今や中核派は、日向派のミニ革マル的右翼の体質を直観し大転換をはかったのである。

だが中核には生きた権力論がなく「激動の七カ月派」は三全路線の復権の延長に、政府危機を内乱へ、内乱罪を引き出す大衆的武装闘争、爆弾時代の開始を叫んでいる。彼等が爆弾時代を公然と叫び出したこと、実行の決意を固めたことを歓迎する。しかし現下の政府危機から内乱をアプローチする思考は、権力論を欠如させた者がおち入る当然の帰結である。政治の表皮で打闘が進み、政府危機が政治焦点を形成しようとも、日帝権力の実体は、基本路線を貫徹し沖繩派兵を着々と準備し実行している。攻撃の目標は国会ではなく正に自衛隊である。帝國主義軍隊解体である。権力の重心にグサリと突き刺さる軍事攻撃をしかけること、これこそが秋の攻撃焦点でなければならぬ。勿論、われわれも、大衆の高揚が国会へ向けて自然発生的に形成されるときは、断固として公然軍団を登場させて、権力との公然たる緊張関係を形成し、巨大な公然軍団をAIF・叛軍として形成する。

しかし、われわれの何よりの課題であり、任務である先進國武装闘争の火蓋は、地下正規軍によって切り拓かれる。秋における①政府危機と②公然軍団による武装闘争と③地下正規軍の重心攻撃（機

第一報告

世界プロ独と中国外交

杉 田 正 夫

動遊撃形態は、先行性ファシズムの流動と再編を通して狂暴な反革命のゆりもどしと右翼ファシスト集団の公然たる街頭登場を呼び出し、自衛隊の沖繩派兵を焦点として蜂起戦争派への集中攻撃が吹き、大衆的合法軍事主義者への規制も現在の小局面としての過渡に終りを告げて68/69年型に回帰するであろう。かかる段階を72年に展望しつつ、われわれの今秋の軍事闘争の質は規定される。また、党の体系的陣型も地下正規軍、公然軍団(AIF・叛軍)、破防法弾圧と闘う会として構築されねばならない。秋の武装闘争の鉄火の試練の真只中でこの先進国武装闘争を貫徹して現代革命の蜂起を担う単一党の体系的陣型を構築しうるか否かが、72年を闘い抜けるか否かを主体的に決する中心環であり、火急の任務である。

①米中北京会談の発表・金為替本位制の崩壊という、戦后米ソ核均衡世界を根底から揺る二度にわたるニクソンショックの前に、六七・十・八以来、先進国における武装闘争を追求してきた我が革命的左派、就中、七一・四・二八をもって「蜂起・戦争派」として自己を社会的勢力として定着化してきた部分に、自からの立脚点を揺がす程の動揺がおきている。中国共産党(以下中共と略す)の現在の評価をめぐる「蜂起・戦争派」の動揺は、まさに、世界プロ独をめぐる国際・国内党派闘争を通じて「第五インター・世界党」を建設していく闘いの中で決定的に重要であるが故に、我々は、ここに若干、我々の見解を集約的に展開しておきたいと考える。

②我々は、「鉄の戦線2号」(本年四月発刊)において、第一次プロントの分解・第二次プロントの崩壊を、イデオロギー的にみれば、革命共同派・社会革命派・中共派への三分解として総括してきた。第一次プロントの中核派・青解派・ML派への分解、そして第二次プロントの荒派・叛旗・情況派・赤軍派への分解を、以上のごとく若干の位相の違いはあれ、かかる三潮流への分解・屈服として総括し、第二次プロントから第三次プロントを展望する我々の立脚点を、第一次プロントの立脚点たる「第五インター・世界党」建設の路を踏襲し、第一次プロントの三分解に抗し第二次プロントを建設した路を継承し、かつ、第二次プロントがうちたてた現代マルクス・レーニン主義の最高の理論的成果としての「世界同時革命・世界革命戦争」を通じて「世界単一党建設—世界単一プロ独樹立」、ここを歴史的転回軸として「社会主義—共産主義」を展望する世界革命論を全面的に踏えてきたのである。

そして「鉄戦2号」においては同時に、かかる第2次プロントがもった「論理的任務」のみならず、唯物史観に裏づけられた党の「歴史的任務」を措定し、「有限の自己」を「歴史的現在」において、「歴史的任務」と「論理的任務」を(「個人」においてでなく)共産主義の「党」において統一する立脚点を提出し、あたかも客観的対象世界把握の次元から「党」を措定し、従って「戦略・戦術の党」しか措定できなかった第2次プロントの藤本進治・ルカーチ・ローザの世界を突破してきたのである。

③かかる我々の到達した地平から考察するならば、中共路線の部分としての「党—紅軍—解放区」路線に、いかに心情的シンパシーを持つとも、中共路線の総体を批判する基準は十分だと考える。

しかし悲しむべきことに、我が「蜂起・戦争派」として「封じ込められた軍事」の時代を「党の軍事」をもって突破せんとしている部分の中から、論理を心情に溶解させ、米中北京会談—中国国連加盟をめぐる、いささか危険な傾向が発生していることに我々は注意を払わない訳にはいかない。

かかる傾向の一つは、党的基準としては「世界プロ独をめぐる国際・国内党派闘争」として中共を批判しておきながら、「武装勢力」としての中国を、帝国主義とソ連から防衛する為、米中会談—中国国連加盟を「結果的」に「支持せよ」というものである。いわば、党的基準としての「世界プロ独論」による「批判」と、「武装勢力論」による「支持」という二元論である。

世界共産主義思想を立脚点とした「世界プロ独論」による中共批判とは、革マル式「硬軟スターリン主義批判」にみられるような単なる「反スタ」を中共に對置したものでないのだから、我々は、かかる党的・綱領戦略的基準で問題をたてふ以外ないと考えるのであるが、かかる傾向の諸君は、単純「反スタ」の對置を恐れるあまり、「結果的」に「支持」を表明することによって、「世界プロ独

をめぐる国際・国内党派闘争」における自己の立脚点を喪失し、帝国主義に対する批判の基準と、ソ連を物質的・イデオロギー的基礎とする人民戦線派に対する批判の基準をあいまいにさせている、と我々は考えるのである。

第二の傾向は、米帝とそして中国の「時」をかせぐこの政策を、「結果的」あるいは「積極的」に「支持」することを表明しつつ、先進国における現下の「封じ込められた軍事」の時代の中で、何んとかして「党の軍事」を軸に突破せんとし、現在、現象的には「爆弾時代」の到来をもたらさんとする中で、この路線を堅守せんとするならば、自己自身が「時」をかせぐことを正当化するか、ないしは、結果的に「世界プロ独論」を放棄して「一國主義」の傾向を強めるしかないのである。

突然、「日帝打倒」の立場を強調しはじめたりするのが、この好例である。

④米中北京会談開催予告として放たれたニクソン第一ショックの米帝の側からの政治的意図は、米中会談発表後、一ヶ月して放たれたニクソン第二ショックによって鮮明となった。即ち、米中会談開催までの米帝の側からの「時」の必要とは、帝国主義の不均等発展とベトナム・インドシナ革命戦争に追いつめられたドル危機の解決を、中国との妥協的ポーズの下にインドシナ革命の鎮静化を計りつつ、ドルの金兌換停止—金為替本位制の停止という戦後世界を画するドラスタックな手段と輸入課徴金10%により日帝を政治的・経済的に徹底的に追いつめ、円切上げ・自由化拡大をかちとんとする日米経済戦争・帝国主義間対立の激化とその収約に要する「時」の必要だったのであり、そして、このことを通じて米国内諸階層の不満を拡散させ、再収約することだったのである。

当然のことながら、この金為替本位制の停止がIMF体制の崩壊を意味すること、だがしかしながら、米帝常時侵略反革命戦争体制を自ら自身は、米帝がニューディールから第二次世界大戦参戦を通じ

て産軍複合体を確立し、その結果として戦後世界においても維持してきたものであり、従って米帝は南北大陸のアルタールキー経済体制へと後退することは出来ない。だから、IMF体制の崩壊と常時戦争体制の維持は米帝にとっては、三〇年代とは全く異なる、そしてより大なる矛盾の外化であることは明瞭である。であるが故に、世界革命の側にとっては、この「時」を、米帝にかせがせてはならない決定的「時」であることも又、明瞭である。

しかし、中共は、米帝の側の意図する帝国主義の不均等發展↓ル危機と、一方、常時戦争体制の維持の至上命令を、日米経済戦争を通じて日・独帝を常時戦争体制にひきこまんとする、いわば常時戦争体制の重心移動に目がくらみ、中共流の「復活する日本軍国主義」を、米中ソ三角核均衡の下に封じこみつつ、米中ソ四角不可侵条約で包みこむことに主要目標をおき、戦後資本主義体制の決定的崩壊の動揺過程で米帝に「時」を与えてしまったのである。ニクソンは、「ニクソン」訪中」までの「時」をたっぷりと、帝国主義間対立の激化の促進とその再収約に使うことが出来るのである。

⑤さらに我々は、中共の米帝との取引が、一般的「時」かせぎとしてだけでなく、若干の路線転換を伴っていることに注目しなければならぬ。それは国連加盟問題である。

中国の国連加入は、いうまでもなく、中国が国際「議会主義」路線へ転換したことを意味する。

勿論、中国の立場からみるならば、このこと自体は、国共合作等々、過去の歴史に中共がとってきた路線にみられる一つの「政策」。「戦術」の次元の問題としてある、と強弁できないものでもないかもしれない。

だが、我々が中共を評価してきたのは、戦後米ソ核均衡体制→米帝常時戦争体制に対して、一貫して「武装勢力」として位置し、民族解放斗争の物質的・精神的支柱を形成してきたことである。このことの評価は、たしかに、はっきりさせておかなければならない。そしてなお、国連の外に位置し、一貫して国際「議会主義」路線に

対決し、民族解放→武装斗争を支えていたことである。

しかし現在の米中北京会谈予告にはじまる米中接近は、まず中国国連問題として煮つまりつつある。このことは、六七年以来、先進国において武装斗争を展開してきた部分にとっぴかになる問題として突きつけられているかというならば、武装斗争を軸に人民戦線派→議会主義・平和革命路線との自己区別・訣別を行ってきた我々にとっぴかには、どのような次元において人民戦線派との党派斗争を展開し、かつ「党の軍事」を軸に武装斗争を維持・發展させていくのかを問う問題としてうけとめなければならない。人民戦線派の胎頭は必ずであり、これといかなる基準で対決するのか、世界プロ独をめざす自己の武装の立脚点が問われているのである。まさに、そうであるが故に、我々は中国の現下の路線と対決しなければならないのである。

⑥我々は、鉄の戦線1号以来、中共を、ソ共と異なる位置において評価してきた。

我々の基本的立場は次のことである。

即ち、革マル的にフルシチョフ主義→軟派スターリン主義、毛沢東主義→硬派スターリン主義などという三文評論を拒否し、又、ベトナム革命戦争の永続的推進が突きつけた中共路線の動揺を過大評価し、「根拠地国家論」にのりうつすることも同時に拒否しつつ、

中共路線を、体制間矛盾の下での一国民族社会主義可能論→米帝一元支配論→反米愛国国際統一戦線論→中間地帯論→周辺革命論と、我が世界革命戦略との間の動揺部分としてとらえてきた。

⑦一國プロ独樹立の段階において、世界革命戦略に国内建設の全てをひきつけ、いさいを世界革命戦争遂行にむけて党の正規軍を中軸に全人民を武装させ、国土を焦土と化しても世界革命戦争を貫徹しうるか否か、が問われていた。スターリン主義は、カドキ世界突

入時の、かかる新たな事態に答えることなく、国内建設路線に世界革命路線を従属させ、結果として、スターリン・ブハーソン綱領的「一國革命の総和」路線に転落したのである。かかるスターリン主義・一國社会主義可能論が、三〇年代を通じて、先進国において議会主義・平和革命→人民戦線主義へと純化されていくのに抗して、同じ一國社会主義可能論の枠の中にありながらも、後進国民族解放斗争を一貫した武装斗争の展開をもってきりひらいたのが中共である。

スターリン死後、ソ連がフルシチョフ主義として人民戦線路線を純化した時、中ソ論争として中ソ分裂が開始された。

この時点ではっきりさせなければならぬことは、第一に、フルシチョフ主義→ソ連が、「一國プロ独→一國社会主義→一國共産主義」論をうちたて、現代ソ連を「一國共産主義」への過渡としての「全人民国家」として規定し、現代ソ連における「階級斗争の不在」を宣言したのに対し、中共が「一國プロ独→一國社会主義」(社会主義にプロ独が残る)というそれ自体は誤てる規定をもちつつも、現代中国における「階級斗争の存在」を認めていたこと。

第二に、中国革命戦争以来、一貫して「党→紅軍→解放区」の陣型を堅守し崩さず、世界革命戦略にも人民戦線論としてこれをあてはめており、ソ連の官僚化した軍と全く異なる質をもっていること。従って、ひとたび、ベトナム革命戦争のごとく、それ自身は外在的ではあれ、突きつけられた問題に対して革命的に対応する力もっていたのである。六〇年代後半、中共の武装勢力への支持・連帯と文革の勃発とは、まさにかかる素地の上に描かれたものだったのである。

⑧中国内戦勝利から朝鮮解放戦争へばく進した中共が、米ソ核均衡体制の確立過程で、周恩来「平和五原則」外交へと屈折し、しかしこの路線自身が、インドネシア共産党の敗北を通じて挫折した。

この時点において、ベトナム革命戦争は、米帝常時戦争体制の一角を鋭く突き、まさに全世界の斗う人民の最先端において、米帝常時戦争体制打倒への突破口をきりひらいたのである。そして先進国の我が革命の左派への突きつけと同時に、中国に対しても、その世界革命戦略を問う位置に立ったのである。そして、中共は、前述した二つの素地の上に、ベトナム・インドナ革命戦争への全面的支援と、まさにかかる革命戦争への支援を貫徹せんが為の文化大革命をおこさざるをえなかった。まさに我々はこのことを高く評価し、最終的に中共が、その世界戦略、即ち、体制間矛盾の下での一国民族社会主義可能論→米帝一元支配論→反米愛国統一戦線論→中間地帯論→周辺革命論という「総路線」自身を検証、総括する契機が与えられてきたことをみてきたのである。

だが、しかし、現在の米中会谈→中国の国連加盟にみられる事態は、基本的にベトナム・インドシナにおける革命戦争の過渡性を、我が先進国武装斗争の一時的後退の手詰りの中で全面的な世界革命戦争へと發展させきれないことに規定され、中共指導部が文革を奪権斗争として収約したこと、そして中間地帯論→周辺革命論を総括し新たな世界革命の飛躍→全世界の革命的左翼を索引する途を封じってしまったこと、このことを冷徹にみておかなければならない。

⑨我々は、中共、北ベトナム等、民族解放武装斗争を中心的に担ってきた部分が、米ソ核均衡→米帝常時戦争体制きりくずしの突破口を切りひらきつつも、なお我が先進国武装斗争が「封じ込められた軍事」を突破しきれないが故に、武装斗争が「封じ込められた」状態であることを、きわめて主體的に痛苦にうけとめざるをえない。従って、我々が中共を批判する時、それは日向式に「世界革命を裏切った」などと、自から「軍事反対派」として「宮下グループ」に存在しつつ大声をあげて中共批判を展開する部分を徹底的に糾弾すること、そして、自から「蜂起・戦争派」として「党の軍事」を軸に武装斗争の貫徹をめざす部分として確立すること、このことを

大前提として確認する必要がある。
京浜安保共闘の諸君の闘いを「テロ」だと呼んだ「軍事反対派」には、中共批判の資格などないのだ、ということをはっきりさせておかなければならない。

このことを踏えた上で、しかし先にも述べたごとく、米中北京会談―中国国連加盟という中国の「政策」は、「政策」次元からとりあげてみても、ニクソン第二ショックをみれば明らかなごとく、それは「周恩来の勝利」ではなく、まさしく「ニクソンの勝利」としてあったのである。ニクソンは、米中北京会談までの「時」を、帝国主義間対立の煮つめ、日帝への挑戦とその収約の「時」としたのであり、イニシアチブを完全に確保した。中国は逆に、「国連加入」と「平和外交攻勢」としてしか展開できないのであり、まさにブルジョア政治次元での結着自身は、すではっきりついてしまっ

た。
我々は、米中ソ三角核均衡への移行と、それによる日帝の包囲―米中ソ四角不可侵条約への中国路線を、「世界単一党建設―世界単一プロ独樹立」という党綱領的基準を明確にしつつ、帝国主義の侵略反革命を世界革命戦争へ転化するべく先進国武装斗争を、帝国主義軍隊解体の直接攻撃として闘うが故に、絶対に容認することはできないのである。

「党の軍事」を軸に「封じ込められた軍事」を突破せんとする部分が、「結果的」に中国のかかる「政策」を支持することは、世界プロ独をめぐる国際国内党派斗争を放棄し、一國主義に回帰し、ソ連をイデオロギー的・物質的基盤とする人民戦線派―平和主義・議会主義路線の胎頭を粉砕する基礎を失うことになり、自から既に開始した武装斗争の立脚点それ自体を失う結果になると考えるのである。

第2章 党の軍事戦略と軍紀

第1報告 「攻撃の軍事戦略とは何か」

第2報告 「共産主義を鉄の五大規律に 打固め、党風と軍紀に結実せよ」

第一報告

攻撃の軍事戦略とは何か

序

九。一六三里塚斗争における機動隊に対する勝利は、再び、大衆的武装斗争に対する幻想を生み出しつつあるかにも見える。しかし、大衆的武装闘争が、新しい階級斗争の質―七〇年代武装斗争の主要な形態であるかのように考えることは誤りである。なぜなら、三里塚の勝利は、三里塚単独における闘いによってもたらされたのではなく、この間の、都市遊撃戦と深く結合しているからである。

六九年十、十一月斗争において、一万数千の機動隊を集中し得た権力は、この三里塚には五千三百の機動隊を集中し得たに止まり、数千の部隊を東京に止めておくことを余儀なくされた。九月十六日東京においてゲリラ戦は展開されなかつた。だが、それまで積みあげられてきた都市遊撃戦は警察の全部隊を三里塚に集中することを不可能にし、その結果、集中された労働者、農民、学生の地域ゲリラが我反帝戦線部隊を始めとして部分的であれ、これを粉砕することができたのである。こうした意味において三里塚斗争の質を規定していたものは、この間の都市機動遊撃戦であったといえる。いうならば、三里塚闘争は、この間の非公然闘争が形成してきた階級斗争の枠組みの中で闘われた闘争であり、さらにいうならば、中核派の大衆的武装斗争における突出をも、その内に抱接してしまいうる階級斗争の枠組が、七〇年代先進国武装斗争として形成されつつあるのだ。

我々の実践もいくらかはあったにせよ、その枠組の形成に最も大きな貢献をしたのが赤軍と、京浜安保共闘の諸君であることを否定することはできない。しかし、この枠組は、現在のな、権力―党。軍―階級における軍事的な力学関係としてしか形成されておらず、党―階級の権力に対する新たな政治的質を形成するところにはまだ

いきていない。これは、赤軍・京安の政治・軍事路線上の限界である。我同盟は、今秋斗争から七二年にかけての武装斗争の過程で、赤軍・京安のこうした限界を突破していき、二派の止揚を目ざさねばならない。

したがって、党の非公然軍隊の建設、すなわち地下正規軍の建設と展開こそが、七〇年代先進国武装斗争における、主要な問題であり、その質を公然と表現し、大衆斗争における武装プロ独派の潮流を形成していくものとして、公然軍団II反帝戦線の任務がある。

そのことともに、この七〇年代先進国武装斗争の地平が、どのような政治と軍事の関係としてあるのかを明らかに、喜ばしいことではある。しかし、この爆弾が、どのような政治として行使されているのかを不問に付すならば、爆弾はラディカルではあれ、一つの風俗になっただけであらう。クラウゼヴィッツを引用するまでもなく、軍事は政治の延長である。このことは、七〇年代先進国武装斗争においては、軍事が政治そのものとして扱われなければならないことを意味している。我々が何をどのように攻撃するかは、軍事行動であると同時に、政治行動でもある。武器をエスカレートさせることが武装斗争の高次化のすべてではない。一つの軍事行動が、権力にどのような打撃を与えるか、ということと共に、それが大衆の意識のどこに接点をもち、どのようにそれを分解させ、党はそれをどのように組織化しうるのか、ということの問題にせざるを得ない段階に、階級斗争は到達している。毛沢東の「三大規律八項注意」の現代的把え返しも、かかる視点からなされねばならないだろう。

七〇年代先進国武装斗争が、こうした構造を形成しつつあるにもかかわらず、我同盟における軍事的位置は、第二次ブント時代を含めて、主体形成—党形成のための軍事であった。もちろん、このことは、主体形成が党の革命として、熱烈な党内分派斗争を含みつつ展開されざるを得なかった我同盟の特殊性(普遍性でもあるが)と同時に、本格的な武装斗争の開始へ向けた飛躍の過程は、党主体

我々の到達点

我々は、「鉄の戦線」一号、「過渡期世界論・戦争論」において「革命戦争が帝国主義侵略反革命戦争を止揚する」(P三一)という立場を明確にし、帝国主義の常時戦争体制に対し、その政治軍事の弱点が、「常時戦争体制を任うイデオロギーが、ヤンキー民主主義の国際フロンティアにあり、戦争遂行の先行性フアジズム権力が形骸化せる議会制民主主義形態を残していること」にあることを見抜き、ベトナム過渡的的革命戦争における米帝軍の部分的解体の必然性を明らかにした。また、こうした米帝軍の弱さを、その成立過程における弱さともあわせもっている日帝軍II自衛隊の弱さを、その海外派兵の前提において、機動遊撃戦によって突き、自衛隊を解体せねばならないことを、明確化した。

ここに、我々の戦略の基軸がすでに提示されている。

また、我々は関西派の諸君が、「戦旗」第二五一号において、「恒常的武装斗争の若干の教訓について」を発表した時点において、この論文の積極的意味を評価したうえにたって、なお次のように批判した。「関西軍事委員会論文の最大の問題は、その平板性にある。それは、恒常的武装斗争についての規定のなかで一度も戦略概念が登場しないことに、端的に示されている。すなわち、関西の諸君が考える戦略概念はあるというべきかもしれない。その内容は、「党とプロレタリアートを蜂起に向けてきたえ抜くこと」である。しかし、戦略をこのように規定することは、問題の半分を語ったことにしかならない。そして、そのことは、実は何も語っていないことに等しい。すなわち、我々は、党とプロレタリアを蜂起に向けてきたえ抜く過程で、どのように対象の世界そのものを変革していくのかを語りねばならないのである。我々にとって、蜂起に向けての戦略とはそのようなものでなければならぬ。そうでないならば、主体の変革

を、イデオロギー的、政治的、組織的にも問うたということであり、それが党の革命の不断の遂行として、武装斗争の全過程において問われ続けるのだとすれば、かかる武装斗争における主体形成の側面は、決して切り捨てられてはならない。また、大衆的武装斗争におけると同様に、情勢がこうだから、やらねばならないというところからだけ軍事方針をたてたりすることも誤りである。

だが、我々が軍事を組織するにあたって、それを主体形成にだけ一面化するとは、また同様に誤りである。一、二回の戦闘なら、主体形成として位置づけることもできる。しかし、正規軍による恒常的武装斗争は、そうした位置づけだけでは決定的に不十分であって、それでは武装斗争を組織することはできない。正規軍の闘いは、明確に蜂起—内戦。世界革命戦争にいたる軍事戦略の中に位置づけられねばならない。そして、その軍事戦略は、その内に主体としての党の強化の展望を含み、対象世界の変革を通して同時に主体の変革を実現していく不断の過程としての戦略の中に包接されねばならない。そして、いままや、軍事行動が政治そのものとして存在しているとするならば、それは政治情勢との関係を含んで提起されねばならないことは当然であり、また世界プロ独の樹立までは、主体としての党も各体としての帝国主義に規制されているとすれば、我々の軍事方針もまた帝国主義の運動に制約されざるを得ないのである。

鉄線二号「世界プロ独への軍事問題」においても述べられているように、こうした軍事戦略の領域において積極的論理展開を行ってきたのは、「左派派1」。「現代革命の軍事学」である。そして、この論文の主旨は、「戦旗」第二五一号「恒常的武装斗争の若干の教訓について」にいたるまで継承されていると考えてよい。本小文は、鉄線二号に引き続き、この論文が提起されたことの意義は評価しつつ、その批判を通して、我々の軍事戦略を確立せんとすることを目的としている。

のみが目的とされ、即時的プロレタリアートから向目的プロレタリアートへの転化を戦略とする革マルと我同盟を区別する唯一の点は「軍事」になり、このように措定したとき、軍事そのものが、主体形成のための軍事、すなわち個別斗争と訓練のための軍事になってしまふのであり、こうした軍事的位置づけでは、日向派のそれと本質的に異なるところがなくなってしまう。関西の諸君の軍事に対する献身性にもかかわらず、軍事そのものを実は組織しえないのである。そして、この個別斗争と主体形成のための軍事の接木という路線のもとに斗われた二つの斗争—日本医大斗争と東村山斗争—の敗北の総括もまた、この点にこそ求められねばならないのである。そして、「鉄の戦線」二号「世界プロ独への軍事問題」において我々は、こうした関西の軍事に対する考え方の基調をなしている。「左派」第一号「現代革命の軍事学」の批判へと向い、その基礎がアンドレ・グリョックスマン「戦争論」であることを明らかにした。「左派」に対しては、「政治の継続としての戦争と党・階級の防禦に對して」「左派」の「思想」は防禦の優位に一切の基準を求めることにより政治を放棄する関係にあるということである」(P四〇)と、何よりも政治の欠除を批判するとともに、先進国持久戦論(防禦の優位)を批判し、A・グリョックスマンに対しては「ブルジョア軍事学」として批判した。

と同時に、「帝国主義確立期以降の戦争は、つぎの諸段階を経てきたが、現代過渡期世界の世界革命戦争によって止揚し消滅させられる。

- (i) 過渡的帝国主義戦争(ボアア、米西、日露)と一九〇五年革命
- (ii) 全面的帝国主義世界戦争とロシア革命の勝利
- (iii) 過渡期世界の帝国主義戦争と中国革命の成功
- (iv) 常時侵略反革命戦争と後進国の過渡的的革命戦争および先進国の恒常的武装斗争
- (v) 先進国内戦が切り開く世界同時革命II全面的世界革命戦争と

戦争の消滅

」として、帝國主義戦争と革命戦争の關係を明らかにした。
本小文は、これらの諸論文に鉄戦派の到達点を継承発展させるものとしてある。

A・グリニックスマン

A・グリニックスマンは、現代世界の戦争の解明を目的としている。その二つの極である、米帝の核戦略と毛沢東の「持久戦論」の対比を試み、毛沢東の優位を認めようとする。ここに左派が、A・グリニックスマンに傾斜した根拠がある。

グリニックスマンは、毛と米帝を次のように理解しようとしている。「振り返ってみれば、ナポレオンは二十世紀が実現する絶対的対象の類比の粗描、その予備的なおとりにみえる。」(A・グリニックスマン「戦争論」上P二八)

「クラウゼヴィッツの戦略とヘーゲルの政治は、ナポレオンという同一の対象を二つの理性によって定義する際に、すでに交叉していたのである。將軍(クラウゼヴィッツ)はイエナの戦闘に自己の考察を集中し、フランス軍の勝利の原動力と雷辱戦の可能性を同時に規定する。哲学者(ヘーゲル)は、戦闘の夕、皇帝ナポレオンのもたらした平和を決定的に受け入れて、静かな思いで思索する。一方は自分が勝利するまで、抵抗分子のままであるが、他方は、同じく長い間、皇帝協力者である」(同、P二五)そしてナポレオン戦争の総括として、二人の著書、「戦争論」(クラウゼヴィッツ)と、「精神現象学」(ヘーゲル)を採り上げ、「戦争論」に依拠するものとして毛沢東を、「精神現象学」に依拠するものとして、米帝の核戦略を規定している。

尤しかに、毛沢東は、クラウゼヴィッツに依拠している。特に、攻撃と防禦の不均衡にもとづく、防禦の(攻撃に対する)優位性の

理論に依拠している。

一方、米核戦略は、テロルの恐怖を基礎にしているという点で、ヘーゲルの戦争把握を継承している。理論的依拠はない。「テロルは、政治的闘争や内乱の最後の切札でもある、とヘーゲルは指摘している」(同、上、P一〇八)

我々は、「左派」の諸君のように、毛沢東の持久戦論を教条化し、それを、世界革命戦争に到る同盟の戦略の基礎とすることに反対してきた。しかし、この批判を日向派のように、持久戦にソウイェトと観念としての蜂起を対置することによってなすことはできない。我々は、それを、先進国武装闘争と蜂起(臨軍政府樹立)・世界革命戦争と世界プロ独という、人類前史を止揚する戦争の全過程として明らかにすることを通して批判しつづかなければならない。我々が、まず日本において開始しようとしている先進国武装闘争を、階級闘争の世界的な枠組の中で捉え、かつ、日本における武装闘争の蜂起に向けた軍事戦略を同盟の実践的指針として提出しなければならぬ。

重要なことは、戦争について語るのではなく、戦争を始めることである。しかし、戦争について語ることなく、戦争を始めることはできない。戦争が、戦争に関する言葉を主体化し、豊富化するにせよ。

クラウゼヴィッツ

左派とA・グリニックスマンを批判するために、まず、K・クラウゼヴィッツの提出している戦争に関する諸概念を検討することから始めねばならない。

クラウゼヴィッツは戦争自身の論理を指定する。しかし、その指定は、「戦争は政治におけるとは異なる手段をもってする政治の継続にほかならない」(クラウゼヴィッツ、「戦争論」岩波文庫・上P五八)し、そして、「ナポレオンこのかた、戦争はまずフランス

の側において、ついでフランスに対抗する同盟軍の側で、再び国民の本分となり、これまでとはまったく異なる性質を帯びるにいたった」というよりは、むしろ戦争の本性、即ち戦争の絶対的形態に著しく近づいた、と言うほうがいっそう適切であり、「こうして戦争の本分は、一切の因習的制限をかなぐり捨て、戦争に本来の激烈な力を仮借なく発揮するようになった。その原因は諸国民がいずれも戦争という国家の大事に関与したところにある。また、諸国民が戦争に関与した理由の一半は、フランス革命が諸国に影響を及ぼして、それぞれの国内に誘起した事情にあり、また他の一半は、フランス国民が諸国民を脅かしたところの危険にある」(同、下P二九一)のであり、このことは、「いかなる時代もその時代に独自の戦争を行い」、「それぞれ独自の戦争理論を持っていた」(同、下P二九二)ことを示すという、認識を前提としていた。

すなわち、政治が始めて下部構造から分離した資本主義社会の成立によって始めて、戦争は、その最も純化された形態に近づき、それ自身として考察されうるようになったのである。「戦争の動員が大規模になり、また強力になるにつれて、またこの動員が国民の全般的存在に關係するにつれ、更にまた戦争に先きだつて彼我両国間の緊張が高まるにつれて、戦争はますますその抽象的、絶対的形態に接近し、敵の完全な打倒はますます重要になり、また戦争の目標はますます政治的目的と一致し、こうして戦争はますます純粋なものとなり、ますますその政治性を失却するかのように思われる。これに対して戦争の動因が微弱になり、彼我のあいだの緊張が弛緩するにつれて戦争がその本領とするところのもの、即ち強力行使がとるところの自然的方向は政治の指示する線とますます緊密に合し、こうして戦争はその本来の方向からますます逸脱せざるをえなくなり、また政治的目的は理想的戦争の旨とすす目標からますます遠のき、戦争はますますその政治性を濃厚にするかのように見える。」(上P五九)

すなわち、戦争はより政治的であるとき、より粗野に軍事的のみ

えるのであり、より非政治的であるとき、より上品に政治的にみえるのである。

我々に引きつけていえば、軍事を組織することが、より高度の政治的質を要求するということであり、我々の政治的質があらゆる党派のそれを圧倒していなければならぬということであり、党の政治的団結の質が問われねばならないということである。

こうした前提をふまえて、クラウゼヴィッツは、戦争を論理として、概念として自己のものとしようとする。彼は、戦争を、理論的に、自己の脳ずいにおいて我がものとしようとする。彼は、戦争の分析を通して、戦争の始源として「概念としての決闘」を指定する。

「およそ戦争は拡大された決闘にほかならない」(上P二八)そこからクラウゼヴィッツは決闘を分析し、目的と目標と手段の關係を明らかにする。

「物理的強力行為は手段であり、相手に我が方の意志を強要することが即ち目的である。ところで、この目的を達成するためには、まず敵の防禦を完全に無力ならしめねばならない、そして強力行為という建前から言えば、このことこそ一切の軍事的行動の目標なのである。」

しかる後に、クラウゼヴィッツは次のように向上していく。まず、戦争一般を、第二に戦争の理論を、第三に戦略一般を、第四に戦闘を、第五に戦闘力を、第六に防禦を、第七に攻撃を、そして最後に、第八篇戦争計画において、再び上向の総合の帰結としての戦争を論ずる。

我々は、クラウゼヴィッツのこの戦争論体系のなから、必要な概念だけを取りだしておきたい。

「戦争は一種の強力行為である、そしてかかる強力行使には限界が存在しない。それだから交戦者のいづれもが自己の意志をいわずに相手と強要するのである。そこで彼我のあいだに交互作用

が生じ、この交互作用は、理論的にいえば、極度に達せざるを得ないものである。「我が方が敵を完全に打倒しない限り、敵が我が方を完全に打倒することを恐れねばならない」(同、上P三三、三九)……極限への上昇、両極性の原理。

「戦術は、戦闘において戦闘力を使用する仕方を指定し、また戦略は、戦争目的を達成するために戦闘を使用する仕方を指定する」(上P一四三)……戦術と戦術

「防禦の概念とは何か。敵の攻撃を「拒止する」ことである。それならば、防禦の特徴は何か。この攻撃を「待ち受ける」ことである。従ってこのような特徴が、常に軍事的行動を防禦的行動たらしめる、そして防禦はかかる特徴によってのみ攻撃から区別されるのである。しかし絶対的防禦なるものは、戦争の概念とまったく相容れない……要するに戦争においては、防禦もまた相対的な意味をもつにすぎない」(中、P二六八)……防禦

「防禦は消極的目的を有するが、しかし攻撃よりも強力な戦争形式である。これに反して攻撃は積極的目的を有するが、しかし防禦よりも弱い戦争形式である」(上P一八)

「一般に防禦は攻撃よりも強力であり、かかる事情が両極性のはたらきをしばしば消滅させる、また軍事的行動に停止状態を生じる理由もこれによってよく説明されるのである」(上P五〇)……防禦と攻撃の不均衡と戦闘の停止。

「攻撃の特に有利な点は奇襲にある。」(下P三六一) 「防禦者の守護靈ともいべき時間」(下P三六七) 「戦争、戦役は陣地のような空間的概念と並存する」(中P三〇八)……時間と空間

防禦の優位性に一般的に立脚した日和見主義的軍事理論であるといえる。もちろん、我々は、防禦をとるから日和見主義だなどというのではない。

左派は「われわれが防禦の優位を利用するとき、敵は攻撃に追いこまれ、完全に使い果して消耗する極限まで攻撃を強める。それゆえ、戦争は防禦―攻撃の不均衡の中で、不断の勝敗の可能性をふくんで持続し、戦略を分節させる(戦略的防禦―戦略的対峙(強化)―戦略的反攻)」と訳もわからないこと―防禦についてだけしか言っていないのに、なぜかP内で「反攻」が言えるのか。「完全に使はたす」こと―敵の解体は、攻撃なくしてない―をいっつけて「かくして、クラウゼヴィッツ的防禦の戦略は、毛沢東において、持久戦を通して革命という政治と一体化した。われわれの永続世界革命戦争の考え方もほぼここにあり」と言う。

クラウゼヴィッツにとって、防禦はあくまで戦争の一方の形式にすぎないのであり、その目的は「常に有利な講和を締結する」(中P四八)という「消極的目的」(上P一八)に止まるのであり、完全な勝利を取めることはできない形式なのである。まして、毛沢東の持久戦が防禦―点ばかりであるかのように言うことはできない。

毛は、自らを、「最終的勝利論者」(「持久戦について」といふ)、帝国主義戦争における日帝の敗北を見透しつつ、「抗日戦争の過程も、わが党の軍事的任務からいって、だいたひ、二つの戦略的時期にわけられる。前期(戦略的防禦と戦略的対峙の二つの段階を含む)においては主として遊撃戦争であり、後期(戦略的反攻の段階)においては主として正規戦争となる」(「戦争と戦略の問題」―毛軍事論文選、P三八七)として、正面戦を指定している。これまでは、防禦といつて言えないことはない(敵は日帝、戦場は中国大陸が、解放区の中軸に、敵を武装解除していく中国革命戦争の過程は、攻撃的な過程を含んでいえる)。敵は国民党軍(左派の誤り)、これに止まらない。防禦を自己の戦略とするためには、防禦が可能な条件を、党が持っているわけではない。防禦は、

「物体の重心は常に質量が最も多く集まっている点であり、また重心に加えられる打撃はその物体に最も有効に働くのである、更には最も強力な打撃は、力の重心によって与えられるが、これらの事情は戦争においてもまた同様である」(下P八〇)

「敵国土を完全に攻略しても講和に達するには十分でないような場合もある。……中略……このような場合に理論としては交戦両国における特に重要な事情に注目することが肝要である、としか言ひ得ない。かかる主要な事情から一個の重心、即ち力と運動の中心が生じ、一切はかかる重心によって決定せられる。それだから攻撃者は、全力を挙げて敵のかかる重心に総攻撃を加えねばならないのである」(下P二九五)

「アレクサンドロス、グスタフ・アドルフ、カル十二世、フリードリッヒ大王等にあつては、重心は彼等の軍にある。それだからもし軍そのものが粉碎されるならば、彼等の役割はそれで終りを告げたであろう。党派のために分裂している国家にあつては、重心は概ね首都にある。列強に頼っている弱小国にあつては、重心はこれらの同盟者の軍にある。諸国が相集まって結んでいる同盟にあつては、重心は利害関係の一致点にある。国民総武装の場合には、重心は主たる指導者達自身にある。それだから攻撃は、それぞれの場合の重心をなすところのものに向けられねばならない」(下P二九七)……重心

以上がクラウゼヴィッツ「戦争論」の若干の紹介と、そこで定式化されているいくつかの諸概念についての「戦争論」からの引用を終え、左派派・関西派の批判と、我々の主張の展開に入っていく。

「左派」

左派の軍事理論、とりわけ「左派派一、現代革命の軍事学」は、空間を時間に変え、時間を自らの守護神とすることによって、攻撃よりもはるかに強力な戦争の形式となる。

ところで、空間とは、国土であり、人口である。この空間を確保するために、左派は、「革命戦争統一戦線の建設のために、反帝統一戦線の枠をも越えた全国的、世界的な徹底した大な政治的動員が行われねばならない。その任務を徹底した大な政治的身に向かつて退却すること(戦場を「霞ヶ関」と「大学」から太平洋沖繩の空間に拡張すること)―は党においては、かかる大で徹底的な政治的動員を行いうる主体を創ること、人民の人民自身に対する関係、人民内部の矛盾を正しく処理する方法を創り上げねばならない。」(左派一号、P四八)

人民の人民自身に向かつての退却とは、要するにオルグと組織化に他ならない。それをどうしてやるかについては「戦場の拡大」と言うことに変わりはないのである。まず階級形成と党形成だ。

要するに、太平洋沖繩に、不可視の解放区を形成し、そこに敵を引きずり込んで解体しようというわけである。

自らの永続世界革命戦争の戦略を「防禦の戦略」と規定する以上、蜂起に到る過程の戦略(軍事用語ではない)は、ソウエト作りと大差ない解放区作りになってしまうのである。

この傾向は、戦旗二五一号、関西軍事委員会論文の平板さ―主体形成のための軍事論に受け継がれている。もちろん、我々は防禦の全てを否定しようとしているのではない。防禦を攻撃から切り放し、戦略にまで高めようとして反対しているのである。

たしかに、世界的に見たとき、インドシナ、中南米を中心とする過渡的戦争が、国際階級闘争の中軸的な位置を占め、国際反革命が、ANPOINATOに支えられながらも、主要には米帝一國によって任われている現在、国際階級闘争は、防禦の陣型をとって戦われているかに見える。

ゲバラの「第二、第三の、そして無数のベトナムを」というスロ

ーガンは、攻撃的であるが、防禦のスローガンである。

しかし、たとえは、ベトナムの例をみると、これが単なる防禦でないことがはっきりする。米帝にとって、現在のアメリカ社会の分解状況が示しているように、米帝軍のベトナムにおける敗北は、米帝本国における国民的結集軸の喪失をもたらし、クラウゼヴィッツの用語でいえば米帝にとって、重心は軍そのものであり、ベトナム人民は、これを攻撃し、解体しうる位置にあるが故に、防禦が同時に攻撃としての意味をもっているのである。

関西派は、このように、一貫して権力闘争の指向をもたない権力闘争と階級形成とを切り放す、武装革命主義的傾向におちいっており、しかも、まず「解放区作り」である。この点において、日向派と関西派の違いは、決定的なことであるが「武装」がつくか否かという一歩しかない。

日帝の重心 ― 自衛隊に集中砲火を

国際階級闘争において、我同盟が占める、そして、占めなければならぬ主体的位置は、過渡的革命戦争が国際反革命軍に対する分割された外線を形成しているのに対し、内線の位置であるといえる。

(注)「外線をとる場合の作戦線が敵軍に対して包囲的、或は挾撃的陣形をとる場合の作戦線であり、内戦はこれに對するものであるから、元来守勢的であるが、しかし外線に比して短小な内戦を利用し、或は軍の機動力を発揮して敵軍の突破を試み、或は集結した兵力をもって各個撃破の効果を取めることができる」(クラウゼヴィッツ、「戦争論」上P一六〇)

我々は、この内線の有利さを持っている。我々にとって、まず問題にされなければならない軍事戦略は、蜂起し臨時革命政府樹立に向けられた軍事戦略である。この過程における我同盟の主体的突出によって始めて、同質性を持って進行している国際階級闘争との連帯を勝ちとり、そのことを通して、世界党！

るが、我々は、自らの防禦空間を、党とそのシンパサイザーにしか持っていないし、第二に、まだ日帝軍―自衛隊が直接我々を攻撃するという状況はないからである。たしかに都市の空間は存在している。

しかし、これは我々の空間であると言えない。この空間は、我々の空間であると同時に帝国主義の空間でもある。

仏、バルタン戦争における都市空間と現在の日本における都市空間とは、その軍事的性格を異にしている。だが、我々は、この空間の中を政治警察と闘いながら泳ぎまわることはできる。

だから、決して我々に防禦の方法がないのではない。防禦の有利さを、すなわち一八二一年のナポレオンのロシア遠征におけるロシア軍の有利さや、抗日戦争における八路軍の有利さ、いいかえれば、敵を引きずり込んでたたくという有利さを、我々は持っているものである。

(出) 毛の持久戦論には、さらに限界がつく、「毛沢東の「抗日持久戦論」は、現代過渡期世界の常時戦争体制下とは全く異なる全面的帝国主義戦争の枠内で採用された持久戦論だからだ」(鉄の戦線二号、P四七)

だから、左派関西派のように、防禦を戦略にまで高めるとき、まず、「人民の人民自身への退却」と「人民内部の矛盾の処理」が戦略になってしまおうのである。我々の戦争が「攻撃」を主要な形式とするとすれば、その攻撃は、日帝、国際反革命の何に向けられねばならないかを、明らかにしなければならぬ。

いまでもなく、それは敵の重心に向けられねばならない。そして、我々の闘いが、蜂起―世界同時革命の条件を切り拓くための闘いである以上、日、米両帝国主義が同盟関係にあり、米帝がより強力であるにしても、まず、日本における蜂起の条件を形成するため(目的)に日帝の重心に向けられねばならない(目標)。

もし、米帝の重心に向ける時には、それによって生ずる分解を、

世界赤軍建設の具体的過程を自らのものとすることができる。

六九年秋期安保決戦における大衆的武装闘争と、合法十非合法闘争の、機動隊に対する敗北が、いわゆる六〇年代階級闘争の終焉を意味していたことはブント系諸派のなかでは、情況派を除いて、共通の認識となつてきている。全ての部分が軍を語り、軍を作ることを主張している。

そればかりではなく、京浜安保共闘を始め非B系のいくつかの組織が具体的に軍事を組織している。しかし、大衆的武装闘争の時代よりも軍による闘いはより鮮明に戦略を要求する。誰に銃を向けるか。そういう意味で、党が軍を組織することは、内戦とは呼ばないにしても、戦争を組織することである。

少くとも、戦略的にも、主体的にも、その質が要求される。六〇年代階級闘争は、機動隊の壁の前に敗れ去った。そして、その総括のなから、我々は軍を組織し、党の革命に着手した。しかし、軍を組織した段階における階級闘争は、大衆的武装闘争の時代の階級闘争とは全くその質を異にするのであり、決して、機動隊に敗れたから、軍を組織して機動隊を突破するということにはならない。

あるいは、こうしたことが要求されることがあるかもしれない。しかし、我々は、ここから先進国武装闘争を出発させることはできない。

先進国武装闘争の段階とは、第五インターの質をもった我同盟と、日本帝国主義―国際反革命同盟との「戦争」の段階である。軍事的に日帝を解体し、蜂起の条件を、主客双方の側において形成していく過程である。

この軍事的過程は、「攻撃」を主要な戦争の形式とすべきである。なぜなら第一に防禦の優位性は、空間を時間に変えろというところ、そして、その時間のイニシアチブを防禦者が持ちうるという点にある。

一國主義者―人民戦線派に集約されてしまおうであろう。したがって、京浜安保共闘は、軍事を展開してはいるが、本質的には、我々と異なる潮流だと考えるべきである。重心について、A・グリュックスマンは、クラウゼヴィッツの理論を「重心は計算しうる。…：重心は政治的権力が戦路上の力になる等価性の成立する点であり、攻撃の唯一の目標、防禦の最後の原動力である」(A・G「戦争論」上P七五)とまとめている。

すなわち、重心とは、日帝にとって「政治的力―戦路上の力」となる点である。いかにえるならば、重心は、日帝における、軍と国家とを一本として貫くイデオロギーの軸の具現化である。

それは、軍隊であろうか、首都であろうか、皇居であろうか、天皇であろうか、それとも国会や官邸であろうか？

それは、平和と民主主義が終焉した現在、明確にはない。だが、現在、日帝権力は自衛隊をかかるとして、海外派兵を媒介として育成せんとしている。

すなわち、反共ナショナリズムの軸として自衛隊をイデオロギー的にも形成しようとしているのである。(鉄戦一号、P五四、破防法研究一〇、仏論文)

しかし、現在の自衛隊は、政治的結集軸は弱い。この形成過程で重心となりつつある自衛隊を、軍をもって攻撃すること、これが我々の軍事戦略の基軸である。

だが、軍事を組織し、日帝権力の重心―自衛隊との戦闘を闘い、それを支援していくことが、蜂起にいたる党の闘いの全てではない。党は、その戦闘が形成する全社会的分解を合法下であろうと、非合法下であろうと、蜂起に向けて組織化し、定着させていかねばならない。

権力重心における闘いの質を、個別闘争や大衆的武装闘争を、党がその質で指導することを通して量に転化させていかねばならない。

そして、その過程は、量の拡大が、党の拡大としてだけでなく、

共産主義を鉄の五大規律に打ち固め、
党風と軍紀に結実せよ

心情的同調者の拡大でもある以上、戦略的時間を空間へ転化する過程でもある。
その空間の拡大は、我々にとって防禦空間の拡大であり、我々が、戦争における強力な形式である防禦をもとめることを可能にしていく。また拡大された量。空間は、それ自身として、質を持つようになり、それ自体として権力の性格を変え、自らの質を変えていくようになるであろう。
この段階において、それまで孤立しているかみえる武装闘争を展開していた党は、プロレタリアートとの強固な結合を勝ちとってゐるだろう。
そして、その時、党はまさしく、党の事業として蜂起の組織化に着手しているであろう。

われわれは「恒武闘」の方針を69年10・21の敗北の教訓から十一月を闘うに当って提起し、「佐藤訪米阻止闘争」の最新線を描いたのである。「恒武闘」の方針をもってたまたか十一月闘争の総括過程で、「左派」派の持久戦論を許し、日向君の「ソヴェト作り、恒平論」を許すに至って、我々は「帝軍解体・先進国武装闘争論」として「恒武闘」を再総括しなければならなかった。
我々の「恒武闘」の総括の立場は武装蜂起と革命政府は党が決定するという立場を堅持する。一般論としての民衆や大衆決起のうちに革命政府の樹立を語ることはできない。長期の、ねばり強い、死にもぐるいの、生死をかけた闘いがなければブルジョアジーに勝利することはできない。プロレタリアートを階級として組織指導し、この困難に勝利させることのできるのは世界革命の思想で武装された共産主義者以外にないのである。だから、蜂起と革命政府の樹立に向けた武装闘争は単一の世界革命党建設とともに進められなければならない。かかる立場は世界革命の思想で貫ぬかれるプロレタリア国際主義の内実として共産主義を軍事において組織する立場なのである。

それ故我々が、六九年に提起した「恒武闘」を総括するに当って精算主義的に毛沢東をもってする立場と徹底して党派闘争しなればならず、また、ソビエト物神崇拜主義「恒平闘」の立場を粉碎しつくすことではなければならない。

「蜂起戦争派」たるわれわれは単独闘争を貫徹してきたように、権力闘争・党派闘争を一体のものとしてとらえ、党の建設を「共産主義を軍事において組織」する。従って権力闘争・党派闘争を執拗に追求する党にしてゆく。この党の建設は過渡期世界の党の体質と

として党風・軍紀へと煮つめるものである。

破防法と党の革命

大衆的実力闘争の一時代を形成した共産同の戦略的中央権力闘争は、六八年の防衛庁闘争と六九年の霞ヶ関占拠となつて、権力から騒乱罪と破防法を引き出した。大衆的実力闘争の頂点となつたこの二つの闘争は「安保粉碎・日帝打倒」を大衆的合言葉として青年労働者の決起を戦場、工場占拠として、学生、高校生を全共闘運動として突き出してきた。大衆的実力闘争に於ける統一戦線は中核の現地主義と同盟の戦略的中央主義として階級闘争の新たな構造を創出し、相い競い合った「BBブロック」を軸に自然発生的に決起する大衆を政治的実力闘争へと索引してきた。

しかし、東大、四・二八に連続する大衆的実力闘争で帝国主義権力の性格転換が遂げられていた。議会主義政党へと純化した宮本日共と社民を「議会と法秩序」の維持派に抱え込むことによつて、行政権力強化へとあらゆる社会秩序の集中が行なわれたのである。帝国主義権力の議会主義を衣とする姿を表現してきたのである。

権力は三十年代を総括して、西独帝非常事態法、仏帝の破防法、米帝の常時戦争体制と銃殺、六十年代に登場した国際的プロ独派は権力と人民戦線派との国際的階級闘争の構造を帝国主義権力の転換のうちに主体的転換を獲得しなければならなかった。

常時戦争体制、非常事態法、破防法への闘争は法体系への闘争でなくその実体に対する闘争であること、それは、これまでの闘争の主要な形態からの転換である。

階級闘争の転換とは「情況派」のごとく、全共闘や反戦の大衆闘争組織の問題ではなく、党の問題であった。大衆闘争組織を如何に指導するか、という以前の党派の思想、組織の構造を根底的に闘うことなしに、六十年代プロ独派の運動は前進することはできなかったのである。ここに大衆的実力闘争の延長に「共産主義と軍事」を

を討論し、混乱を深めるか、分裂するかという深刻な問題がひそんでいた。

われわれは大衆的実力闘争の延長に突撃隊（赤軍派）を組織する許しがたい混乱を避けねばならなかった。攻防の弁証法は六九年秋前段階蜂起と臨時革命政府の樹立を、防衛庁、東大、四・二八の大衆的決起に夢想し、大衆的決起に触発された大衆的活動家を突撃隊に組織し、その心情を攻防の弁証法とした。

問われた事の本質は党の問題であった。階級闘争の転換とは何によりも党の問題である。従って平運に色目をつかう党派は四・二八破防法によつて、権力と我々の関係が何を本質として問われたのか理解することすらできない。かなしくもそれは情況派であったわけだが、赤軍派は情況派の大衆運動主義に攻防の弁証法と軍事を接木した。六十年代プロ独派が先づ、権力に封じ込められた階級闘争の主要な形態を武装闘争へ転換する党の武装、党の計画闘争の展開、われわれの戦略的中央権力闘争は戦略的武装闘争へと高めねばならなかった。反帝統一戦線も階級闘争の転換に見合つて再編させねばならなくなった。

攻防の弁証法と大衆の決起の心情を組織方針とする誤りは政治過程主義に求めなければならない。攻防の敵味方の主体的位置を、プロレタリアの内的矛盾の自己展開史として把え、党を階級闘争の媒介体とする戦術指導部に低め、階級闘争より自然発生的に共産主義運動と名づける、大衆運動主義的政治過程主義は、プロレタリアートを「直接的生産過程の諸結果」からのみ位置づけ、階級闘争の質を問うことなしに自然発生的なものに限定し、党をその指導部という、党の独自の闘い、世界党への闘いを否定する内容ももっていた。かかる政治過程主義の理論的根拠は藤本進治に求められていた。「革命の哲学」で藤本は次のように言っている。「主観的生産手段となったプロレタリアは私的商品所有者であるが故に、搾取と被搾取の対立を諸社会ではみることができなかった人間として主体を自覚する。」とし「しかし、それでもなおまだ自然成長的である。そ

逃亡したことの合理化のために「党がなかった、軍事反対派がいた」ことを理由として我々の前からも消えたのであった。すなわち学園に帰っていったのである。新たな軍事反対派の登場の契機は十一月にあった。

我々は恒武闘を破壊戦を破壊戦、武装中権、戦略的武装マッセンストとして内戦から位置付けていた。

我々の位置づけは武装闘争と蜂起・世界革命戦争の関連と党・軍・統一戦線の関連が十分になし得ていなかった。この段階では、都市蜂起に対して全国蜂起が、電撃的決戦に対して持久戦が、政治暴露と政策阻止が「都市構造」論に、という具合に論争は進行しつつも一方武装闘争は七〇年四・二八前段階争まで一貫して貫徹してきたのである。

だが、この論争は加わらなかつた新たな軍事反対派は我々と無縁の地帯で恒常的平和闘争論を完成させ、学園から党をかいま見、党の革命を完成させたつもりでいる。「恒平闘争論」は武装闘争の段階を四段階に整理する。

第一段階は大衆的実力闘争の段階たる、六七年十・八から現在とし、第二段階、自衛隊の出動、テロ、リンチの段階、第三段階、武装総決起と臨時革命政府の段階、第四の段階、武装蜂起・権力奪取の段階と、闘争段階を静的に区分した。そして、ソビエトはすでに全共闘、地区共闘として創出していると言っているのである。日向君によれば叛軍行委ソビエト全共闘、地区共闘として、大衆闘争組織を蜂起の機関にすることが「運動組織論」の目的らしい。だがこれはあまりにも一般的に語っている。

権力奪取以前に全人民の武装があるはずはない。我々は再び党内闘争を開始した。日向型「恒平闘争」ソビエト作りを粉砕しなければ破防法と闘う意義も、「七・六」の革命的意義も、十一月闘争の意義もすべて失なわれるからである。日向の登

場は、①我々がR.G.を先頭に最も勇敢に斗かって被逮捕され、非合法下されている状況で学園に巣を喰っていた敵前逃亡者を寄せ集めたということ、②日向君の革命論ガイストなるものが革命魂の抜けた紙細工であったという二重の意味で犯罪性をもっている。決戦なく、武装闘争なく」を論理化した日向「理論九号」の党内闘争は非妥協的でなければならなかつた。

恒武闘の主体的総括から 先進国武装闘争論の確立へ

武装闘争の常態化の方針を「恒武闘」として提起した我々は、十一月と無縁の地帯で持久戦論・「恒平闘」が登場するに及んで「恒武闘」の再総括を迫られた。ここに、「鉄の戦線」創刊号の革命的意義がある。

鉄の戦線は、過渡期世界論を「権力論、戦争論」を包括した内容をもって提起され、先進国武装闘争の現段階を「遊撃・機動戦」の展開として規定した。かかる武装闘争を担う主体を全共闘、反戦の大衆闘争組織の問題とすることなく、党の問題として突き出した。とりわけ、人民戦線派（民族共産党）との党派闘争抜きにあり得ないことを「先行性ファシズム論」の継承において明らかにした。

我同盟のソビエト論を止揚して、党・軍・統一戦線として党の独自領域を設定してきた。党の内幕構造として軍事を組織し、党と軍の関係をまた明らかにされてきたのである。かくして、武装闘争の常態化の方針は「先進国武装闘争論」として「恒武闘」それ自身の再総括を可能としたのである。

我々は「鉄・戦」創刊号の提起を受けて、二号では、政治戦略と武装闘争と党・軍の主体を形成する統一として「訓練としての武闘」を位置づけてきた。

しかも先進国武装闘争は全面世界革命戦争に至る後進国過渡的的革命戦争を牽引する唯一の主体的方針である。なぜなら、遊撃機動戦

として闘われる現段階の先進国武装闘争は、全面世界革命戦争を切り開く蜂起へ至る闘いであるからだ。従って我々の先武闘の現段階は、肉体を弾とする闘いでも、大衆の反乱型闘いでもなくまさしく正規軍の機動戦に持ち込む綱領的党的闘いなのだ。ここに党員の軍という場合の形式ではなく質の問題がある。

先進国武装闘争の現在の質

(1) 革命戦争論に位置づけられた後進国革命戦争を切り開いてゆくたかいたであり、世界プロ独へ後進国過渡的的革命戦争を止揚してゆく闘いである。この闘いを綱領的党的質をもってたたき抜くということ。

(2) 現代革命の蜂起を担う単一党への党建設を闘いとるための不可避的闘いとしての闘い。

(3) 現段階では党員で構成する正規軍が権力中枢へかける直接的破壊攻撃として開始され、反革命軍事の重囲に政治的軍事的打撃を与える質のたたきであること。

(4) この先武闘は党の合法的・非合法的的政治軍事系列に統一的に獲得された〇〇の非合法闘争およびA.I.F.D公然軍団の闘いの連続的体系的頂点として闘われる体系的一環である。

先進国武装闘争と党風・軍紀

共産主義者同盟の魂を党風に高めることを要求した先武闘は「鉄の五大規律」として獲得された。

鉄の戦線一号における先進国武装闘争論は党・軍主体形成の吾同盟の弱さを総括されて提起されている。権力規定をもたぬ党・軍の主体形成はあり得ないことを「先行性ファシズム論」の継承となつて党の内幕構造を確立した。即ち、「恒平闘」組織構造論や党派

闘争史観―防禦の優位論は攻撃なき主体形成主義である。故に、攻撃的非法法党の政治軍事体系は党・軍・統一戦線論を党の主体的独自の構造のうちに確立し、先行的ファシズム権力、帝国主義軍事体系に勝利する革命的戦闘組織でなければならぬ。機動遊撃戦は党・軍主体形成を同時的進行として組織する。更なる党の革命を決意した我々はあらゆる日和見主義とりわけ決戦なく、武装闘争なく」を論理化した新たな軍事反対派粉砕の成果として「鉄」創刊号があった。「鉄」二号は「訓練」を正しく位置づけ、攻撃と防禦の関係を攻撃的非法法党の体系的構築して獲得した。現代革命の核心が帝国主義軍隊解体である、と言つて「鉄」一号の過渡期世界論―権力論―戦争論を武装闘争における政治的戦略として獲得する。この観点から「左派」を批判した。

吾同盟の軍事戦略は「世界暴力革命論」を総括的に継承され「鉄」一号となった訳だが、その緻密化は「攻撃―防禦」の関係を踏まえて「重心攻撃論」へと発展したのである。

かかる政治軍事的発展は武装闘争の常態化へと実践されなければならぬ。故に、先進国武装闘争の質的規定を(1)と(4)として位置づけた。武装闘争―大衆的実力闘争の質的規定を(1)と(4)として位置づけた。武装闘争―大衆的実力闘争の質的規定を(1)と(4)として位置づけた。武装闘争―大衆的実力闘争の質的規定を(1)と(4)として位置づけた。

かかる攻撃的非法法党は、如何なる精神で統一されてきたか。言うまでもなく、共産主義を軍事において組織することであった。

「鉄」二号「綱領獲得諸前提」は、過渡期世界の党を措定すると同時に「共産主義を軍事に組織する」ものとして提起している。階級形成―党形成が「直接的生産過程の諸結果」から直截に規定できないこととして、マルクス主義を現代過渡期世界の党へと結実化させた。吾同盟の内実を「共産主義論」として獲得した。

われわれは、同盟の魂であるプロレタリア国際主義と闘争のダイナミズムを発展させる「共産主義論」を獲得することによって「蜂起の党」の体質を党風としてゆかねばならぬ。綱領・規約を何ダース積み重ねても党風は獲得できない。党風は革命論の実践においてのみ獲得される。われわれの党派の存在は実践以外にない。日向

派のように六九年敵前逃亡者によって形成された党派は革命的党風としてプロト魂を継承することはできない。だから、社青同やフロントに三里塚日和った、と言われて一言も抗弁できないのである。「やったか、やらなかったか」はあまりにも素朴であるとは言え実践的党に於いての原則でなければならぬ。日向派はすでに党派性を喪失した。宮下グループにとつてすら手足まといになっているのだ。党風は革命論の実践においてのみ獲得される。しかし実践は規律を要求する。

ではどのような党風をわれわれは形成しているのか、それは、プロレタリアートの革命に対する献身性としての英雄主義、自己犠牲の精神である。これは階級・革命に対する忠誠として貫かれるものでなければならぬ。「鉄」二号では、「内発的自発性」として提起された共産主義者の歴史的任務と論理的任務の党への統一である。「鉄」二号で論理化された共産主義者の党の任務を「六月―三里塚闘争」で具体化したことを踏えて党風を形成しようとしているのである。われわれの党風は白兵戦を闘い抜きプロレタリアートに革命的規律を教育するものである。このことをわれわれは「肉弾の思想」などとはかたは言えない。白兵戦は肉体を弾とするほどの「勝利か死か」としてあることを踏まえる。また、このようなたたかいに勝利し抜くことなくプロレタリアートの独裁もないであらう。

さて、マルクスはバリ・コミューンの労働者の英雄精神をたたえ、レーニンは一九〇五年の「総稽古」における「ねばり強い、死にもくぐるい」たたかいを称えた。トロツキーは「装甲列車」で軍の規律を形成することに何よりも全精神を集中したのであった。そこで、最もこの点で、つまり組織を形成するに当って、繰返し強調してきた、レーニンから学ぶことしよう。

レーニンは「何をなすべきか」「共産主義内「左翼主義」「小児病」等、組織問題を扱った論文「モスクワ蜂起の教訓」等、機会あることにプロレタリアートの党の規律問題を強調している。

「律」にしてきた党風は革命論の実践として獲得されるであらう。

かかる党風と軍紀はわれわれの一切の行動を日常政治生活に主体化されてゆかねばならない。その場合はっきりさせておかねばならないのは、いわゆる自己批判問題に対する明確な基準を定めることである。革命論とその実践を主体化できない自己批判はあり得ないということ、革命的規律のないところに革命闘争もあり得ないのである。「中央集権」とも「厳格な規律」これを無視するものはプロレタリア革命を欲しないものである。従って、一般的抽象的自己批判を認めるような党の体質は掃いてゆかねばならない。自己批判とはプロレタリア革命、党に対する献身として受けとめつつ、革命論を実践の主体化するのであるが故に、党が要求する任務に耐えねばならず、権力との緊張関係を組織する事でなければならぬ。吾同盟の党風とは以上のことを確認して形成された。

鉄の五大規律

同志諸君！全国の読者諸君！

わが首都反帝戦線は、信じがたい程のスピードで勢力を拡大し、断呼として六・三〇防衛庁攻撃闘争を貫徹したことをまず報告しておきたい。

六〇年代型の初歩的武装闘争が六九年四・二八闘争へむけて日本の左翼が党的体系を軍事において問われている時、即ち、党の内部構造としての正規軍建設が問われていた時、このことに無自覚な諸派は、十一月闘争の挫折と六〇年代型大衆武装の限界が、全共闘全国反戦組織の形骸をそのまま七〇年代にもち込み、遂に、沖繩調印を目前に、みじめというおろかな八派分裂を結果した。

鉄の戦線で強固なイデオロギー的意志一致を獲得しているわれわれは、七一年四・二八登場でかかげた「八派解体・二派融合」の路線を固く堅持し、口先の路線とプラグラマティックな戦術対応という

「たしかにいまでは、もうほとんどだれでも知っているように、わが党にもっともきびしい、真に鉄のような規律がなく、労働者階級の全大衆が、すなわち労働者階級のなかの思慮に富み、誠実で、献身的で、影響力をもち、おくれた層を導びき、ひきつけもすることのできるすべてのものが、わが党をこのうえなく完全に献身的に支持しなかつたならグリシェヴィキは、二年半はおろか、二ヶ月でさえ、権力をもちこたえられぬであらう。

プロレタリアートの独裁は、より強力な敵すなわちブルジョアに對する、新しい階級のまったく献身的な、もつとも假借ないたたかひであつて、このブルジョアに對する反抗は、彼らが打倒される（たとえ、一国的であれ）ことによつて十倍にもなる。彼らの威力は、國際資本の力、ブルジョアに對する國際的連繫の力と強固さにあるばかりでなく、習慣の力、小規模生産の力にもある。なぜなら小規模生産は、残念ながら、まだこの世におびただしく残つていて、この小規模生産が、資本主義とブルジョアに對して、たえず、毎日、毎時間、自然発生的に大量に生み出しているからである。これらの理由から、プロレタリアートの独裁は不可欠である。そして、忍耐、規律、剛毅、不屈、意志の統一を必要とする。長期の、ねばり強い、死にもくぐるい、生死をかけたたたかひがなければ、ブルジョアに勝つことはできないのである。

くりかえしていえば、ロシアにおけるプロレタリアートの独裁の勝利の経験は、この問題について考えることのできる人々、あるいは、深く考へてみたことのない人々に、プロレタリアートの無条件の中央集権ともつとも厳格な規律が、ブルジョアに勝利するひとつの基本的条件であるということを、明瞭に示したものである（レーニンの）

レーニンのこの教えを「勝利か死か」という武装闘争の時代では徹底して学び通すこと、「六月―三里塚闘争」で要求した党風と軍紀の具体化もこの精神にそつてなされてきたということである。即ち、「鉄」二号で提起された「党風と軍紀」の獲得を「鉄の五大規

二元的分裂主義を尻目に、断呼して独自路線を六・三〇防衛庁攻撃闘争として貫徹したのである。

八派が沖繩調印を目前にして全くみじめな自壊をとげ、かつ、それそれが二派と七派へ利害得策野合をぶざまに展開している時、わが首都反帝戦線のみが、一人断呼として闘いの方向を明確に示し、七二年自衛隊沖繩派兵との対決へ第一歩を踏み出したのである。

かかる独自の展開が出来る力を持った蜂起戦争派は今や首都においては、鉄の戦線で強固な意志統一をはかり「鉄の五大規律」をもって党風と軍紀をかくとくしつあるわが首都反帝戦線以外にあり得ない。

今や、革命的左翼に問われている問題の本質は、帝國主義軍隊解体し自衛隊解体という現代革命の核心を沖繩自衛隊派兵阻止闘争として闘うことであり、しかも、この闘いを自衛隊直接攻撃闘争として貫徹し、六九年秋期闘争の挫折以降封じ込まれた反革命の軍事的重囲を突破し、高度な質において先進國武装闘争の火蓋を切り、現代革命の蜂起への道を真しぐらに突っ走ることである。

このような確信を政治路線にも軍事戦略的にも獲得出来ない諸党派は、プザマなこの分裂を革命論として止揚し、現代革命の蜂起への道である先進國武装闘争を闘うP.L.O.型統一戦線組織に自己を位置づけて再編出来ないのである。

中核・四トロ野合の根拠も、それが野合であるかぎり、先進國武装闘争を通した蜂起の道を突破する武装統一戦線ではありえず、ましてや、宮下グループの社会革命派と構改ソビエト派とミニ革マルソビエト派の弱者連合においては、再分裂のための、再分裂を前提とした野合でしかありえないのである。

彼等が唯一党派性としているのは、大衆闘争を低次に（六〇年代闘争として）展開し、ノンセクト黒ヘル集団にこびを売って自己満足するだけだった。

この間、その最たる醜態をさらしたのが日向派である。六九年秋の安保決戦という國際的にも決定的であつた闘争を日和ることを立

却点。… トラとの戦線逃亡を出発点として生れた日向派は、六九年闘争のもつ、軍事的挫折の重い意味が全く自覚出来ずみずから七〇年ボケ、合法ボケしているが故に、反革命軍事の重囲の下で恒常的平和闘争をくりかえし、ソビエト型に八派を再編することが、行為的現在における場所的立場に立つ日向派の任務であると、恥かしくもなく公然と述べた。

同志諸君！すくなくとも第二次ブントの戦線には日向一派が恥知らずにも黒寛Ⅱ革マルの党派専用語Ⅱ相互依存・相互反発や行為的現在における場所的立場Ⅱを盗用するまでは、一語たりとも黒寛・革マル用語などつかわなかつたし、そんな言葉は聞いただけで吐きをもよおすがブント魂であった。

黒寛の哲学と対象分析と組織論に依拠しつつ、これに異質な体系である宇野を無自覚に接木した日向の路線、「理論戦線」No.9/10が完全に破産し、もはや単なる修正や部分的訂正では路線自体を全面的に否定しなくてはニッチモサッチもいなくなっているのが日向派である。

この路線上の破産を、なんとかとりつくり組織を維持しえていた理由は、恒常的平和闘争という大衆カンパニアで活動家の低次の要求を満足させたという点だけである。

だから彼等は、権力闘争ではなく、叛旗・情況を大衆闘争に登場させないという物理的手段としての内ゲバだけが唯一の闘争となり八派をソビエトに再編することだけが、唯一の組織路線であったのである。

ところがである。八派は自壊した。八派の自壊は八派のソビエト型組織化路線そのものの、救い難い破産だった。

最早や、誰れの目にも白日の下に鮮明となった破産だった。大衆闘争と八派のソビエト化という組織路線だけが残された道であった日向派は、彼等が生きてのびる最良の場所である八派共闘が分裂することによって、いよいよイデオロギ・内実までが、いやその崩壊が日向派内部で行われることになっていく。

事的一致を党風とする党は、党内密構造の下に軍を組織化するが故に、われわれは軍紀を党風と共に獲得していることである。第三はこの党風と軍紀の下に党で組織する地下正規軍が建設され、この党と軍に体系的に指導される政治軍事系列としてA.I.F.・叛軍・破産闘が組織されているからである。これが力の根源なのだ。全国的同志諸君！だからわれわれの六・三〇におけるA.I.F.突撃隊の防衛庁攻撃は、A.I.F.公然軍団のみの切り離された正面攻撃戦であったのではなく、正に党の軍事的政治的一貫体系のうちに、先進国武装闘争を闘う地下正規軍の闘いに引つけられ連続する体系的闘いであったのである。

全国的同志諸君！かかるイデオロギ的強固な意志一致が不断に党風としてA.I.F.に浸透しているが故にこそ、六・三〇の七戦士は官憲が「仏派の根性は判っている諸君は皆完熟だろう」とはじめから、あきらめている程、またその官憲の評価にふさわしい立派な完熟闘争を貫徹したのである。

全国的同志諸君！全都の読者諸君！

「鉄の戦線」でイデオロギ的一致を獲得し、宇野・黒寛の体系を完璧に批判解体しえているわれわれは、このイデオロギ的獲得と確信を、蜂起を目指す単一党へと打ち練え、先進国武装闘争を現代革命の蜂起への道であると共に先進国P.L.O型統一戦線を通して蜂起を可能にする党への検証過程として同時に把えている。

そして、かかる党の共産主義を軍事に組織する力をわれわれは党風と軍紀へと集約したのである。

全国全都の読者諸君に、われわれの党のイデオロギと政治軍事路線を凝縮する「鉄の五大規律」を提起し、全国全都の革命的かつ極左的活動家諸君へ、われわれへの党的結集を大胆に呼びかけるものである。

すでに、執行猶余という栄光を東京地裁からいただいた日向派の佐々木書記長は、どういふわけか日向君の破産したイデオロギにはついていけず、分裂行動を続けていると伝えられている。未だ除名の報が公然と機関紙上に発表されない以上、佐々木フラクションは日向派に残っていると見てよいのではないだろうか。

ともあれ、われわれ首都反帝戦線は、彼等のイデオロギ的破産と組織路線の自滅と組織内派の混乱について、革マル的執念でアレコレ言う趣味を合わせたくない。

全国的同志諸君！

ブルジョア新聞においてさえも、左派の仏派と右派の荒派と社会的規定を与え、六・三〇闘争以降は、中核系、青解系、ブント仏派系の三つのデモが貫徹されたと評価された。首都の闘いにおいて、わが首都反帝戦線が、中核系と青解系の二分化に決裂して、堂々と、現代革命における蜂起にむけて先進国武装闘争を闘い抜く蜂起戦争派として登場したことを明らかにしておきたい。

社会的政治勢力（蜂起戦争派）として、独自の地歩を首都の地に確立した首都反帝戦線が、如何にかくも雄しく、かくも確信に満ちて、恐るべき組織密集力で、先進国武装闘争の火蓋を切るための闘いへ決起しうるのだろうか！そして何故にかくも急テンポな組織拡大が、中央への集中心力をもって獲得されるのだろうか。

全国的同志諸君！この秘密の第一は、われわれが、体系的イデオロギをブントの継承性をもって獲得し、組織末端に至るまで徹底したイデオロギ的同質性を高い水準において獲得しつつあるからである。即ち、党の歴史的任務を論理的任務として党において統一すること、そしてかかる統一としての共産主義を軍事において組織することが、現代過渡期世界の党の質を獲得する中心的任務であることを党風としていることである。第二はかかるイデオロギ的軍

鉄の五大規律

- (一) 権力に対する攻撃を正規軍の質において闘うこと。
- (二) 権力の攻撃に対し完熟をもって党を防衛し抜き、七年以上の獄中生活に耐えること。
- (三) いつ、いかなる時でも、非合法生活に直ちに転換し党活動に耐えること。
- (四) 共産主義の論理的任務と歴史的任務を、以上の基準においてイデオロギ的に獲得していること。
- (五) キム同盟員に対し、自己の獲得した基準をもって対決し変革させうる意志と力をもちうること。

以上

全国全都の活動家諸君！読者諸君！

先進国武装闘争とは、訓練された党员、即ち、訓練された共産主義者！歴史的任務と論理的任務を自己において統一した者！によってのみ担われるべきである。

獲得された共産主義イデオロギは党の軍事において集中的力となる。大衆運動の延長上には先進国武装闘争は組織出来ず、訓練されない活動家は七年以上の刑に耐えられずに自白し、かの赤軍派の如き党組織の解体を招くのである。

全国全都の活動家諸君！鉄の五大規律で建軍される、わが軍の下に結集せよ！

第一報告

帝國主義の侵略反革命の軍事勢力に対決する蜂起戦争派の内戦めざす叛軍行動委員会を構築せよ！

山下 闘士

9・9 東京叛軍行動委員会結成大会へ結集し、現代革命の核心に帝軍（自衛隊）解体の闘いを大胆に進撃せよ！

先進的労働者、学生、市民の皆さん！我が東京叛軍行動委員会（準）は、四・二八沖繩斗争に反帝戦線の隊列と共に、八派解体・二派糾合のスローガンの下、蜂起・戦争派叛軍としての登場を勝ちとり、我々の位置を全階級戦線に刻印して以降、五・一七、六・一、六・一五、六・三〇防衛庁突入斗争を首尾一貫果敢に闘い抜いてきたことを報告したい。

反革命的軍事に封じ込められた軍事の壁を突破し得ない現局面にあつて、叛軍闘争の攻撃的な展開をもつて、統一世界市場の分析開始を基底とする常戦体制の重心動揺と中共の対応を媒介として、やがて開始され連続するであろう政府危機状況の大波小波に動ぜず、あくまでも日本帝國主義軍隊の解体、自衛隊解体を目指す重心攻撃の闘いを火急の任務とせねばならない。東京叛軍行動委員会結成大会を大衆的に勝ち取るべく、こゝに帝軍解体の戦略的位置と、叛軍斗争は如何なる質に支えられ、如何なる形態で闘い抜かねばならないかを基軸的に明らかにしたいと考える。

Ⅰ 現代過渡期世界における帝軍解体の戦略的意識とは何か！

我々は日帝の70年代に於ける総路線が軍事外交路線として在り、

いてもこの間明らかになされているように自衛隊の沖繩派兵は沖繩出身者を優先する事によって本土・沖繩人民のアレルギー除去に努めている程の念の入れようである。（沖繩への帰郷広報隊派遣を見よ）更に云うなら、自衛隊の派兵を返還時より一年間で六八〇〇人、経費一千四百億円であり、こゝに日帝の七〇年代の基調路線が何であるか、一目瞭然となったであろう。

かかる視点に立つて日帝の権力転換の性格を見とらねばならない。日帝にとつては国内権力を明確に常時戦争遂行機能を持つ権力として確立することが主要目的であり、こゝに議會を形骸化させつつ残存させる事によって人民戦線派をつなぎとめ、破防法でプロ独派を破壊するという権力再編の質を見抜かねばならない。これが先行性ファシズム権力であり、従つて帝軍解体と破防法粉砕こそ我々が死活を賭けて闘わねばならない課題であり、「小西三曹の登場が我々が権力の実体に打ちこんだクサビであるなら、破防法こそ権力が我々に打ちこんだクサビである」（仏アビール）ことを深く銘記せねばならない。

さて、今、帝國主義諸列強権力は下部構造の不均等発展がもたらす矛盾と三ブロック階級斗争に挾撃され世界的にのたうち廻っており、とりわけ常時戦争体制の頂点をなす米帝軍の建軍イデオロギー支柱の端緒的崩壊が下部構造の破壊と同時に交叉して進行し①ニクソン訪中および②ドル兌換停止と日帝に対する輸入課徴金10%と物価賃金凍結令となつて露呈されたのである。

中共のニクソン招待外交とは、不均等発展の法則に深部からゆきぶられ、国内プロ独派とインドシナ革命戦争の挾撃の前に常時侵略反革命戦争体制の経済的基礎と政治イデオロギー及び戦争貫徹のため建軍支柱を部分的に解体され始めていた米帝に時を貸し与えるため中ソ三角核均衡体制へと固定し、かつ沖繩派兵から防衛拠点韓国、攻撃拠点台湾を固めアジア侵略反革命を軍事的に開始せんとする日帝に中国貿易市場をエサにして日中米ソ不可侵条約を誘いかけ、日帝を三角核均衡の下に固定化しようとするのが中共の対外路線であ

第3章 攻撃的非合法党の組織体系

第1報告 「帝國主義の侵略反革命勢力と対決する蜂起・戦争派—叛軍行動委員会を建設せよ」

山下闘士（叛軍行動委員会代表）

第2報告 「破防法弾圧と闘う会を武装斗争の陣型として構築せよ」

青樹繁雄（破防法弾圧と闘う会）

それは現代過渡期世界を貫く帝國主義の不均等発展法則に規定されて存在し、自衛隊の海外派兵等もかかる観点から把握されるべきであり、それとの関連で日米反革命同盟再編の質をも解き明かさねばならない。但し、現代過渡期世界は一九一七年の如く、軍國主義の不均等発展対立↓帝國主義戦争とストレートに発現するのではなく、むしろ現在のインドシナ過渡的的革命戦争を頂点とした國際的なプロレタリアートの闘いの結合。第二次大戦後開始された武器、兵器体系の異常な発達に規定され、帝國主義戦争としてストレートに矛盾を外化し得ず、互いに帝國主義は不均等発展し、対立しつつも國際反革命同盟によってブルジョアジーが政治的にも軍事的にも結合せざるを得なくなつており、従つて当然にもそれらの事によつて帝國主義は戦争性格を政治的にも技術的にも変化させており、それが侵略反革命戦争であり、この様な侵略・反革命を帝國主義の反革命同盟の相互の再編を絶えずくり返しつつ貫徹せねばならない。

かかる観点から現在の日米反革命同盟再編の質を把握するならば、即ち、戦後圧倒的な経済力と軍事力によってIMF一元体制を確立し、全世界を支配した米軍が帝國主義の不均等発展対立によつてドル危機を招き、就中、東南アジアに於けるベトナム人民の英雄的闘いの前に敗北を余儀なくされ、東南アジアに於ける相対的地位を低下しつつあると云う、かかる事実の中に日帝の新たなる野望を見とらねばならないのである。そして、それがまさしく六九年の日米共同声明に見られた如く、日帝の東南アジアに於ける政治的、軍事的比重の重大さに基く七二年沖繩返還であり、自衛隊の海外派兵なのである。六月の沖繩返還協定調印もこの様な日帝の新たなる東南アジア侵略反革命策動の一貫として在る事を見てとらねばならないし、この事がとりも直さず日米反革命同盟再編の環なのである。そして、この沖繩返還は現在、米軍基地、諸施設の日本政府への返還、そして沖繩への自衛隊派兵として展開されんとしており、とりわけこの自衛隊の沖繩派兵は東南アジア派兵に向けた日帝ブルジョワジーの布石として在る事を見てとらねばならない。ブル新にお

り、民族共産主義の限界である。

ドル兌換停止とは、現代過渡期世界における帝国主義の世界的下部構造を有機的に結びつけた要ⅡA金・為替本体制V、即ち、金・ドル本位制は全面的崩壊を開始したのである。今や、ドルは「紙片」と化してしまっているのであり、不均等発展の矛盾が常に深部から突き崩す力として動き続けるが故に、この法則に敵対する、必然に敵対する恣意的協調政策機構としてのIMF体制は音をたてて崩れていくのである。

革命の銃口が過渡期世界の帝国主義権力主柱の重心Ⅱ帝国主義軍隊に革命の銃弾を叩き込み続けるならば、常戦体制の世界的重心は均衡を失って崩れ始め、下部構造の法則的必然をも呼び出してはいるのである。

この世界的重心の動揺を右から支え、全面的崩壊を全面的世界革命戦争のルツボに叩き込むことを防いでいるのが中共の米中ソ三角核均衡路線であり、日帝をも日中米ソ不可侵条約の枠へ押し止めようと願望しようとも、日帝の基本動向は明らかに突き進まざるを得ない。

北米と東南アジアを二大市場とする日帝が北米市場の水平分業の局面で激化する時、日帝は東南アジア市場を先行的ブロックキズム化せざるを得なくなるのである。

この日帝の二大生命線市場均衡の動揺を、中国大陸市場をエサに日中米ソ不可侵条約へと誘い込もうとするのが中共の対日外交路線であることは鮮明であるが、世界統一市場の分断の開始は、一時的に日帝個別独占体を引きつけて独占体間の動揺を引き出し、政府危機を惹起することが可能であった。日帝独占体の主流は、先行的ブロックキズム化の方向を選ぶであらうし、独占体主流に反する政治委員会の登場があり得ても、日帝権力支柱の重心たらんとする自衛隊幕僚とニューライトの結合せる侵略反革命勢力が右からぶりもどしをかけ、人民戦線勢力（日共―社会党左派）と社公民との攻防および、プロ独派の武装激突から内戦への激化を必ずや呼び出すに違

いない。

従って、我々プロ独派の政治戦略と軍事戦略は、決して政府危機の連続へ目を奪われることなく、権力主柱Ⅱ帝国主義軍隊・自衛隊への重心攻撃としての先進国武装斗争でなければならぬ。

日帝独占体は、①ドルの兌換停止と②円の実質的切り上げて③米帝の日帝に対する10%の輸入課徴金攻撃に直面し④他方、中共からの三角核均衡路線下の四国不可侵条約攻勢でゆさぶられ、政治委員会は秋の国会を契機に自民党内の閣僚再編から長期に亘る政府危機を招くだろう。

階級攻防は日共人民戦線派の一定の伸長を可能としつつ、プロ独派との武装対決を激化し、必ずや独占体主流Ⅰ自衛隊―ニューライトの反革命を呼び出し、三巴戦を更に深化する。

日帝権力の実体は、基本路線を貫徹し沖繩派兵を着々と準備し実行している。攻撃の目標は国会ではなく正に自衛隊である。帝国主義軍隊解体である。権力の重心にグサリと突き刺さる軍事攻撃をしかけること、これこそが秋の攻撃焦点でなければならぬし、叛軍斗争の任務である。

Ⅱ 自衛隊の強化と共に組織される反革命軍事勢力との闘いをまき起せ！

①統一世界市場の分断開始と中共の三角核均衡路線にゆさぶられる日帝独占体と政府危機状況をふまえ、帝国主義軍隊解体・自衛隊直接攻撃斗争の強化と共に反革命軍事勢力との闘いを一段と強化して叛軍行動委員会の闘いを展開せよ！

日帝政治委員会の政府危機状況が露呈する中で、独占体主流と自衛隊―政治警察は、民間ニューライトを反革命軍事勢力として再編し、先進国武装斗争から革命の内戦への発展に対決せんとしている。就中、自衛隊に直結する反革命軍事勢力は先行性ファシズムの内戦

反革命尖兵として組織されつつある。

②帝国主義軍事勢力は①常備軍②予備自衛官③隊友会の三段階に組織されてきた。この三段階軍事体系が四次防を契機に再編強化され、とりわけ③において内戦むけ再編が急がれているのである。

日本帝国主義軍隊Ⅱ自衛隊は、米軍より結集軸のない軍隊である。日本国民からの合法的合意をとりつけていない。既成事実を通してなくすに国防軍としての合意を暗黙のうち認めさせたいにすぎないのだ。自衛隊の陸軍力は、その装備技術においてアジア反革命局地戦争に耐えうる力を蓄えているが、弱点は政治的結集力である。この弱点を克服するものとして、自衛隊の再編が急がれているのだ。

即ち、現在三万六千三百人（陸三六〇〇〇人海三〇〇〇人）の予備自衛官を四次防の中で空軍予備自衛官を増加して六万人に、五次防で二〇万人に組織し、旧帝国軍隊の在郷軍人組織以上の組織に編成しようとしている。

特に注目されるのは、常備軍三十六万五千（定員二十八万）の現有駐屯地の廻りに、この予備自衛官を「郷土警備連隊」として配置することである。即ち、予備自衛官組織を「郷土警備連隊」に再編し、四次防でこれを四ヶ連隊に組織、反革命内戦部隊の尖兵とすることだ。内戦に耐え得る反革命尖兵の四ヶ連隊の組織化こそは、正に我々に対する挑戦であり、政府危機と人民戦線派政府の登場にそなえ、反革命内戦でこれらを粉砕する布石である。

政府危機―人民戦線派の登場という状況をふまえて、先行性ファシズムの本隊と内戦むけの反革命尖兵との対決を準備し組織しなければならぬ。敵の反革命内戦作戦と部隊編成を把握すると共に、その弱点を突く我々の内戦計画を更に緻密化していかなくてはならない。

③次に、この③「郷土警備連隊」との関連で隊友会の「郷土防衛隊」への再編を同時に見落してはならない。

隊友会は従来から人民内部の反革命イデオロギー普及部隊として

組織され、その下に、自衛隊父兄会、自衛隊隊友の会、自衛隊協力会、日本郷友連盟が組織され、現役自衛官との交流を深めて来た。

今回、四次防計画の中では、この隊友会が明確に「郷土防衛隊」として組織され、内戦に対する反革命尖兵である「郷土警備連隊」の後盾に再編されようとしている。

「郷土防衛隊」は、従来の反革命イデオロギー普及活動に加え、防災訓練を人民に提起することによって人民内部の右翼的小ブル自衛団との結合を計ろうとしている。（九月一日自衛官参加による防災訓練を見よ！）

すでに歌手の坂本九までが動員されつつ人民内部への浸透作戦を開始しているのを見る時、我々の叛軍行動委員会は、これら反革命イデオロギーとの対決を通して革命武装の思想を全人民のものとする闘いを強化しなければならない。

我々は、浮わついた人民戦線派の政府危機への対応を攻撃すると共に、我々の革命の軍事と武装斗争に敵対する日共自衛団組織が、結局は反革命軍事勢力の補完助長でしかないことを暴露し、党の軍隊と自衛隊内革命軍に呼応する人民武装の思想を対置して斗わねばならないのである。

④以上を先行性ファシズム権力実体と闘う現段階の主要課題としてふまえ、これらを統轄する自衛隊の「軍令」を厳密に分析し、敵の反革命内戦作戦の部隊編成を把握すると共に、その弱点を突く我々の内戦計画を更に緻密化していかなくてはならない。

四次防等の「軍政」面における研究はすすんでいるが、いわゆる「軍令」面において自衛隊の反革命内戦計画が実践される以上、我々の内戦計画も、この敵の計画との関連において、敵の弱点との関連において立てなければならぬ。この「軍令」分析としてまず、「新入隊員必携」および「野外令合法」（幹部将校用と兵士用）を研究しつづることが急務である。

Ⅲ 叛軍行動委員会は、行動綱領と組織方針を如何に確立すべきか！

[A]我が叛軍行動委員会の立脚点

①我が叛軍行動委員会は、世界共産主義一世界プロ独樹立一世界党建設といふの綱領と、世界党建設を目指す国際国内党派斗争を通して世界プロ独樹立を世界同時革命一世界革命戦争として闘いとする戦略との一体的獲得を、歴史的任務と論理的任務の党による統一として確立する。「綱領・戦略論」によって指導されなければならない。

②我が叛軍行動委員会は「綱領・戦略論」によって党の体系的な一環に組み込まれるが故に、プロレタリア国際主義を世界党建設のための闘い一国際国内党派斗争として闘い、民族共産主義一一国主義一プロ独連邦制を止揚する闘いを貫徹しなければならない。

③共産主義を軍事において組織する現代過渡期世界の世界党建設のための闘いに参加してゆく目的意識性を、我が叛軍行動委員会は、日々闘いを通して獲得しなければならない。共産主義を軍事において組織する立場とは、共産主義の歴史的任務を現代過渡期世界の論理的任務に凝縮し、世界党建設一世界プロ独樹立を目指して世界同時革命一世界革命戦争を闘い抜く党の立場である。

④我が叛軍行動委員会は、現代過渡期世界の革命の核心である帝国主義軍隊解体、現代革命の蜂起への道である先進国武装斗争を闘う党の地下正規軍の非公然戦闘を支持し、これと呼応して権力実体への重心攻撃を戦略的に表現して闘う公然軍団の公然戦闘と固く連帯し、「綱領・戦略論」によって体系的に指導された諸形態の公然斗争を展開しなければならない。

⑤我が叛軍行動委員会は、現代革命の蜂起を目指す唯一の道一先進国武装斗争を帝国主義軍隊解体、自衛隊解体として闘い抜き、こゝから蜂起一内戦一世界革命戦争を闘いとする「綱領・戦略」の立場に立とうとするが故に、この立場に敵対する民族共産主義一一国主義一プロ独連邦主義者と世界党建設のため国際国内党派斗争を貫徹する。

いを同一の立場から把え、破防法弾圧と闘う会と共に、革命的武装の思想を普及させ、先進国武装斗争を支える組織を根深く組織しなければならない。

⑥工場、学園、地域に叛軍行動委員会を建設し、各地区叛軍行動委員会を強化しなければならない。

⑦叛軍行動委員会の以上の諸任務を指導する先進的部分は、大衆行動の諸任務とは全く別個に次の隊内革命兵士創出斗争を展開しなければならない。

⑧帝国主義軍隊解体を現代過渡期世界の世界革命戦争の核心とする我々は、党の軍隊一党の内密構造として創出する地下正規軍と共に、自衛隊内の革命兵士を創出することが急務である。叛軍行動委員会の先進的部分は、非公然活動として隊内兵士創出、隊内革命軍建設の大事業を組織しなければならない。

⑨党の地下正規軍、自衛隊内革命軍、これが一体となって赤軍の軸を形成し、これに叛軍行動委員会一武装軍団が結合する時、先進国武装斗争を内戦へ転化発展させる現実的力を生み出しうるし、この力を支える破防法弾圧と闘う会が広範に組織する時、蜂起への陣型を勝ちとり得るのである。

Ⅳ 蜂起・戦争派叛軍として、全国叛軍連絡会議に公然と登場し全面的党派斗争を貫徹せよ！

今秋に展開されるであろう権力と大衆との政治焦点の形成に介入しつつ、党的な「綱領・戦略論」の立場から、即ち蜂起戦争派から従来の叛軍斗争とは異なる高次の、先進国武装斗争との連続した体系をもった叛軍行動委員会の叛軍戦線に革命的画期をもたらさるるにはおかないであらう。従ってまた、我らの公然たる叛軍戦線への登場は、権力と軍事反対諸派叛軍との激烈な党派斗争なくしては貫徹されない。

そしてまた、現在のには、ソヴェイト派叛軍、社会革命派叛軍、一國主義一民族主義派叛軍との厳しい党派斗争を積極的に組織して断呼実力で勝ち抜き、蜂起・戦略派叛軍としての地歩を固めねばならない。

[B]我が叛軍行動委員会の基本任務と諸形態

①我が叛軍行動委員会の基本任務は

①先進国において党の地下正規軍を政治警察の攻撃から防衛して堅持拡大して先進国武装斗争を非公然斗争から公然斗争へ発展させる革命運動史上未踏の人類の大事業を成功させるため、その任務の一翼を公然領域において担うことであり、

②常軌体制の下で戦時が先行的に呼び込まれた現代過渡期世界の平時において、帝国主義軍隊の解体と市民社会に根ざそうとする反革命軍事勢力とを解体してゆくことであり、

③階級武装の思想宣伝と武器の習熟訓練を大衆的に組織することである。

④我が叛軍行動委員会は、以上の基本任務から次の斗争形態を組織すべきである。

①地下正規軍の自衛隊直接攻撃に呼応して公然軍団と共に防衛庁を頂点とする自衛隊基地に戦略的公然攻撃斗争を貫徹する。

②叛軍行動委員会は、地域・地方において自衛隊基地および軍事産業に政治的包囲を系統的に組織する。

③叛軍行動委員会は、自衛隊直系の下に組織される内戦向けの反革命軍事勢力、就中、郷土警備連隊(四一ヶ連隊)と、反革命イデオロギ一普及部隊一郷土防衛隊の解体を目標とする戦闘を組織しなければならない。

④叛軍行動委員会は、現段階では直接的な銃火器、爆発物の使用を任務としないが、来るべき内戦に備え、自衛隊の武器展示会などあらゆる機会をとらえて帝国主義軍隊の武器の構造を把握し、初歩的な武器の操作を習得しなければならない。

⑤叛軍行動委員会は、小西叛軍裁判と破防法裁判を両軸とする斗

我々は、この困難を突破して断呼、叛軍行動委員会を蜂起・戦争派の叛軍斗争の質をもって登場させなければならない。

九・九東京叛軍行動委員会結成の意味は、決してカモノコ路線として叛軍行動委員会を党派関係とも社会的評価からも無関係に内輪に組織するのではなく、公然と小西叛軍兵士と連帯し、又小西叛軍裁判斗争支援委員会との関連をもって社会的に登場する突破口を切り拓いていくものとしてあるのだ。

こゝに日向派叛軍と党派斗争過程が新たな段階を迎えるに至ったのである。日向派叛軍と党派斗争は、全国叛軍連絡会議への登場をめぐって正面から対立する。対立と衝突はあらゆる諸形態をとるのであるが、重大な局面を迎えることは明確である。

我々は、この党派斗争に打ち勝ち闘い抜くことによって叛軍戦線における社会的ヘゲモニーを確立しなければならない。

現在、諸党派にあっては、叛軍斗争の重大さをとらえきれず、結局叛軍、破防法、入管、差別、司法を一般的な個別斗争に落とし込み、一体何が70年代に於る我が革命的左翼の基軸的闘いとして在るのかを明らかにせず、大衆運動主義、個別諸課題斗争、政策阻止斗争に溶解させてしまっていることをはっきりと批判し内戦のための叛軍行動委を軸に貫かなくてはならない。

日向派にあって「叛軍斗争一ソヴェイト作り」「大衆斗争機関として叛軍を作り、AIFの再生産構造にする」などと云うのは、叛軍をAIFの単なる大衆宣伝隊に落とし込めるものであり、地区共闘運動をやれば何かしら蜂起の陣型に再編されると考えるのは、全くの子供ダマシ、漫画ではないのだ。

小西叛軍裁判斗争を「第2の恵庭事件」「自衛隊復帰を認めよ」等と自衛隊の遠慮を目指し、人権擁護斗争に矮小化するものも決定的な誤りであると云わねばならない。

ソヴェイト派叛軍、社会革命派叛軍、一國主義一民族主義派叛軍との厳しい党派斗争に断呼実力で勝ち抜き、蜂起・戦争派の内戦をめざす叛軍としての地歩を固めよ！

- 一、帝國主義軍隊解体ノ反革命内戦の尖兵ノ反革命軍事勢力との公然たる闘いを強化せよノ
- 一、日米帝國主義の侵略・反革命前線基地ノ沖繩基地を解体せよノ
- 一、自衛隊の沖繩派兵を直接攻撃し、先進國武装斗争の火蓋を切れノ
- 一、首都反革命の尖兵ノ練馬第一師団とアジヤ侵略・反革命の兵器庫ノ新中央工業解体に叛軍斗争の砲火を集中せよノ
- 一、小西叛軍裁判斗争を攻撃的に闘い、自衛隊内革命兵士を創出せよノ
- 一、日帝の侵略・反革命基地ノ三里塚空港を粉砕せよノ
- 一、反革命内戦の尖兵ノ自衛隊・反革命軍事勢力と対決し、革命の地下正規軍と共に内戦ノ世界革命戦争を闘い抜く叛軍行動委を全国に組織せよ!!

第二報告

破防法弾圧と闘う会を武装闘争の陣型に構築せよノ

青 樹 繁 雄

三里塚を突破口とした秋期闘争の火蓋が文字通り生死を賭けた闘いとして切って落とされた。我々は、公然、非公然を駆使した自衛隊への政治的、軍事的攻撃をなんとしても徹底化し、帝軍解体ノ先進國武装闘争の火柱を日本列島に燃え上らせなければならない。統一世界市場の分断開始と中共の三角核均衡路線にゆさぶられつつも、独占ブルジョア流派、日帝政治委員会は、自衛隊の飛躍的増強と海外派兵への道を準備している。我々は、東南アへの侵略、反革命を基調とする日帝のかかる観点をはつきりと踏えて、権力実体への重心攻撃を開始しなければならぬのである。

さて、帝國主義者は、自らの野望に対し、これにプロレタリア国際主義を持って打撃を加える革命的左翼の壊滅を蛇のような執念を持って追い求めている。破防法は、裁判の進行過程とは別に、無制限に実質的適用が押し進められている。

革命の前進が生み出した反革命、当然にもかかる密集した反革命を粉砕して革命運動は前進していくこと、これは全くの疑う余地なき真理である。

だが、そこでは、政治警察との緊張下で、革命党の「党の為の闘い」と「党としての闘い」が驚くほどの共産主義的自己規律性を持ったものとして展開されて始めて真理たりうるのである。革命党壊滅を目論む、そのことを持って侵略、反革命の強権的國

家統制を計る破防法攻撃を粉砕する闘いは、何よりも「帝國主義の侵略、反革命を内戦ノ世界革命戦争」に転化する革命的主体を構築することであり、帝國主義の侵略、反革命政策に反対する広範な人民のエネルギーを革命党の体系的領導下に組織することではなければならない。

八月二十三日、東京厚生年金会館における「破防法弾圧と闘う講演集会」の三百余名を結集しての圧倒的成功は、非公然軍事組織の建設から破防法弾圧と闘う組織建設まで含めて体系的な非合法政党に我々が接近していることを物語るものであった。

ここでは、我々が「破防法弾圧と闘う会」を全都、全国に建設していく現段階において、破防法を粉砕していく基本的立場を明らかにすることを任務とするものである。

(一) 破防法攻撃と革命党の建設ノ

六九年四・二八沖繩闘争においてブント、革共同中核派に、更には、大菩薩において赤軍派に破壊活動防止法が適用されて以降、七〇年代階級闘争における権力との攻防の要が「破防法」就中「組織解散破防法」を巡って展開されるであらうこと、それは日々の権力の動向を見るまでもなく、共産主義をブルジョア國家の根底的打倒を通して実現せんとする革命党と意識的人民にとって、何んらの躊躇もなく踏えらるる問題である。

周知のごとく、破防法の発動は、暴力革命、プロレタリア独裁を志向する革命党の組織的実践が権力のありとあらゆる治安弾圧を突き破り、六七年十・八羽田闘争以来、成田、王子、ASPAAC、米タン、防衛庁、全国学園へと着実に前進してきたことに對する権力の全面的な反革命的巻き返しに他ならない。

しかも、第四〇条「セン動」罪の適用が物語るものこそ、かかる革命的左翼の闘いが、日帝の侵略、反革命軍事外交に對決する全人民的政治暴露を通しつ、市民社会末端にプロレタリアヘゲモニー

を根深く形成してきたことに對する党と人民の分断工作を意図しているのである。

権力は、第一次羽田闘争以降、マスコミを操作し「暴力キャンペーン」を大々的に張り巡らした。

そして、六八年十・二一新宿において「騒乱罪」を適用し、根こそぎ現場逮捕を遂行した。だが、それでも全国に燃え広がる革命的炎を消し去ることが出来ないことを察知するや「大学立法」を強行し、四・二八中央権力闘争として沖繩闘争に決起した革命的指令部そのものの壊滅を目論んだのである。

そこでは、大量検挙、大量起訴、長期勾留、実刑判決、尾行、張り込み、電話の盗聴、スパイ強要、突然の下宿搜索などは、全くもって我々を覆う日常茶飯事となっていたのである。

プロ独派壊滅を目論む、先行性ファシズム権力への先行的権力再編は、たしかに、我々の武装闘争の後退を一定程度強いるものであった。

かかる意味で、六七年砂川、羽田以降、革命の最前線指令部としての役割りを担ってきた共産同と革共同中核派に對する破防法の適用は、敵の重心を攻撃するという原則に基づいたものとして、その狙いにおいて正確であるかのようであった。

だが、権力の破防法攻撃は、幾多の試練を投げかけたとはいえず、我々をして、前人未踏の革命党建設に立ち向かわしめたのであり、我々は、それを党の革命として攻撃的に闘い続けてきたのである。

勿論、党の革命は、それが単なる改良でない限り、血の闘いを持ってしか推進されなかった。我々は、右翼日和見主義、解党主義との闘いを非妥協的に貫徹していくこと、と同時に権力に最も肉迫していくことをレーニン主義の原則そのものとして把え返していったのである。六九年秋期安保決戦は、そのような実践化として闘われ、正規軍団による××署攻撃と蒲田への最大党派としての登場は、破防法攻撃を逆に、攻撃的な革命建設の中で粉砕していくという我々の前進的地平を示すものであった。

そこでの我々の到達点は、全人民的政治暴露の組織化それ自身において、階級闘争を一步として前進させることはできないということ、すなわち、法と秩序の神聖な担い手、機動隊の壁を軍事的に突破できないという敗北が、即政治的獲得目標の敗北に直結するという、階級攻防の新たな段階への突入に踏えつつ、軍事を組織する党への同盟の飛躍を実現すること、これであった。

この時点において、諸党派は我々への提出している問題の地平に注目しつつも全く理解できず、六〇年代の古い衣裳をまとった自己の経験性の内にしか未来の安住を求めることができず、その意味では革命の前進をただ、その闘争の直接的な悲劇的な成果の内に求めていくという、底抜けの大衆運動主義者ぶりを發揮していたにすぎなかった。

我々をしての安保決戦の貫徹は、総体としてのプロ独派の封じ込められた軍事の時代の到来にもかかわらず、七〇年代を担う革命主体への確かな接近を明示させた。

それは又、安保決戦そのものが要求した軍事の質に耐えきれない部分（情況・叛旗）を同盟から放逐し、以降、党内闘争は新しい質への移行を開始するのである。

だが、我々は、ここでも後に史上最悪の軍事反対派として自己を全面開花させた日向派との闘い貫徹しなければならなかった。

日向派は、同盟が過渡的政治組織であることを、何かしら鬼の首でも取ったように誇らしげに語りつつ、「綱領の一致に基ずく中央集権党」の建設を、レーニン「なにをなすべきか」の切り細工そのままに主張した。

だが、その場合彼等は、「理論と実践」「科学とイデオロギー」に関する字野的理解を立場としており、認識作為そのものを階級闘争のふるいにかけることなく無限に追い求めてゆくのである。

それは、綱領を「観念的な未来の先取り」として理解し、かかる綱領の発見が革命党を建設するという見事な逆転を演じつつ、権力との組織を賭けた闘い、たとえば、安保決戦、地区××闘争などを、

この間の事実が物語るように、権力は、破防法の実質的適用を、我が革命的左翼に加えてきている。

(二) 「破防法弾圧と闘う会」の更なる構築を

我々は、破防法が、ただそれ自身において認識され議論される傾向に対して、かかる破防法を引き出した闘いの質、ないしは破防法通用の意図するものとの関係で、破防法を認識し議論することを訴えてきた。

すなわち「小西叛軍兵士の登場は、我々が権力に打ち込んだ楔であり、破防法は、権力が革命的左翼に突きつけた楔である」（仏アピール）ことの確認の上に立って破防法を帝軍解体との関連で扱え返していくこと、これである。

破防法は、昭和二十七年制定当時の市民主義者の声明を聞くまでもなく、明文化する「暴力主義的破壊活動」の概念が、きわめてあいまいであり、憲法の唱える罪刑法定主義の原則を飛越えて、権力により無制限に濫用される恐れがあること、更に、「煽動」罪、「教唆」罪が、思想の自由そのものの停止を要求する全くもって、赤裸々な弾圧立法であるということである。

このことは、それ自身充分認識されてしかるべきである。

だが、我々は、ここから違憲論を導き「護憲運動」として破防法との闘いを組織していくことはできないのである。

すなわち、破防法が対象とする「思想の自由」の停止は、単に憲法体系からの一般的食出しとして存在しているのではなく、まさに

過渡的政治組織であるが故の「あるFの勝手な行動」として、自らの戦線逃亡の党的責任逃れを行なうという度し難い日和見主義の理論そのものである。

日向派は、現在、我が破防法戦線から脱落を開始している。のみならず「ソビエト型組織建設」の実践的根拠そのものからの破産を宣告され、惨めたらしく機関紙上で泣き事を書き並べることしかできなくなっているのである。

我々の革命党建設は、前人未踏性故に、たしかに数々の犠牲を生みだし、実践的苦闘を通しつつ展開された。

だが、かかる過程が、どんなに壮烈であり血塗られたものであっても我々は、断固として非合法党を攻撃的に建設し、解党主義、軍事反対派との対決を避けて通ることはできないのである。

なぜならば、情況派に典型的な大衆反乱型革命なるものが前衛党否定の上に横行するのを我々が許したり、軍事反対派との対決を避けたならば、過渡期世界の血の教訓の中から出生したプロ独派そのものの否定にも連なりうる根拠を残すことになるからである。

それは又、権力の破防法攻撃に対する官許運動そのものとして屈服への道である。

権力の反革命軍事の壁を突破し、先進国武装闘争を武装蜂起から、内戦→世界革命戦争、世界単一プロ独の樹立として勝利的に切り開くこと、「共産主義と軍事」を軸とした世界党への党内部の主体的革命を貫徹することを通してのみ、過渡期世界の先行的な権力再編をプロレタリア国際主義の真只中で攻撃的に粉砕することができるのである。

我々は、非公然軍事組織の飛躍的増強を押し計り、公然軍団反帝戦線の軍事能力の目もくらむばかりの獲得、更に党の外環の組織に「叛軍行動委員会」破防法弾圧と闘う会」を圧倒的に構築し、「党の為の闘い」と「党としての闘い」の有機的一統を深めつつ、先進国武装闘争を、公然、非公然の党による統一の推進として、自衛隊直接攻撃を貫徹していくのである。

革命党の存在そのものの抹殺と同義一体的な意味でそうなのである。

我々は、治安維持法を紐解くまでもなく、破防法が、階級対立の非和解性の結果として、市民的、合法的諸権利そのものまでも侵害するであろうことを推測できる。

そして、たとえそれが、戦後民主主義「護憲運動」の枠内であったとしても、帝国主義の侵略、反革命政策の一切に危機を感じて結果としてくる人達をも組織化していくこと、すなわち階級形成していくことを任務とするのでなければならぬ。

だが、かかる闘いが、ひとつの巨大な物質力として形成されていく為には、「護憲運動」の立場にたつ人達自身が、現に弾圧の対象とされている革命的左翼を防衛するという最低限の行為を媒介してであることも又、はっきりと確認していかなければならぬのである。

革命的左翼の闘いとは全く無縁な地平で、破防法の違憲性を唱えても、自己努力の思いにも拘らず、成果のない片思いにしかならないし、又、破防法合憲論に屈服していく道をも残すことになるのである。

なぜならば破防法が導く我々の立場とは、国家権力を暴力的に転覆す運動そのものの徹底化の立場であり、権力にとってもセン被されるのを恐れないわけにはいかない、非情な階級闘争の論理そのものなのだからである。

まことに破防法を粉砕する闘いは革命と反革命の激突の中に正しく位置付けていかなければならぬのである。

これは、本裁判闘争の全過程にも全面的に貫かれていくこともである。

第II部 革命論

第1章 我々の革命論の到達点

第2章 蜂起を組織する単一党への道 羽山太郎

第3章 唯物史観と「資本論」「帝国主義論」 (夏期合宿レジメ)

第1報告 西部地区合宿レポート

日野弘蔵

第2報告 北部地区合宿レポート

町田必殺

第3部報告 南部地区合宿レポート

須藤一鉄

いるのである。

また、弁護団も、被告の革命論を法の次元で受けとめつつ、根底において自己変革を目指して闘い抜いているのである。

これは、かつて治安維持法に晒された日共が、終始権力に屈服しつつ真正面から革命論争を挑もうとしなかったことと、あまりにも対照的であり、ここにこそ本裁判の歴史的意義が存在しているともいえるのである。

破・弾圧と闘う会は、こうした基本的立場に踏えて、先進国武装闘争、帝軍・自衛隊解体闘争を文字通り支持し、破防法弾圧から、革命党を断固として防衛すること、裁判闘争への主体的結集を通して破防法の持つ反人民的性格を暴露し、市民社会の末端までも組織化を計っていくことを任務としているのである。

かかる破・弾圧と闘う会を我々は急速に全都から全国に形成し、破防法を革命党の先進国武装闘争と結合した市民社会末端から粉碎する怒濤の渦を巻き起こしていかなければならないのである。

それは、文字通り、権力の自警団の組織化や、「暴徒」の指名手配写真が、駅や銭湯にばらまかれていた現実にも比すべき、思想性と組織性に打ち鍛えられたものとして構築されなければならない。

そして、当面は、破防法組織解散を権力の口から封じ込める闘いを組織し実行するのである。

くり返すまでもなく、権力は、二十五年前に制定した憲法体系を共同幻想そのままに建前化したつとも二十五年を経た実体を「自衛隊（法）」破防法」という憲法体系からの食出しに依拠する方向に再編してきた。

人民戦線派は△建前▽に依拠し再編された権力実体を△立前▽の方向へ引きもどす運動として護憲運動を展開する。

我々は、機動隊粉碎、自衛隊直接攻撃として権力実体を攻撃することによって、実体と△建前▽との主体的乗離を押し進め市民社会における政治潮流の分解を促進してきたのである。

帝国主義権力は、四次防を通し自衛隊の物理的な装備の一挙的増

強を計り、一方新たな天皇イデオロギーを持ち出し、自己の野望と延命を合致させんとしている。

当然にも権力の破防法発動は、先進国武装闘争を切り開く我々の闘いの前に、自衛隊の治安出動を次に準備するものとしてある。

かかる意味で、それは我々を歴史的な試金石にさえかけている。

「先進国武装闘争を自衛隊直接攻撃」として貫徹し、蜂起・内戦
「世界革命戦争を切り開くこと、この圧倒的進撃に向け、「闘う会」
を非合法党の外環の一環として組織すること、我々は、この任務の貫徹を革命的に推進するであろう。」

第1章

我々の革命論の到達点

暴革命論が提起した論理的任務、即ち獲得すべき対象世界に資本制生産社会の批判的把握と変革主体の定立を基礎とする戦略確定の方法論は、新左翼内論争の先端を切るブント内戦論争にいかなる位置を占めていたのであるか。われわれは、みずからの革命論を革命の実践過程の検証を通じた政治的実践の理論的武器として、その政治的位置を明確にしておかなければならない。

したがって、革命論の現在の到達点は、第一次ブントの「共産主義者同盟綱領草案」の背後に存在した諸理論との継承過程を含めた射程をもたざるを得ない。

① 第一次ブントが依拠した諸理論に宇野理論が占めた位置と、その克服の不徹底性もたらしたものは何か。

② 労働力商品化と疎外論→人間解放

③ スターリンの対象把握における「歴史理論」説に対する「論理歴史」説の対置

④ 三段階論。原理論（産業資本主義のみが開示する国家無関係国内自己純化論）段階論（タイプ対立型無法則的古典帝国主義論）現状分析（ソ連の存在と管理通貨体制を面期とする国独資本主義）現代帝国主義論

⑤ 大内国独資本論に姫岡自己金融論を接木した国家論、および小野義彦日帝自立論

⑥ 全般的経済危機を管理防衛する国家権力、政策阻止斗争による管理防衛国家の混乱、危機の全面化と革命を呼び出すラジカルな政策阻止斗争

⑦ これを先駆性運動論と結びつける民主主義勢力の最左翼としてのブントの突出

⑧ 破壊を「党」から把えて克服しえず、戦略論へ問題を集中的に総括した革通派。軍事技術論に短絡したプロ通派。

⑦ 第一次ブントが依拠した諸理論の中に、大きく比重を占める宇野方法論→三段階論の果した破壊の根底的止揚が問われていた。これを主体的になしえぬ限界。

⑧ 黒田の場所的立場を拠点とする非連続三段階論からの宇野批判、場所的自覚の党からのブントダイナミズムの運動主義批判の開始。黒党体制への降伏者統出。

⑨ 革共同の反スタ党を軸とする主体還元的同心円拡大主義に反発する第二次ブントの戦略深化と階級形成→大衆運動先端機能党との結合。

党の大衆運動指導理論としての戦略から、戦略戦術党への移行。藤本進治・ルカーチ主義と宇野体系の擷取。

⑩ 六回大会の戦略党は宇野三段階論を世界市場自己展開史観へ改作した岩田危機論と、多元的国家論をトロツキイ的政治力学主義で折衷した妥協体制論国家と、逆手論左翼反対派党との三位一体論である。これに、過渡期世界論、帝国主義論、レーニン型党を対置して七回大会の勝利となる。

⑪ 七回大会の過渡期世界論は三プロック国際階級斗争のつくり出す国際階級危機を世界同時革命へ、である。

⑫ 帝国主義論の現代的発現形態把握をめぐる路線のブレは、三プロック国際階級危機の性格規定をめぐり、日帝の対米対中両面戦争論をも飛び出させた。こゝに党の戦略を確立する変革対象把握の方法論確立が迫られていた。

⑬ 即ち、七回大会における過渡期世界論が、資本論、帝国主義論との体系的関連で把握されていかなかったところの弱点が、過渡期世界論の導く「国際階級危機」の客観的主体的性格を確定出来なかった。

⑭ この間の戦略論争上の総括過程は、世界革命から世界同時革命への発展的獲得を含めて「先行性ファンズム」に詳し。

⑮ 第一次→第二次ブント形成期に至る戦略論争過程において、

宇野方法論と黒田方法論の止揚が根底的に迫られていた。この根底的止揚のないまゝ過渡期世界論が、大枠的な、歴史的巨視的な意味で提起されたが故に、資本論→帝国主義論→過渡期世界論→世界プロ独→世界過渡期→世界社会主義→世界共産主義の、弁証法的体系把握が迫られた。

② この論理的任務を八回大会へむけて組織すべく提起されたのが「暴革命論」であった。

③ このようなブント内戦論争の政治的任務として提起された「暴革命論」は宇野三段階論と黒田三段階論と対決し、両者を対立のまゝ克服する方法的体系であった。

④ その主な理論内容は次のとおりである。

① 産業資本主義段階と帝国主義段階の資本の普遍的力を、『資本論』と『帝国主義論』を貫く「普遍本質論」として上向的総合の論理体系とすること。

② そして、「普遍本質論」としての資本の原理を資本制生産社会を貫く力として確定し、この普遍本質的力が、具体的に頭在するものとしての世界的空間の有機的構造を歴史的頭在として把握することである。資本制生産社会を貫く普遍的力が世界的有機的空間として自己を歴史的に頭在させるものを産業資本主義段階と帝国主義段階との歴史的段階移行において把握する時、これを史的戦略基底論として確定した。

③ 『資本論』と『帝国主義論』とを貫く上向的総合の論理体系を可能とするポイントには、『資本論』の全三巻を通してマルクスが展開した独占形成の必然論と、『帝国主義論』の1-3章でレーニンが『資本論』の独占形成必然論を軸として展開した独占確立の必然論である。

④ 即ち、「資本論」の独占形成必然論と「帝国主義論」を上向的総合論理で貫く「普遍本質論」確立の核心点である。

⑤ この核心への無理解が宇野三段階論と黒田三段階論を共に、体系的段階構成の論理において挫折させ失敗させた基本的根源

である。宇野と黒野の原理論および本質論が、段階論を導出する内的論理として確立しえなかつたこと、言葉をかえていえば、宇野と黒野のそれぞれの段階構成の礎石としての位置と論理内容とを原理論と本質論に与えることが出来なかつたことの秘密はここにあつたのである。

産業資本主義の自己純化傾向にのみ原理論開示の根拠を求めて原理論と段階論との体系を構成しようとした宇野も、また、宇野とは異り、産業資本主義と帝国主義の両段階にそれぞれ資本の法則を認めながら、『資本論』と『帝国主義論』の向上論理を一貫した体系において普遍本質的力の向上論理とすることが出来ず、二つの法則をマルクスとレーニンという二人の認識主体の場所の現在における抽象レベルの差にすりかえて「非連続の連続」体系を構成してしまつた黒田も、共にこの核心的問題追求の挫折の結果にほかならなかつた。

④ 暴革論が『資本論』と『帝国主義論』を体系化し、「普遍本質論」が産業資本主義段階と帝国主義段階の両段階を歴史的顕在における世界的有機的空間として開示導出した核心は、マルクスの『要綱』と『批判』の六部構成を帝国主義段階に引きつけて現代に適用したことである。

⑤ プラン問題適用のポイントは、前半体系と後半体系を結ぶ「国家による資本の総括」であつた。
われわれは、資本制生産社会を完成された国家に総括された最高に発達した私有財産社会としての階級社会であると把握する。そして、この社会的力をなす資本の普遍的力を普遍本質論と規定し、この資本の力が資本制生産社会という唯物史観の過程的社会構成体として実存する構造を世界性において把える。したがつて、資本の本質は国家に総括されて始めて実存条件を与えられる。

ところが普遍本質論の「論理的向上展開は時間的偶然的要因を含また範疇の必然的综合であるがゆゑに、その到達点は多く

的空間を導出し、独占形成段階を総括して帝国主義段階の世界的空間を導出するのである。

① 要約すると④『資本論』『帝国主義論』の独占形成→確立必然論を軸とする普遍本質論の向上論理体系と⑤「国家による総括」を論理次元移行の回路とすること⑥この二つの核心的課題を体系化することが暴革論の「体系上の要」であつた。

② この方法は、単純向上論者が④『資本論』の論理向上を国家で総括したとたんに帝国主義の歴史過程→論理向上を横倒しにして⑤かつ独占形成→確立の論理的必然性を向上論理のうちに確立出来なかつた欠陥を否定的に総括し、更に、これらを単純向上論者として拒否した上にプランの「国家による総括」をも退けてしまつた黒田の国家なき対象把握と上部構造から完成分離した産業資本の純化自立から原理を説いている宇野整理主義を否定して成立した方法である。

単純向上論者といわれる宮本義男・原田三郎・高木幸二郎の否定の上に開花した非連続論者といわれる宇野弘蔵・黒田寛一を否定して確立した方法であつた。

③ 暴革論が提示する方法、即ち、『資本論』と『帝国主義論』とを『要綱』『批判』の六部構成プランとの関連において現代的に引きつけて体系的に統一し、直接変革対象世界を、論理向上体系（普遍本質論）と歴史段階体系（史的戦略基底論）との統一において批判的に把握し「国家による総括」を権力論へと集約する方法論的意図とは何か。

④ 暴革論の方法は、プランがすぐれて集中的に追求してきた戦略論の領域において、戦略確定の基礎的方法論を確立することであつた。それは第一次プランの理論に比重を大きく占めた大内力の国独資論および第二次プラン再建過程に登場した岩田世界資本主義論の基礎をなす宇野方法論との対決であつた。そして同時に、第一次プランを理論的に解体した黒田方法論に対決

の論理的諸規定を受けようとも、それは現実世界の表象そのものではなく論理的に把握された現実→到達点であり、再度歴史性に媒介されてはじめて具体的現実と直結しうるものである」(暴革)

この再度歴史性に媒介される論理次元の移行の回路が国家による総括なのである。

国家は決して資本のみの産物ではなく、唯物史観で把握されたように、階級社会としての社会構成体を総括してきた上部構造だ。

封建社会の権力支配の下に誕生した初期の資本の運動も、ブルジョア政治革命を通して資本の総括者たる国家をもつて始めて資本制生産「社会」を形成し、産業資本主義段階の資本の世界性を確立したのである。資本制生産社会は始めから国家に総括されているのだ。

① では、普遍本質論が自己の確実性を歴史的に顕在するため、史的戦略基底論へと論理次元を向上的に移行させる「国家形態でのブルジョア社会の総括」と、プラン前半体系から後半体系への次元移行との関連とは何か。

前半体系が階級で結ばれ、後半体系がその階級独裁国家の総括で始まる時、論理の次元は「外部へむかう国家」と「生産の国際的關係」によって結合される資本の世界性の領域に移る。これがプランの前半体系から後半体系への論理次元の向上的移行である。

暴革論の普遍本質論から史的戦略基底論への論理次元移行はこの方法を継承する。

② だが「国家の総括」での論理次元移行は、暴革論の普遍本質論が独占形成必然論で貫かれているから、史的戦略基底論は産業資本主義段階と帝国主義段階の両段階を顕在させる。

即ち、普遍本質論を総括して次元移行させる国家は、向上的総合の独占形成前段を総括して産業資本主義段階の世界的有機

する反撃の論理的拠点をきざることであつた。しかし何よりも実践的には、第二次プランの獲得した七回大会路線の過渡期世界を、方法的に体系化することが目指されていた。

過渡期世界論を、唯物史観→資本論→帝国主義論によって体系化することが、綱領戦略確定の唯一の道であり、革共同主義、革マル主義に対決する政治路線上の攻撃拠点であつたからである。

③ 暴革論の方法は、現在の到達点から把え返すならば、人類前史を全面的に止揚し真の人類史を切り開く共産主義の歴史的使命を、人類の普遍的当為として定立する党指定の論理を獲得するには至ってゐなかつた。しかし、獲得すべき全世界を直接変革対象世界として批判的に把握するところの、党の論理的任務を果す方法としては厳然とした正しさをもっていた。

④ この正しさを堅持させた基礎は、先にふれた『資本論』の独占形成論と『帝国主義論』の独占確立論を向上的体系に統一して本質論としたことと、プランの前半・後半体系を画す「国家による総括」を本質論から史的戦略基底論へと論理的に次元移行せしめる転化の回路として設定したことの二点である。

この点が、直接の変革対象(資本制生産社会としての世界)の批判的把握と変革方針(戦略)の方法確定という、論理的任務の領域に課題が限定されつつも、史的戦略基底論が「権力論」を軸に捉えて確定される源をなしたのである。

⑤ 若し、暴革論が、宇野や黒田のように、国家による総括を退けて、経済学方法や社会科学一般の方法に陥り込んでいたならば⑥第二インター崩壊からレーニンの第三インター確立期の対象把握と権力論を、産業資本主義から帝国主義への下部構造における歴史的移行との関連で総括出来なかつた。また、⑦史的戦略基底論は、過渡期世界における帝国主義の不均等発展の現代的発現形態を「権力論」との不可分の関連において把握出来

なかつたろう。そして⑥国家と権力を産業資本→帝国主義の両段階に亘る資本の総括者として把える視点が確立されていればこそ、「先行性ファシズム論」の権力論と階級斗争三巴論が導き出され、更に「鉄の戦線No.1」の過渡期世界論および「破法研究No.10」の論文が過渡期世界の帝国主義下部構造と権力論と戦争論と三プロ・ク・三又階級斗争論とを統一的に体系化しえたのである。

⑧ 宇野方法論はタイプ対立型無法則帝国主義論(段階論)から大内力国独資||現代帝国主義論にしか到達出来なかつた。垂流となつた岩田弘も大内秀明も、たかだか米帝全一支配下の世界資本主義と、恐慌なき管理通貨帝国主義世界を語つたにすぎない。

黒田方法論も「相互依存と相互反発」の現代世界を千年支配の如く主張したゞけて「相依相反」世界の帝国主義は大内力に依拠しているようであり、何等、独自の世界把握を帝国主義の下部構造と権力論と戦争論と階級斗争論を統一して展開出来なかつたのである。過渡期世界論を導き出せない方法論の粉砕こそ理論的攻撃拠点の核心である。

⑨ 最後に、暴革命論が方法的に「国家による総括」を捉えたこと、あつたな意義を確認しておく必要がある。

国家権力と民族国家は決して資本だけの産物ではなく、階級社会を構成しつつ発展してきたものであるということだ。氏族↓部族↓民族という共同体の形成過程で支配と所有の発生が階級支配と国家権力を生み、資本によって私有財産社会は最高に発達し中途半端な国家は完成された国家として資本の階級社会を総括した。だから、資本は国家権力の下に総括された民族国家相互の関連において資本の世界性を定着させ実存している。資本をかくるものとして把えることによって始めて、資本の本質の一時代的限界性(および歴史的過渡性)と、国家の人類前史的限界性ととの両者の関連を、唯物史観の弁証法によって統

一し、この限界性を共産主義が世界プロ独によって止揚しうるという根拠が明確となる。

「暴革命論」が確定した論理的任務を果す戦略略。「先ファ論」がレーニンの「権力・党・階級」の世界党を三巴階級斗争論に引きつけた世界プロ独派の確定。「鉄戦No.1」の過渡期世界論の権力論I戦争論に導かれた党・軍・統一戦線を体系とする過渡期世界党。「鉄戦No.2」が獲得した世界共産主義の歴史的任務と論理的任務を統一する党の本質的指定。以上を現在の到達点からいかに体系的に把握するか。

① 暴革命論が指定した戦略と党は、論理的任務における党をいかに

② 「世界革命戦略は、現代世界の基本矛盾を構成する帝国主義の国際経済危機を基底とする具体的な国際階級危機の発現形態によって、経済危機の客観的基底要因が決まってくる。

しかし、経済危機は世界革命を目指す革命政党にとっては客観的条件にすぎず、主体的部隊力とプロレタリアートを権力奪取を意識した階級に形成する方針と結合するとき、はじめて戦略たりうるのである。

以上が暴革命論の提起した「戦略」に関する規定である。即ち、普遍本質論から史的戦略基底論が導き出されるが、史的把握される対象の危機の発現形態はあくまで基底として客観条件であり、党が自己の主体的部隊力強化と権力奪取への階級形成を組織方針と結合する時、対象把握は党主体に引きつけられて、変革の指針、権力獲得の方針として戦略となりうるという規定である。

対象把握の正しい方法の確定を党組織方針に引きつけることに党の論理的任務をいっているのである。

③ では、対象把握と党主体の戦略確定はいかに把握されていたらうか。

「政治党派の戦略が党派によって異なる根拠は、党派が依拠する基盤の利害の反映である。しかしプロレタリアートに依拠する革命党派自体の内部になお戦略の相違が存在するのは、世界革命とプロ独をいかに実現するかの問題の立て方にあり、その相違の根拠は、やはり帝国主義に対する把握の問題が厳然として存在しているのである。

したがって、われわれは正しい世界革命戦略を確定する基礎論を構築しなければならぬが、そのためには、帝国主義を基本的に認識する方法をまず確立することから始めねばならない」と述べてある。

即ち、階級党は階級の意識と利害を反映し代表する党であるから共産党は一枚岩でなければならぬというスターリニズムの階級反映論、階級利害代表論、一枚岩党の神話をまず打砕いている。その上で、世界革命とプロ独をいかに実現するかに、戦略の一切がかかっている。いかなる世界革命でいかにしてプロ独を樹立するかを戦略へ凝縮する党の論理的任務であることを基本的にすえた。

そして、いかなる世界革命をいかにしてプロ独樹立へと実現するかを革命党派が獲得するためには、直接変革対象世界である帝国主義世界をまず正しく把える必要があるとするのである。この主張には次の二つの実践的問題が伏線となっていた。

④ 一つは、マルクスの世界同時革命が設定された世界的物質的基礎構造(産業資本主義段階)とレーニンの世界革命が設定された世界的物質的基礎構造(帝国主義段階)の把握をめぐって、第一インスターから第二インスターの墮落が、そして第三インスターの確立が発生していることである。

マルクス党の世界恐慌→世界革命から、レーニン党の帝国主義世界戦争→世界革命(帝国主義戦争を内乱へ)への発展が、明確に資本主義の歴史的段階移行という対象把握の論理的任務に規定されていることである。

二つは、過渡期世界論が『資本論』『帝国主義論』から体系的に把握されない場合、レーニンが対象とした帝国主義と、ロシア革命以降の帝国主義と、第二次大戦後の帝国主義とを、本質論における同一性と史的戦略基底論における各分節の発現形態の区別性において把えることが出来ないことである。

そこで帝国主義は変つたという現代帝国主義論I国独資I構改理論が発生したり、各分節の発現形態を権力と法則との相関で把握されぬ「レーニン帝国主義論の機械的アテハメ論」が発生するからである。

⑤ これらは、常に党をゆがめる。論理的任務と党の性格は、党と変革対象の史的段階および分節によって大きく規定される。

⑥ 産業資本主義とマルクス党の世界革命

⑦ 帝国主義とレーニン党の世界革命

⑧ 過渡期世界と世界プロ独派(世界党)の世界同時革命I世界革命戦争

⑨ 以上のように、対象把握の論理的任務と党の性格と戦略とは不可分の関係にある。

⑩ 「先ファ論」が確定した民族共産主義を止揚する世界党建設の過渡的「世界プロ独派」は「暴革命論」の戦略をいかに深化させたか。

⑪ 「権力・党・階級」というレーニン主義的党指定の構造を「先ファ論」は獲得した。

即ち、権力の攻撃性格とこれに対抗する党の質を、対象の論理的把握を基底として確立した。この視点で、変革対象世界の歴史的発展段階との関連で把握されていた「暴革命論」の国家権力と戦略の規定を、より深化させたのである。

⑫ それは、産業資本主義を対象とするマルクス党の世界革命戦略から帝国主義を対象とするレーニン党の世界党と世界革命戦争へ発展を、過渡期世界を対象とする世界プロ独派党の世界同時革命I世界革命戦争へ継承しつつ引きつけることであ

る。ということ、過渡期世界党形成過程の内実を、レーニンの「権力・党・階級」の視点から世界党建設斗争として把え返すことであった。つまり、過渡期世界党の内実を、過渡期世界の階級斗争性格から現実的に獲得することである。

これが、先ファ権力・人民戦線派・プロ独派の三区階級斗争論である。

⑦ 七回大会路線における過渡期世界の階級斗争の構造は、先進国・後進国・「労働者国家」の三プロク階級斗争として規定されていた。この三プロク階級斗争の自然発生性が生み出す国際的階級危機を世界同時革命へ結合せよ、という革命論へ結実されるものであった。この構造的把握には「資本論」「帝国主義論」を体系化した視座が捉えられていなかったがために、様々な帝国主義解釈や機械的アテハメ論が発生したことは先に述べたとおりである。この下部構造の把握の問題と同様に、階級斗争の内的構造が権力論との関連で押えられないかぎり党の性格と組織方針が具体化されない弱点をもっていた。

即ち、先進国・後進国・「労働者国家」の三プロクに階級斗争を構造化するだけでは不十分であって、この三プロク平面構造を、権力・党・階級のレーニン党の視座から把え直し、先ファ権力・人民戦線派・プロ独派という三巴の立体構造として確定する必要があるためである。

⑧ かゝる三巴階級斗争の立体構造から、過渡期世界党の現実的実践的位置を明確にしたところに八回大会路線の獲得された成果がある。これが、前段階決戦論を導く史的戦略基礎論を党主体の側から戦略論として位置づける基礎となった。

⑨ しかも、このプロ独派の登場の基礎を、過渡期世界の帝国主義権力性格である先ファと、ソ連を物質的基礎とする国際的人民戦線派との対決として把えたことが重要である。一九三〇年代の過渡期世界の階級斗争の血の教訓から、過渡期世界党の実践的位置を導き出し、第二次大戦後の国際階級斗争の基本構造

として確定したことを、これである。

「先ファ論」は次のように述べている。

「人民戦線派の存立の国際的条件は第二次帝国主義分制戦争突入前期における帝国主義ブルジョアジーの一时的動揺とソ連の国家間協定||リトヴィノフ外交との均衡の産物にすぎなかった。

帝国主義戦争の危機に勝利する途は世界革命戦争以外にはないのである。」

「三〇年の統一世界市場分断を直接的契機とする第二次帝国主義戦争の前段革命状況の初期には、イタリヤに遅れること十一年目にしてドイツにファシズム権力を成立させ、その対象としてドイツと抗争するフランス独占体の上部構造に人民戦線政府を成立させ、国際的階級関係の普遍的構造をファシズム対人民戦線を地理的に分断して体現した。だが、この対極はスペインにおいては一挙的に併存的に展開し、更に反スタプロクを現実政治勢力としてはじめに国際政治上に登場せしめ、ファシズム・人民戦線・反スタリーニズム派の三巴のスペイン国内階級関係を形成した。しかし、この三巴は国際階級関係の縮図であった。ドイツの内乱は国際階級危機の進展段階に規定されて一国的決着をもって終息したが、スペインの内戦は当初から国際的ファシズム反革命(ドイツ、イタリア)に支援された国際的内戦の性格をもっていた。

この基本的性格は第二次大戦後の国際階級関係の基本的パターンとなりつつある。」

「したがって、現代先行性ファシズム権力打倒の闘いは、一国的革命では勝利的決着をつけるのではなく、内戦から国際的内戦、就中アジア革命との結合を牽引し世界革命戦争として勝利的決着をつけねばならないのである。われわれは、世界同時革命を、明確に現代帝国主義的政治権力性格規定を軸に確定する政治革命戦略としなければならぬのである。」

「『世界暴力革命論』において、ほぼ戦略を確定する基底論を確定したわれわれは『国際的な権力性格の転換』を普遍的に過渡期世界の六八年から七〇年へ至る権力性格の転換として見抜かねばならぬだろう。」

そして、この普遍的共通性をもった転換の軌道の一角として日本現代先行性ファシズムの特徴を見抜かねばならぬ。

日本先行性ファシズムとの階級斗争はまた、国際的關係に規定されて、①先行性ファシズム ②世界プロ独派 ③人民戦線派||国際的秩序派に分裂しつつ大きく攻防を展開するのである。」

④ 以上のように過渡期世界の国際階級斗争の基本構造から世界プロ独派の実践的位置を獲得した党主体(われわれ)は、世界プロ独派を世界プロ独の任務||世界過渡期における民族国家の止揚と人間解放の思想から把え返した。「先ファ論」は次のように述べている。

「革命戦争過程でスターリニズムの歪曲が固定したソ連の武力と生産力に依拠するならば、帝国主義諸列強権力と後進国軍部反革命政権を打倒しようとも、革命の成果はソ連スターリニスト支配の下に集約され、東欧支配の近似状況が世界的に固定化し世界社会主義は挫折し、世界史は生産力と軍事力の差を基礎とする民族国家間の対立を生む暗黒の時代を通過せねばならぬだろう。」

われわれは、「先ファ論」において民族共産主義を世界プロ独で止揚する世界共産主義の思想を提起し、これを世界党獲得過程にある世界プロ独派の思想とすることを主張してきた。即ち

「未来に物質化される過程が現代世界の物的基礎から論証されない社会主義観と人間解放の要求は結局、疎外革命論や実存主義に没入せざるをえず、せいぜいスターリン主義の裏返しとしての反スタ主義(プロ的人間の論理)しか獲得しえないであろう。物的条件の分析で論理と社会科学から人間主体を捨象す

る機械的戦略主義、経済主義はプロレタリア国際主義を統一行動の機能的結合の論理に低め、民族と人種を超越するマルクス主義人間解放の論理へと高めえないうであらう」と。

⑤ 「先ファ論」の世界党を目指す世界プロ独派の党的内実は、七回大会以来主張してきたプロレタリア国際主義を、一方では三巴階級斗争の立体構造で実践的位置づけ、他方では民族国家を止揚する世界プロ独||世界過渡期の任務から思想性として現的に呼び込んだものであった。

勿論、世界プロ独権力樹立と世界過渡期の任務を⑥単一世界党建設と一挙のプロ独樹立⑦世界過渡期||反革命分子絶滅斗争過程でのスターリニスト党官際と民族主義の早急な打倒⑧民族国家間の生産力差の暴力的均質化⑨旧民族国家の帝国主義時代の民族的遺産相統思想の絶滅⑩各民族国家に樹立したプロ独連邦制の粉砕||一挙的世界プロ独樹立⑪労働の量による分配と民族国家格差を越えて実施してゆく闘い。以上六点にまとめられる。だが、ここで、「先ファ論」が強調する党の内実とは一章六節の標題に書かれた『世界革命戦争を闘い抜き、世界プロ独樹立のための世界党へ民族国家人種を越えて結集せしめるプロレタリア国際主義の思想性』である。

⑩ 「先ファ論」の過渡期世界党の実践的構造的位置の確定は、「鉄戦No.1」過渡期世界論獲得の決定的契機であり「暴革命論」過渡期世界論の限界を突破する主体的力であった。そして同時に「先ファ論」が提起した民族国家人種を越えた世界共産主義の思想(プロレタリア国際主義の深化)と世界プロ独の思想は「鉄戦No.2」世界共産主義党史観の歴史的任務を獲得する決定的契機であった。

⑪ 「暴革命論」の戦略党としての限界は、「先ファ論」の過渡期世界党の実践的位置と民族共産主義止揚の思想性を媒介として「鉄戦No.1」過渡期世界党の党・軍・統一戦線論へ結実し、「鉄戦No.2」共産主義の歴史的任務と論理的任務を統一する党

へと結実したのである。

「暴革論」から「先フア論」へと党と戦略を深化してきた我々は、六九年「安保決戦」を最も勇敢に闘い抜いた、「鉄戦No.1」過渡期世界論・革命戦争論・機動遊撃戦論・党一軍統一戦線論を獲得、更に「鉄戦No.2」世界共産主義史観・世界共産主義の歴史的任務と論理的任務を統一する党・唯物史観一資本論一帝国主義論一過渡期世界論の体系的な獲得に到達した。

① 七〇年代階級斗争の質が先行的に問われていた六九年において、破防法攻撃と四・二八斗争の敗北を乗り越え、七・六を頂点とする赤軍派との分派斗争においても自己の戦略的確信から「先行性フアリズム論」を断呼として提起してきた我々は、赤軍派の諸君が大菩薩峠に一向過渡期世界論が導く前段階起論を挫折させた敗北をふまえ、唯一、六九年安保決戦を最も勇敢に闘い抜いた。RGを先頭に断呼する闘いを展開した我々は、闘った者のみが血肉を通して獲得しうる「党の革命」を開始した。

七〇年代武装斗争の質を我々に突きつけた「安保決戦」の教訓は、同時に七〇年代武装斗争の質に耐えうる「党の質」を我々に問うた。これが我々に課せられた「党の革命」の内容である。

② この七〇年代武装斗争の質が要求する党の質は、我々が「暴革論」「先フア論」で獲得し深化してきた「論理的任務」の領域における党の指針を根底的に問うた。

歴史的現在に立つ我々が、変革対象世界の把握と戦略確定を直接的任務とする党として指針を深化してきたところの「党」の論理は、深まりゆく武装斗争の質と突きつけられている党内的団結の質とに答ええきれぬ限界をもっていた。

③ この限界を突破するために、我々は「未完の革命世界」としての過渡期世界を、「暴革論」の方法と「先フア論」の権力論、階級斗争論を継承しつつ、これを世界党・世界赤軍建設一世界

プロ独樹立の途上におけるプロ独派の、党主体の問題に引きつける視座から、「鉄戦No.1」過渡期世界論を獲得した。未完の革命世界を、世界党一世界プロ独を闘い取る主体的階級斗争世界として扱えた。そして、過渡期世界党の質を指針しようとしたのである。

④ 即ち、未来の共産主義社会論からのみ共産主義を獲得しようというのではなく、また、初期マルクスの共産主義運動論だけから共産主義を獲得するのではなく、唯物史観をあらたな視座から過渡期世界党の現在の任務に引きつける『世界共産主義史観』によって共産主義を獲得したのである。

⑤ 世界共産主義史観は、人類の全歴史を共産主義を現実のものとする全運動として扱える。即ち、人間存在の根源をなす社会存在の矛盾が、「労働」一「階級斗争」一「世界党」へと発展する必然的根拠を史観一世界観として確立する。

⑥ 人間を生物から区別して社会存在とする労働が精神労働と肉体労働に分割され、分業が所有を生み出して階級社会が国家の総括を呼び出すと、人類の歴史的行為の軸は労働から階級斗争に移った。

人間の社会存在としての基本形態は協働である。労働の分割と所有の発生が階級社会を確立するまでは、協働は生産様式であり、生産力そのものであった。だが、共同体の共有が戦役捕虜と流浪民を非所有者として支配し、精神労働の不均等が戦役協働に対する指揮権を確立する時、そして共同体間交換一商品流通が共同体所有権意識を形成し、一般の等価物としての特殊な商品一貨幣の発生が共同体内に浸透し始めるや、生産手段に

対する占有集団を生み出し階級社会を形成した。こうして、協働は、生産手段の所有者と非所有者との対立を源とする生産諸関係の下におかれた。

生産力であり生産様式であった協働は、生産力と生産関係の矛盾として社会存在の基本形態となり、社会存在は階級社会とし

て矛盾を史的に展開、生産力と生産諸関係の形態が、奴隷制封建制資本制生産様式として社会構成体を形成した。

⑦ 精神労働は階級支配者と国家権力者に占有され、労働の諸成果の史的蓄積も支配階級に「技術」として占有され、「イデオロギー」として結実していった。

⑧ 階級分裂下のイデオロギーと哲学は、人類に社会存在の矛盾を生産力と生産関係の矛盾として把握することも、人間存在の普遍的当為を突きとめることも出来ない。ましてや、社会存在の矛盾を階級斗争で推進すること、階級斗争を通してはじめて人類の普遍的当為が共産主義を獲得することを把握することは出来ない。故に、当為と存在は階級社会では統一出来ず、階級斗争の発展がプロレタリアートと資本の世界性を基礎として始めて共産主義を獲得し共産主義運動を通して当為と存在を統一的に止揚する契機をつかむのである。

⑨ 共産主義は、資本の世界性とプロレタリアートの世界性を社会存在の矛盾の物質的基礎とするが故に、プロレタリアートの階級斗争は、世界共産主義を現実のものとする世界党の世界観一史観によって思想的にも組織的にも武装されることなくしては、歴史の現実を止揚する力とはならない。

⑩ 共産主義を現実のものとする歴史の任務は、労働一階級斗争を通して世界党を闘い取る任務とならざるをえない。世界（対象）をわがものとする人類は世界党（主体）をわがものとしなくてはならない。

⑪ 対象変革と主体変革の同一性は、マルクスの産業資本を対象とする世界党からレーニンの帝国主義を対象とする世界党への変革を要求する。過渡期世界は未完の革命世界（対象）と主体的階級斗争世界（主体）の同一性を要求し、過渡期世界党の質を獲得することを我々に要求する。

⑫ こゝに我々が獲得すべき共産主義の内容がある。即ち、唯物史観を過渡期世界党の歴史的現在の任務に引きつける「世界共

産主義史観」の核心がある。かゝる世界観に党の質をおくことが共産主義の現代的把握である。

⑬ 共産主義は人類前史を止揚し真の人類史へ世界共産主義党形成を通して発展する。世界共産主義党形成（主体）斗争は未完の革命世界（客体）を世界プロ独（主客統一への転回）へ自己を結実する時にのみ現実的歴史の力となる。この任務が党の歴史の任務である。歴史的任務は意志の能動性として直接対象の把握に向う。

⑭ すなわち共産主義の歴史的任務は、変革し獲得すべき全対象世界の論理的把握と、この把握を通じた戦略へ結実し、党の戦術にもとづく党風と軍紀にまで結実しないかぎりその任務を現実のものとして出来ないからだ。論理的任務は歴史の任務を現在の現実のものにし、歴史的任務は論理的任務を未来的現実へ高め

⑮ 共産主義の歴史的任務と論理的任務を党において統一する立場、これが我々の獲得した過渡期世界党の質をつくり出す共産主義の内容である。

⑯ 「鉄戦No.2」綱領獲得の諸前提である。この立場は、「暴革論」「先フア論」で指針を深化してきた理論的任務領域の党を包摂し、体系の中に生き生きと甦えらせた。

⑰ 即ち、「資本論」「帝国主義論」の上向的論理体系から「過渡期世界論」を把握して、過渡期世界党の質を指針せんとしてきた「暴革論」と「先フア論」の党の指針は、唯物史観を過渡期世界党に引きつけるあらたな視座を獲得した「世界共産主義史観」によって全歴史的任務の下に指針されることになったのである。この方法から、「暴革論」「先フア論」「鉄戦No.1」「鉄戦No.2」は止揚され体系的に包摂されるのである。我々は七〇年代武装斗争を闘い抜く攻撃的非法法を攻撃の軍

事戦略によって武装し、党の地下正規軍と公然軍団を組織するのであるが、軍は機能的軍事として組織するのではなく共産主義の党が組織するものとする。

党は共産主義の歴史的任務と論理的任務を常に統一する。歴史的任務は歴史の現在の直接的任務、権力斗争へ結晶され、綱領的立場から戦略化される。戦略がいかなる権力を樹立するか、という直接的任務に結晶し、党風と軍紀に高める時、獲得される未来は現実的なものとして呼び込まれ真の歴史的任務となりうる。この視座が批判する政治対象は何か？

④ 我々は、方法において唯物史観↓資本論↓帝国主義論↓過渡期世界論という体系的の方法をとる。即ち、過渡的弁証法の下に論理的向下・向上の弁証法を適用する。

この方法的視座から宇野の原理論↓経済原則↓唯物史観という逆倒せる方法を断呼拒否する。これが、「鉄戦No.2」宇野体系の根底的解体を貫く立場である。

同時にまたこの方法は黒田が西田哲学の場所的弁証法から「場所的現在」を設定し、場所の論理を勝手にマルクスの論理的向下・向上法であると決め込み、この大間違いを前提として唯物史観の過程的弁証法を歴史主義の欠陥と非難、唯物史観の過程的弁証法を論理的向下・向上法で再編して史的唯物論に改策するという立場を誤りと断定する。即ち、過程的弁証法を場所的弁証法に詰め込む立場に反対する。この作業が「鉄戦No.3」本誌三部黒田体系の根底的解体の任務である。

⑤ 日向派は、七〇年代武装斗争が世界プロ独派に要請する普遍的任務として党の革命を把え返すことが出来なかった。六九年安保決戦を日とりに日和った逃亡集団でつくった日向派が、武装斗争の現実的実践が要求する党の革命の質をつかめなかったのは当然である。

仏同志を破防法攻撃で権力に奪われ、RGを先頭に最も勇敢

底的批判は、ブントの魂を党の革命で甦らせ、世界共産主義党史観にもとづいて党の共産主義を確立するためにさけることの出来ない思想斗争の課題だった。

これが、宇野批判II「鉄戦No.2」、黒寛批判II「鉄戦No.3」の実践的根柢なのだ。

⑥ ブント内党派斗争は単なるブントという一党派内部の党派斗争ではなかった。六〇年安保の第一ブント以来、一貫してプロ独派の論理的任務を領導した我々が直面した内容は、日本の新左翼が直面する課題を解決するための内容であり、過渡期世界の帝国主義権力と闘う国際的な未成熟なプロ独派が普遍的に突きつけられた課題へ回答する深い内容をもっていた。

この普遍的任務に真向から応えようとしたが故に、我々第二次ブントの弱点がいやが上にも鋭く問われ、深刻な組織分裂をさけることが出来なかったのである。

⑦ だから、我々は自己の弱点をおそれることなくあばき出し、生きた権力斗争の硝煙の真只中で党の共産主義を探求し、党の共産主義を論理的任務との統一において党の内実とし、党風と軍紀へ結実させようとしたのである。即ち、第一ブント以来、自己の論理的任務を規定してきつ諸理論を根柢から検討した。ブントを追い込もうとし、かつ、ブントに輸入されて内なる敵へと対象化した黒田理論とも真向から対決しなければならなかったのである。

⑧ そして今、論理的任務の領域に限定されていた共産主義の戦略化、戦略的限界を、歴史的任務との党における統一として克服してゆく地平に到達したのである。到達した高い地平から「暴革論」「先ファ論」「鉄戦No.1/2」を揚棄し、攻撃的非合法の体系と党風軍紀に結晶させたのである。

⑨ 我々の「共産主義の論理的、歴史的任務を党において統一する立場」が政治実践に果す課題は「新らたなるスターリン主義」との思想斗争である。

にブント魂を軍事に結実して六九年安保決戦を蒲田正面戦で闘ったために権力弾圧の集中砲火をあびて寺田同志以下多くの同志が逮捕され、かつ我が軍事委員が非合法に追い込まれた時、正に反革命の嵐がぶりもどしている時に日向派は第二次ブントの清算者として登場した。

⑩ 彼等は党の指定を一つは黒寛の「行為的現在における場所的立場」に求め、認識型自覚党形成論をブントに輸入した。二つは宇野の原理論↓経済原則↓唯物史観に依拠して、経済原則（内容として黒田の社会原則を詰め込み）で共産主義社会論をつくり、これを共産主義論だと思ひ込んだ。

⑪ 彼等は、対象把握においても、宇野と黒寛の体系的の方法の差異にも無自覚のまま、言葉としては黒寛の資本論II「普遍本質論」帝国主義論II「特殊段階論」過渡期世界論II「現実適応論」と規定し、内容は宇野三段論に依拠した折衷紙細工だった。だから過渡期世界論を黒寛の言葉と取り「相互依存相互反撥」と規定し、その後「相互依存相互反省」と改悪する。相互反省の極をなす帝国主義は、法則なき不均等発展なき、そして危機も嫌いな管理通貨国家が運転する「国家独占資本主義」であった。

⑫ 宇野経済原則が開示する共産主義社会論

⑬ 黒寛三段階論が開示する相互依存相互反撥論

⑭ これですべてだった。

⑮ この宇野と黒寛の紙細工にアキメクラは屈服した。紙細工はその立脚点である宇野と黒寛を粉砕すれば紙吹雪となってしまひだらう。第一次ブントの挫折を裏切った宇野→大内独逸賞、第一次ブントの背後を突いた黒寛の哲学と三段階論、この古の幽霊を呼び出してブントに輸入し、獄中の破防法被告仏同志をたった二人の中央委員で除名し、機関紙に公表する左翼の常識では考えられぬ革マル的精神。革マルから我が革共同のシンパ日向と評価されている彼等。日向派の依拠する宇野と黒寛の根

我々は七〇年代武装斗争を担う過渡期世界党の内実を獲得することを直接的内的契機として歴史的任務と論理的任務を党において統一する立場を確立した。だが、直接的内的契機を外から強く刺激しその批判の基準の確立を我々に要求した外的要因は、京浜安保共闘の登場であった。

⑯ ML派は、トロツキ的世界革命路線と毛沢東の民族共産主義との折衷に失敗し、レーニン帝国主義論と毛沢東体制間矛盾論の折衷に失敗し、思想的にも対象世界把握においても立脚点を純化しえずに自己分解した。七〇年代武装斗争の質がML型大衆武装斗争を一撃するや、ML派は一朝にして自壊した。

ブントの諸派が、立脚点を掘り下げる過程で分裂しながらも権力斗争をより激しく追求する武闘派（我々と関西の諸君と赤軍派）を生み出していったのに対して、MLが分裂でなく、武闘派を生み落すことも出来ずに自壊したことは全く対照的である。新左翼の七〇年の混迷の外側から、突如突出した京浜安保が、スターリン主義、毛沢東主義、日共所感派を継承していることは、MLの自壊に痛苦な内的反省を迫られていた部分にとって決定的であった。

⑰ 京浜安保の諸君は、地下武闘の火蓋を切った突出力において新左翼の前提に立った。

⑱ 共産主義思想の戦略化としての一国社会主義防衛、一国主義革命II二段階革命論を定式化して各国共産党をファンズムの攻撃にさらして世界革命を敗北させた。

⑲ だからこそ我々は、スターリン主義を変革対象世界の把握と社会主義↓共産主義社会の把握という領域から批判を開始した。即ち、変革すべき対象把握と戦略および獲得すべき未来社会把握の論理的任務を、スターリン主義克服の唯一の実践的任務として指定してきた。

だからこそ、我々ブントは、そして我が鉄の戦線派は、自己の任務を論理的任務に集中し、観念的及スタ主義に自覚の立脚点をおく革共同、就中革マル派と自己を峻別してきたのである。

② スターリン・毛沢東主義をかき捨てる京浜安保共闘が、地下武装斗争において新左翼の前線へ突出したことは、我々の論理的任務という領域に限ってきた党の措置を内的に把え返す外的契機を与えた。

彼等が、「民族共産主義」の立場から「愛国」を称え、「一國主義」を路線としつつも、権力との獄中斗争を断呼として闘い抜けた思想的根拠を考へる時、我々は素直に自己の内なる革通主義と自己対決することを深めさせたのである。赤軍派の多くの同志諸君が一向過渡期世界論・プロレタリア国際主義・世界革命戦争・世界同時革命・世界プロ独というブントが論理的任務で最もすぐれて到達した地平に自信を失って京浜安保共闘に包摂されつつあるのも、スターリン主義、毛沢東主義からの突出という衝撃であつたらう。

③ だが我々は、論理的任務において到達したブントの諸成果が正しく、スターリンと毛沢東はやはり誤っていると確信する。たゞ我々が素直に自己対決をもつて闘った内なる革通主義は、歴史的任務への思想的意識化の弱さであつた。

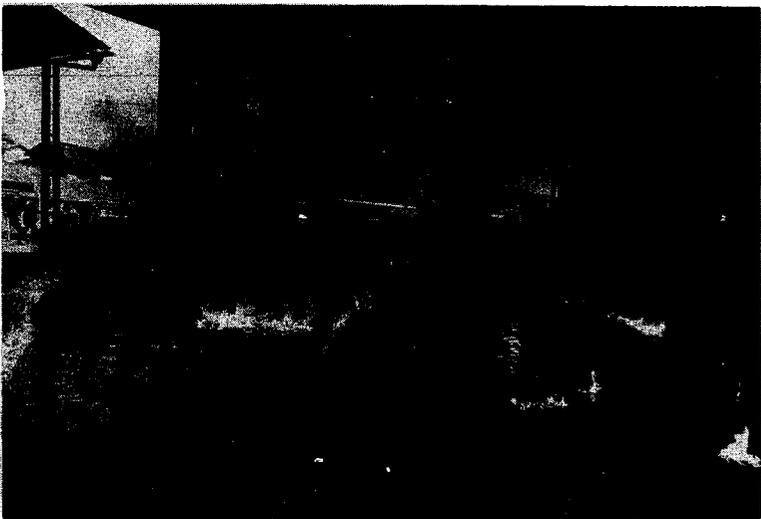
我々は、決して革マル主義的に論理的任務のもつ戦闘性を清算もせず、京浜安保シヨクに自己の論理的任務に自信を失うようなことはしない。我々は自己の論理的任務にますます強固な自信を深め、論理的任務を歴史的任務に於て統一し、綱領戦略を攻撃的非法法党的体系へ打ち固め、不動のイデオロギイを党風軍紀に結実させて断呼として地下正規軍と公然軍団の闘いを貫徹してみせよう!!

これが、我々が到達した革命論の結論である。

第2章

蜂起を組織する単一党への道

羽山太郎



(I) ブント内におけるトロツキー型統一戦線論

止揚過程の総括と日向派のソウイェト型統一戦線への八派再編論の完全破綻

第二次ブントの統一戦線論の止揚過程は、トロツキー型統一戦線論の止揚過程であり、過渡期世界党の党組織論への発展過程であつた。

六回大会から七回大会への統一戦線論の止揚過程をもつて始まるこの論争は、八回大会の、日本共産主義協議会(党派間統一戦線)とソウイェト運動論から九回大会の党一軍及び武装ソウイェト運動論(党一RGI全共斗反戦武装行動隊)への発展過程であり、実践的には、69年10・21の敗北を通して党一軍一統一戦線の組織構造の確立へと継承される。

そしてこの発展過程を現在の把え返すならば、トロツキー型統一戦線論を原型とする統一戦線論を、過渡期世界の蜂起を担う単一党形成論と統一戦線及び党派斗争論へと止揚して行く過程でもあつた。

六回大会路線と統一戦線論は、トロツキーの「次は何か」を妥協体制論に類推的かつ機械的に接木したものであつた。

トロツキー統一戦線論とは――

(1) 30年代危機の下では社民の組織する労働組合の経済的基盤が崩れる、したがって、ワイマール体制はブリーヒング、パーベン、シュライヒャーと中間政府の動揺過程を通る。

(2) ブルジョアジーと軍は、先進国に於いては直接独裁体制をとれぬため、小ブルと中農の危機感を代弁するファシズム党に集約をまかせようとする。

(3) 社民は、民主主義的政治基盤とこれを支える経済安定の上に残立しているため、経済危機とファシストによる民主主義的政治基盤への攻撃は社民の政治的存立条件を犯すものであるから、社民はファシストと決定的に対立せざるを得ない政治力学構造におか

れている。

- (4) したがって、社民をファシストの双生児とするスターリンの「社会ファシズム論」は誤っている。
- (5) 共産党は、ファシスト及びファシズム政治と対立せざるを得ない政治力学構造をもっているところの社会党と党派統一戦線を組み、「別個に進んで共に撃つ」べきである。
- (6) 統一戦線は、一党派がプロレタリアート（階級）の政治へゲモノを握ることが出来ない段階で危機に直面した時にとらねばならぬ政治政策である。

(7) だから、統一戦線は防衛的手段として考えてはならず、積極的に権力へと高める展望を持たねばならない、即ち、統一戦線は工場委員会等の型で発生している社民と共産党のそれぞれの自然発生性を統一してソヴィエトへ発展せねばならない。そして統一戦線の最高形態のソヴィエトを展望すべきであるというのである。

トロツキー型統一戦線論は、①スターリンの「社民はファシストの双生児」という社会ファシズム論を批判した点と、②権力問題・ソヴィエト論との関連で提起されているという2点に於いて積極的であり、ユニークであった。だが、決定的な限界をもっていた。

第一に、過渡期世界として変革対象世界を把握出来ないが故に、ファシズムの政治的攻撃性格を普通のものとして扱えられず、政治構造上のものとしてしか扱えられなかった。

第二に、したがって共産党そのものの革命を要求して過渡期世界党の性格へと革命するという基本的立場を持ち得ず、スターリニズムを政策として扱え、スターリンの直系であるテルマンの独共産党に統一戦線論を提起して共産党に期待をよせ、独自の革命党（別党コースを）創設し、そこから主体的に問題を立てることが出来なかった。

第三は、社会党及び社民傘下の労働組合員が経済危機と政治的民主主義の危機の中でファシストに對立して社共統一戦線論へ傾斜し、ソヴィエトへ発展するという安易な政治力学主義に陥っており、戦

後ドイツのレーテ崩壊の総括を30年代に生かすことが出来ず、レーテの再現を政治力学主義と自然発生性に求め、これへの介入として党を政策的機能化して考えていたことである。

第四は、過渡期世界の把握の喪失は、当然戦略的に前段階決戦論を導き出すことが出来ず、ファシズムがプロ独か、という命題を中間政府の下で提起しながらも、プロ独を担う党主体、蜂起を担う単一党派、過渡期世界の軍事を組織しうる党の組織構造を提起出来なかったということ。

第五は、したがって「党一軍一統一戦線」という過渡期世界党は、普遍的に要求される質をつかみ、開戦前段から帝国主義軍隊解体斗争を攻撃的にしかける世界党へと、第4インターを組織することが出来なかったという事である。

ブント六回大会議案は、岩田危機論の上に妥協体制崩壊論、生活と権力の防衛論、左翼反対派を、つないだものだった。

総評の左翼化を生活の権利防衛論で左翼反対派として突きあげ、介入し、ソヴィエトにするという典型的な政治力学主義であった。この全面的否定として党派解体論へ裏返しされた。レーニン「何をなすべきか」の原則の復権と同時に中核派の独自路線を契機として三派全学連から反帝全学連の分裂過程が続き、68年10・21防衛斗争と新宿騒乱罪を契機として再び統一戦線論が問題となった。

東大斗争の高揚過程で反人民戦線、反革マルの機運が全共斗運動と反戦青年委の拡大を背景としてブントに統一戦線論の提起を要請していた。

実践的の回答として、なし崩しファシズム対人民戦線派対プロ独派の三つ巴構造が過渡期世界論から把握され、統一戦線論は「反帝統一戦線論」が「70年安保停戦」「日帝打倒」「沖繩斗争勝利」の三原則を基準として提起された。

三プロク段階斗争論を権力論を軸にすえて人民戦線秩序派との関連で扱え、これにプロ独派を対置するという三つ巴構造を戦後過渡期世界の基本構造として押えたことは八回大会路線の積極性であ

った。そしてこの構造的把握が、仏「先行性ファシズム論」及び「鉄の戦線No.1」の仏過渡期世界論へと発展させられていることは衆知の事実である。

しかし、三原則（沖繩斗争論の相違を不問にして沖繩斗争勝利という抽象化）で統一した反帝統一戦線は、4・28沖繩斗争でたちまち試練にたたされ、統一戦線を担う過渡期世界党の軍事を組織する質そのものが問われ、まず党を問うことなくして統一戦線が無意味であり、党が党内密構造としての軍をもつことなくして、全共斗と全共闘、コンミンチン型全学連への再編という三本建としてのソヴィエト運動論へ止揚することが出来ないうことが明らかになった。

即ち、反帝統一戦線をソヴィエトの萌芽として定式化する理論の限界が鮮明となった。

赤軍派は、69年11月ファシズム軍事政権成立論を根拠として、10月蜂起を単純に提起し、大衆運動突撃党として軍事を短絡させた。即ち、軍に大衆運動党を解消して突撃党を形成し、攻防の弁証法なる悪名高き軍事過程論に純化し、10月に蜂起する突撃党赤軍と攻防の弁証法がソヴィエトであるという定式化がなされた。

他方、叛旗・情況プロクは反帝統一戦線を原則として主張し、軍事反対派へ転落した。即ち、社会革命派の自己権力論を反帝統一戦線論へ昇華させた結果である。彼等が、69年秋期斗争過程で「全共斗軍団」論へ転化して党一軍一統一戦線の構造を把握出来なかったのも当然である。

しかし、叛旗派は情況派との分裂を通して、党一軍一統一戦線を語らざるを得なくなっている。だが、社会革命派下からの叛旗八派解体の系譜へ党一軍一統一戦線を位置づけようとしても、やはり、先進国武装斗争論現代革命の蜂起への道すじに於ける統一戦線と党派斗争の質を把握出来ない限りやはりダメなのであり、魂なき形態論にすぎない。

八派のソヴィエト型再編を相も変らず日本共産主義協議会論との

ワンセツトで語る日向派は、69年4・28斗争以前の問題意識に逆もどりましたものに他ならない。反帝統一戦線一党派間統一戦線日本共産主義協議会一コンミンチン型全学連というパターンの最後のページを、AIF（正規軍）一地区叛軍（ソヴィエト型組織）に書きかえ、これに恒常的武装斗争という名前をつけているだけなのである。

権力の攻防軸を抜きにして、プロ独派が国際的に問われた普遍的質に答えようと思せず、トロツキー型統一戦線論から総括しようと思せず、相も変らずトロツキー型統一戦線論を原理とし、統一戦線ソヴィエト型組織一蜂起のパターンから抜け出せないのである。

統一戦線論の領域把握に象徴される日向派のパターンは、正に第3次ブントと言えしるものではない。69年4・28斗争以前の旧ブントのパターンを改作したものにはすぎないのである。

6月沖繩斗争の中で、八派が自己分解し、八派のソヴィエト型組織への再編という日向派路線は破綻し、梅雨のようにジメジメと流れていったのである。

さて、我々は、現代革命に於ける蜂起を担う単一党派への形成過程として、先進国武装斗争を位置づけ、そこから八派解体一党派吸合の位置を現在の明らかに提起している。

この基本的党派政策の基準内容を理解する上での前提として、トロツキー型統一戦線論のブント内での止揚過程を総括したのである。

(II) 先進国武装斗争の試練と統一戦線及びブント内党の革命と連合性の止揚と二派吸合

現代革命に於ける蜂起への道が、先進国武装斗争の勝利的攻勢を通してしか切り開かれえない限り、現代革命に於ける党派斗争の軸はまず、①先進国武装斗争をいかに切り開くのか、切り開くこととするのか、にあり、故に②先進国武装斗争の鉄の試練の真只中で武斗プロ独派が検証されると共に左翼毛沢東主義者の間に、軍事に集約される共産主義の内容が、即ち世界プロ独をめぐる綱領・戦略

が主に軍事を通して党派斗争として展開されざるを得ないであろう。これが現代革命に於いて我々がおかれてある党派斗争と統一戦線の位置である。

武装斗争が端的に展開された67年10・8から69年秋期安保決戦に至る段階では、スターリニズム諸党派と革命的左翼諸党派の対立と区別が初歩的ではあれ「武斗」によって峻別されてきた。即ち、人民戦線路線をとるか、プロ独派の道をすすむのかが問われてきた。60年代に入ってから先行性ファシズム権力の反革命軍事が、60年代プロ独派の革命的軍事を封じ込める局面に於いては、最早旧来の延長上に60年代プロ独派をそのままプロ独派として存続させることは出来なくなつた。なぜならば、現代革命に於いては、先進国武装斗争を通さずして蜂起内戦を切り開くことが出来ないからである。だからもし、自称プロ独派が反革命軍事に封じ込められればなしで守勢を固定化し、反革命軍事の重囲の枠内での散発的発散に革命的軍事を終らせるならば、蜂起内戦への道は封じられ、したがって先進国武装斗争から蜂起内戦を通じて世界革命戦争を切り開く道は閉ざされてしまふからである。

現局面の反革命的軍事の重囲を突破することに無自覚な党派、重囲の枠内での散発的軍事に自己満足している党派、組織拡大の主体還元主義に埋没する党派は最早やプロ独派とはいへぬのである。

60年代安保で第一次ブントがかかげた原則を第二次ブントが斗争実体をもって社会的な力としたように、現局面の重囲を突破することなくして、更なる高度の武装斗争を展開して再び攻勢的武装斗争の局面を握ることなくしては、口先で綱領や理論を語るだけでは第二

の自己検証と党派斗争を通して党の革命的課題は生きたものとして完成されると考えらる。

だからこそ、赤軍派との党派斗争の地平を右翼的に八派政治の枠に持ち込むのではなく、八派に対して突きつける先進国武装斗争の地平に於いて赤軍派を止揚せんとするものである。

関西の同志諸君との連合の地平もまた、先進国武装斗争を切り開く質に於いて鉄の戦線派が彼らを索引しつつ蜂起を担う単一党派たりうるか否かを自己検証する過程であり、高い値に於ける武斗派連合の実体である。この実体的表現こそが、実はブント系諸派の党の革命的決着を問うものであるが故に、我々は赤軍派をもその射程におさめ、理論上軍事を語る姿勢をもつ怒濤派をも射程におさめようというのである。

ここでは二つの問題が一個二重に問われる。即ち①プロ独派が真のプロ独派たりうるか否かを問う国際的任務に於いては、60年代プロ独派を八派対三派として問うることと、②この普通の課題がとりもたず、ブント系諸派の党派斗争から党の革命に至る道程であるが故に、党の革命的決着は先進国武装斗争の鉄火の試練の中でつくのだからである。

したがって我々が二派吸合という場合、先進国武装斗争の中で蜂起を担う単一党への党派斗争領域に、赤軍派と京浜安保共斗を共に置いているのであるが、この党派斗争領域で赤軍派に対してはブント系諸派の党の革命という射程において党派斗争を展開しなければならぬのである。

しかし京浜安保共斗との党派斗争の値は、同じ先進国武装斗争を切り開く領域にありつつも決してブント系諸派の党派斗争と党の革命的射程にある赤軍派との位置と、これを混同することが出来ない重大な問題ををはらんでいるのである。即ちプロ独派の革命的理論課題の先端を担っているブント系諸派は、第二次ブントの獲得した到達点として「世界プロ独」論を共通のものとして持っている。(第二次ブントの実質的出発点である七回大会以前に脱落した怒濤派の

次ブントが10・8以来の武斗を通して自己を検証し他党派を批判してプロ独派としての基準を確定してきたように我々も今、まず高度の先進国武装斗争を通して、ブント系党派斗争に決着をつけつつ同時に八派を批判していくのである。この峻別が清水谷公園の蜂起戦争派か、日比谷公園のソヴィエト派か、として社会的に突きつけられた内容であった。

現在進行している60年代プロ独派のブレという問題の質は単なるブレ、路線上のブレといった次元を越えた権力論を軸とするところの反革命軍事との攻防に対するプロ独派の自己検証としてあるのである。

権力との鉄火の試練の中で検証されることなくして革命党派の共産主義も綱領も戦術も補え上げられることはない。

ブント系党派斗争も権力との軍事攻防の鉄火の試練の中ではじめて真の決着が問われるのである。すでに、69年秋の安保決戦に於いて、情況、日向、叛旗の三派が検証されており、情況、叛旗が軍事反対派として自己宣言を終えたのに対し、日向派のみが新たな軍事反対派として八派政治の枠にとどまっている。そして日向派は、先進国武装斗争を切り開く任務を放棄する為に「恒常的武装斗争論」を主体還元主義的ソヴィエト論へと低めて恒常的平和斗争を完成し、現代革命の蜂起への道に先進国武装斗争の中で蜂起を担う単一党としての第三次ブントを検証する道を避け、権力斗争を避け九サロンの地平で諸知識の整理を行い、認識論型戦略論を革マル的に認識する行為集団を勝手に第三次ブントと自称しているのである。

我々は69年4・28破防法攻撃を契機として始まったブント系諸派の党派斗争は単なる「ブント内の出来事」ではなく、世界各国の直面する権力との攻防に於ける普遍的課題であると考えるが故に「認識する行為集団」の完成をもって党の革命を完結しようのほなく、正に国際的に普遍的課題である先行性ファシズム権力との先進国武装斗争を切り開くことにおいて、そして正にこの先進国武装斗争という蜂起の道すじを通して、蜂起を担う単一党たりうるか否か

諸君は文献原則主義的に、ここに接近している。だが京浜安保共斗の諸君には変革対象世界把握という論理的任務に於いて決定的な相違がある。毛沢東の「国際共産主義運動の総路線」を信じ、世界プロ独の概念が獲得されていない。したがって、京浜安保共斗の諸君を、我々は権力の攻撃から断固として防衛し、共に先行性ファシズム権力の反革命軍事と対決しつつ、世界プロ独をめぐる国内での彼等との党派斗争がやがては中共及び中共系アジテ諸党派との党派斗争に発展する事を確実に押えつつ、蜂起戦争派の実体化と二派吸合の問題を、赤軍派と区別して考えねばならない。若し、これまで展開したような明確な内容が獲得されなければ、①八派解体と再編の方向、②二派吸合と世界プロ独との関連、③関西派との連合止揚基準とブント系諸派の党派斗争の決着、という三つの領域の問題を、現代革命に於ける蜂起への道に先進国武装斗争の中で蜂起を担う単一党形成過程としての統一戦線と党派斗争という基準から統一的に包摂する事が出来ず、一貫した現実的党派対応が出来ないだろう。

かかる現代革命の蜂起にむけた単一党建設と統一戦線・党派斗争の統一的視点が獲得されていない時、党派対応は一貫性を欠いた政治主義的をプラグマチックな政策政治におちいるのである。

第3章 唯物史観と「資本論」「帝国主義論」

(夏期合宿レジメ)

- 第1報告 西部地区合宿レポート 日野弘蔵
- 第2報告 北部地区合宿レポート 町田必殺
- 第3報告 南部地区合宿レポート 須藤一鉄

西部地区合宿レポート

日野 弘蔵

全国の革命的同志諸君!! 我西部地区委員会、夏季合宿を圧倒的に勝ち取り、党建設の第一歩を打ち固めたことを報告する。我々は本合宿において「鉄の戦線」No.2が到達した立場から「暴革命論」「先ファ論」「鉄の戦線」No.1を把え返し、革命論として体系的に把握することを目指したのである。共産主義を軍事において組織する現代過渡期世界党の党の質を、共産主義の党として指定する共産主義そのものを確立することであった。つまり、共産主義党指定の根拠を、いかなる革命的な世界観・史観・共産主義によって確立するかであった。それはまた、唯物史観と戦略とを党においていかに統一し、綱領戦略論から党風と軍規にまで高めうるかを問う内容でもあった。

われわれは、ドイデの四契機を社会存在と人間存在の基礎として唯物史観の始原にすえた。そしてこのから階級社会への分裂の根拠と階級社会における人間労働主体としてこの人間の存在と思维を把え、階級社会の動力である生産力と生産諸関係、および下部構造と上部構造の関係を押え、精神労働と肉体労働との統一においてのみ人間労働として存在する人間の存在と思维との闘いを、唯物史観を貫く力と考えた。精神的労働と肉体労働との分割が自然的分業を社会的分業へと発展させ、私的所有権が私有財産社会と階級社会を生み出し、階級社会は支配階級のために国家の総括を必要とするに至った。

無機物・有機物・生物という宇宙の発展から生み出された人間の自然は、人間労働によって、生物界から自己を区別し社会を形成し歴史をもった。

だから、人間は存在として何んであるかを問うならば社会存在であり、社会的存在として歴史を始動する四つの契機をもった。そし

て四つの契機を統合してゆく「協働」こそが人間存在を社会存在として規定する最重要の契機をなしていたのである。

①精神労働は共同体の労働過程において指揮権として支配権の萌芽を形成し、共同体間競争や自然的猛威に敗北して捕獲された共同(所有)体内部の無所有グループに対する支配関係の発生を経て、分業↓社会的分業↓支配権↓所有権を発現させた。そして②共同体間の交換が、まず共同体に共同所有権意識を生み出し、やがて共同体間の交換が「一般的等価物としての特殊な商品」である貨幣を発生させるや、この貨幣発生を媒介として個人所有の概念が無所有集団に対する所有集団の所有権を基礎とした支配意識と結合して、個人所有の概念を急速に発生させていった。

なお③この二つの結合はまた剰余生産物の拡大に基礎づけられていた。

四つの契機の源をなす、欲望の無限な発展と、この無限欲望の発展を保証する人間労働の精神労働における目的意識の計画化と総括を通じた能動的生産力の発展⇨労働用具のかぎりなき発展能力によって生み出されてくる剰余生産物に基礎づけられていた。

こうして共同所有の協働⇨生産様式が崩れ、階級社会が生産手段と所有する支配階級の国家権力によって総括されるに至るや、肉体労働の力が生み出す諸成果が精神労働の力によって総括され、精神労働は国家権力を握る支配階級の占有するところのものとなる。すなわち「支配階級の思想はどの時代にも支配的思想である。

すなわち社会の物質的力であるところの階級は、同時にその社会的な精神的な力である。物質的の生産手段を左右する階級は、それと同時に精神的生産手段を左右する。だから同時にまた、精神的生産手段を欠いている人々の思想は、おおむねこの階級に服従していることになる。支配的思想とは支配的物質的諸関係にほかならない。まさしくその一つの階級を支配階級とするところの諸関係の概念的な表現、すなわちこの階級の支配的思想にほかならない。支配階級をかたがけする諸個人は、とくにまた意識をもち、それゆえ

思考する。したがってかれらが階級として支配し、そして歴史の一時代の全範囲を規定するかぎり、かれらがこのことを力のおよぶかぎりおこなうこと、それゆえに思考する者、思想の生産者としても支配し、かれらの時代の思想の生産と分配を統制するということが、したがってかれらの思想が時代の支配的思想であることはいくらでもない。そして「これが今や「永遠の法則」だと宣言される。」(ドイデP66)

我々は、人間存在を常に社会存在の根源として把え、唯物史観の四契機において把える。ということは、人間労働を軸として生物から人間への、自然から社会への区別と飛躍をとげた人間は、存在として四つの契機をもって社会存在となっていくことである。だから、人間の社会存在は四つの契機を始源とするところの、労働主体という行為者なのである。だが人間のこの始原的行為である労働は、共同所有の協働としてあった労働が精神労働と肉体労働とに分割することによって階級社会における労働となるが故に、階級斗争を展開して歴史を推進することになる。すなわち、生産力と生産諸関係が、上部構造⇨下部構造として階級斗争を展開する。そしてこの階級斗争の推進が歴史の永い過程を経て、生産手段を占有する支配階級と階級独裁国家にうばわれていた精神労働をわが手にうばい返しつづ、イデオロギー斗争を展開してゆく。こうして資本制生産社会に至ってはいじめ階級斗争が人間存在と社会存在として何んであり、いかに決着づけられるべきかを獲得してゆくのである。

いくたの階級斗争とあらゆるイデオロギー斗争の諸傾向は、労働者階級に、階級形成と戦斗機能集団としての党をもたらしつづ、かつ私有財産と国家とを直接否定する無政府主義や、幾多の諸傾向をもつ共産主義を生み出しつづ発展した。

マルクスは、プロレタリアートに精神労働をうばいかえすための闘いを、ブルジョアイデオロギーとの斗争を展開したが、マルクスのイデオロギーはそれだけにとどまらず階級斗争が生み出した幾多の無政府主義や共産主義の諸傾向を止揚してマルクス主義の下に統

一的に共産主義を体系化した。

ヘーゲルや、その弟子連であるブルジョア・パウエル、フォイエール、バークス、ガンヌ、ルーゲ、チエコフスキー、モーゼス、ヘス等がマルクスに止揚されただけではなかった。

パプーフ、ブルードン、ブランキ、パターニン達の実践的かつ理論的諸傾向の成果はマルクスによって包摂され、マルクスの体系の中に止揚されていった。

こうして階級斗争は盲目的な、すなわち未だ必然を洞察しえない自然発生の段階から、共産主義運動に貫かれ共産主義社会へ至る史観によって確信を与えられるに至ったのである。

そして正に、共産主義は、一挙の同時のみならず事業として、共産主義革命を世界同時革命として要求し、共産主義運動を歴史の現実の基礎あるものとするための世界党を要求していくのである。

我々は「鉄の戦線」No.2で唯物史観を「労働」→「階級斗争」→「世界党」へと発展する人類の歴史の行為と確定した深い意味を、更に深化して意識化し血肉化しなければならぬ。

マルクスが対象とした世界資本制生産社会において、階級斗争の盲目性を目的に転換させる契機を「①近代ブルジョア社会が過去の人類前史をすべて総括したものと、人類史の最高かつ最後の私有財産社会的分業を開化させ②過去の歴史のすべての生産を上回る生産力を資本主義が生み出し、生産力と生産諸関係の矛盾を世界市場においてのみ顕在化させ、その止揚も、地方的止揚を不可能とし、世界共産主義社会としてのみ止揚しうる現実の基礎を形成し③世界性において矛盾を止揚しうる階級プロレタリアートの形成」をもって与えられ、人類の歴史の行為が前史を真の人類史へ転換させてゆく歴史観を獲得したのである。

世界党を獲得する斗いは、世界革命を実現する根幹であり、人類史の存在と当為を統一してゆく人類の歴史の行為の最高形態である。觀念的な世界プロレタリアートの指定や、民族共産主義の地方的一國主義リアリズムは真の必然に敵対するものであり、党が組織する

北部地区合宿レポート 町田 必殺

宇野体系の根底的解体は、我が共産主義者同盟「鉄の戦線派」が現在の到達した、党・軍・統一戦線への過渡期世界党への転換、つまり共産主義を軍事において組織する党主体の質そのものが、人類前史を切り開く歴史的任務と論理的任務とを党において統一する共産主義の内実をもって、宇野体系の部分修正をする日向派、宇野体系に基本的屈服している黒田等々との熾然と党派闘争を断固推進するなかで根底的に解体しつつあるのであろう。

第一次プロトから第二次プロトにおけるブレつづける戦略論争過程において、党の戦略を根底的に止揚すべく、変革すべき対象の批判的把握の方法論が、すなわち論理的任務の方法論が、宇野方法論黒田方法論に全面的に対決し、その破産を克服し、提出されたのが仏「暴力革命論」である。それはプロト七回大会で確認した過渡期世界論を「資本論」と「帝国主義論」との関連で体系的な方法として確立することを可能としたものである。

『世界暴力革命論』の論理的任務の正しさは、唯物史観の前史、後史を貫くものとしての統一な人類全史のトータルな把握から導き出される共産主義論を、未来社会論に限定したり、階級斗争論に限定することなく、人類前史を全面的に止揚して真の人類史を切り開く歴史的任務としての共産主義（人類の歴史の行為の最高の必然的行為として）から党の指定をなしていないという限界性にもかかわらず、その発展上、つまり『世界暴力革命論』→『先行性フアンズム論』→『過渡期世界論』（鉄戦No.1）→『共産主義論』（鉄戦No.2）として、まさに克服されるべき限界性としてあったのである。

それでは『世界暴力革命論』（仏）の論理的任務の正しさはいかなるところにあったのだろうか。それはまずわれわれの『世界暴力革命論』仏方法論（普遍本質論と史的戦略基底論）の概略を展開するなかでかかる要点を①独占、②プラン問題として鮮明に浮上さ

共産主義に根源的には革命的世界観に敵対するものとなるのである。

党の斗いは、直接変革対象の論理的把握を歴史観に統一し、敵のいかなる権力を、いかなる戦斗形態において打倒し、いかなる権力を樹立して共産主義を歴史的土台の上に共産主義社会として樹立するかという課題に込めることなのである。

産業資本主義を対象とするマルクスの党から第二インターの民族主義的一國主義への変質に対象帝国主義段階における対象把握をめぐって論争されレーニン・ボルシェビキ党によるロシア革命の成功と世界革命の敗北がもたらした過渡期世界もまた、マルクスの世界党からレーニンの世界党への転換と同質的に国際諸党派に問い、過渡期世界の世界革命と世界党の内実的獲得を要請しているのである。（鉄戦No.1 過渡期世界論における主体的階級斗争世界を参照）我々は、このような把握の上に立って変革対象世界を過渡期世界として把握し、主体的階級斗争世界における世界党（第五インター）の獲得に求め、現代過渡期世界の止揚を世界同時革命世界革命戦争として貫徹する党の資質「党風と軍規」に結実せしめなければならぬ。

せるであろう。そしてそれが宇野体系に対する根底的解体になるのである。

変革対象としている資本主義社会の土台の法則性が論理性と歴史性をもっていう自然科学と異なる複雑さが、この二つをいかに統一的に把握するのかわという困難性として我々の前にある。しかし我々は、次に展開する方法論（暴革・仏方法論）をもって、宇野・黒田が共に統一的に把握することに失敗した地平を克服するのである。

① 資本主義社会は歴史性と論理性を一体化した運動を展開するのだが、他の歴史的社会構成体と区別したものととして資本制商品生産の独自の法則を資本主義時代の運動の普遍的論理として貫徹する。だが普遍的論理自身、社会科学の法則であるが故に歴史的要因から完全に断絶し永遠にくりかえす法則として自己完結することとはできない。普遍本質的論理自体の中に自己崩壊の必然的論理を内包して自己展開するものである。

② 資本制生産社会の論理的性質は自己完結しえないもの、自己展開の内に崩壊の矛盾を累積してゆくものであるが巨視的一時代を企する法則性として資本制生産社会の一時代を貫く。したがって、この普遍本質的論理は、資本主義の混沌とした表象を論理抽象し、分析的に下向し、資本の原基形態商品に到達し、原基形態を始原として論理的に上向、論理的に厳密な移行規定をもって総合した原理である。

③ 資本制生産社会の論理資本の法則は、混沌たる表象の横すべりのな時間的下向歴史的反省によって分析しえない。歴史的反省による始原の下向歴史的反省は、資本の発生共同商品発生史分析にほかならず、始原は歴史の単純商品となる。共同体と共同体間に発生した歴史の単純商品は、歴史の展開の端緒始原とはなりえない。論理的上向の論理的起動力をもちえず始原とはなりえない。資本制生産社会の資本の運動を歴史的にではなく論理的に反省した到達点原基形態のみが資本の原基形態だから、上向展開の起動力

をもちえ、普遍本質原理を総合展開しうる論理的始原となりうるのである。

④ 歴史的反省をさせて、資本制生産社会の論理抽象的下向の到達点から上向して構築する論理体系は、自己完結しえないことはもちろんだが、また他方では、歴史的諸規定・歴史的偶然性を捨象して論理の必然性を抽象、抽象的諸規定を受けつた範疇で構成されたのが「普遍的原理」である。だからこの普遍本質論は自己の論理的上向の延長上へ生きた現実の政治世界と直結し戦略を確定することができないという限界性をもつ。普遍本質論が生きた現実の政治社会としての世界をとらえるためには、普遍本質原理が、歴史的偶然性時間的制約を受けて現象する現実社会の歴史段階的発現形態を把握しなければならぬ。この歴史段階的発現形態を普遍本質論から把握確定するものが史的戦略基底論である。この史的戦略基底論が確定されてはじめて、国家権力と革命主体の攻防を軸とする階級斗争総体の把握を媒介として「戦略」が確定されるのである。

⑤ 普遍本質原理は、最終的には歴史性に制約され、歴史段階的発現形態をとって現象せざるをえないという社会科学特有の性格をもった法則であるが、資本制生産社会の一時代を貫く原理であるがゆえに産業資本主義と帝国主義の両段階を一貫する普遍本質原理でなければならぬ。

⑥ 原理が一つでなければならぬが故に、普遍本質論は産業資本主義段階と帝国主義段階を貫く、原理的抽象の論理でなければならぬ。

⑦ 『資本論』は、対象とした資本主義が歴史段階的には産業資本主義ではあったが、確立さるべき方法論は産業資本主義の原理を確定するものではなく、資本主義の普遍本質論としての原理を確立するものであった。したがって『資本論』の叙述は明らかに普遍本質原理の展開を主要基軸として見なければならぬ。マルクスが、論理と歴史性を分離し論理上向法を叙述の正しい方法

権力を体系の射程において導き出した点、ここにこそ宇野三段階論(黒田三段階論)を根底的に批判し粉砕する不動の力があつたのである。

以上の二点に的を絞ることにより宇野体系は音をたてて解体せざるをえないのである。

① 第一点の領域においては、我々が批判を集中しなければならぬのは②宇野の「『資本論』は科学的方法として純粹の資本主義社会の運動法則を明らかにする」ということと、資本主義の発生、発展、消滅の過程を明らかにするということとを不明確にしている。『資本論』と『社会主義P8』とし「『資本論』の論理上向展開があたかも、時空超越純粹資本主義の未来永劫的法則展開世界へと昇天的に純化されなければならぬ、と主張していることに対してである。」「(鉄戦2号P66)そしてさらに我々は③『資本論』の上向論理の内に独占形成の必然をよびだすことを明らかにすることによりその任を終るのである。(鉄戦2号宇野解体二章)

② (i)『資本論』において論理的叙述と歴史的叙述が混同されていること、そしてさらに純化論理への確立的視点が既述した方法論①と⑦と相いれないことが明確となる。(論理の歴史的過渡性)

(ii) 以上のことを前提的にかまえ、「資本論」の対象の歴史的過渡性と空間的具体性を前提として論理展開のうちにはらむマルクスの論理的上向展開叙述を宇野の思维の中で勝手に純化させ(超時空的論理)、論理学を完成させる根拠が「方法模写説」「経済学はその原理で単に対象の模写とすのではなく方法自身の模写をも示している」(資本論と社会主義P34)なる観念論(純化のための整理の方法)であり、そしてこの方法模写説は「(i)現実には存在しなかつた資本主義の無限純化傾向を宇野の思维の中で勝手につくりあげて、対象世界の産業資本主義時代の傾向であるかの如く主張する点、(ii)この仮定の内的無限純化の傾向を歴史的進化

法(『序説』経済学の方法)としながらも歴史性からの分離が根本的にはなしえないという社会科学に特有の法則性を考慮し、論理的順序を原則とした上向展開叙述に歴史的反省と産業資本主義の実体的分析が付加され混在したものとなつたと考えられる。

⑧ 『資本論』の『帝国主義論』への論理的移行は『資本論』の内的論理の内に見出しうる。独占形成については蓄積論を基軸に捉えて、第一巻第七篇、資本の蓄積過程、第二巻第三篇、社会的総資本の再生産と流通、第三巻第二篇、利潤の平均利潤への転形、第三巻、利潤率の傾向的低落の法則、記述せられた諸理論を、自己完結的視角を拒否し自己崩壊視角から体系化することによって完成しうると考える。

⑨ レーニン『帝国主義論』は産業資本主義段階から帝国主義段階への歴史段階移行期に、資本主義の普遍本質的原理を見失ひ、産業資本主義段階の危機の発現形態が世界的規模で変化したため、その変化現象に眼をうばわれ戦略を見失つた社会民主党内の修正主義『帝国主義論』を一挙に止揚する実践的目的をもって書かれた。したがって叙述は党派論争形式が方法的には分析的下向法と例証法がとられ普遍論理がとられた。等々「『世界暴力革命論』方法論より」

以上「世界暴力革命論」の仏方法論の展開のうちにも明らかなくとく、(i)宇野整理主義『時空超越純粹昇天法』の観念性(鉄戦No.2、宇野方法論解体第一章)、宇野純化妄想に対決し(同第二章)、普遍本質論としての資本論の論理上向展開のうち、固定資本の巨大化、平均利潤率の止揚の論理が生れる。つまり、集積、集中は原理から発生する必然で、平均利潤率を止揚して独占を形成することを明らかにした点、ここにこそ宇野体系の破産を克服する根拠があつたのであり、そしてさらに、(ii)宇野のプラン問題における独断的な結論、「国内自己純化」国家無関係論に対決し、「世界暴力革命論」が『資本論』と『帝国主義論』をプランの国家における総括によって体系的に統一し、(普遍本質論・史的戦略基底論)、国家と

の傾向と二重写しして論証しようとしている点、(i)認識以前に認識対象の運動の内的方向性が判つたり…の三点において誤りを拡大してゐる。(鉄戦2号P67)

③ そしてこの誤りの根底には宇野科学主義の思考があることを「鉄戦2号P67-68」において明らかにしている。つまり宇野の「唯物史観はプロレタリアートの階級利害を反映したイデオロギイである。このイデオロギイが全く次元の異なる科学的分析を遊動して科学としての『資本論』を確立し、こうして始めて唯物史観が論証される」という、思想や革命魂からきり離れた逆転した思考である。我々は唯物史観が社会構成の「人類史の四契機」を通して全人類史「前史と後史」を統一的に把握し、ブルジョワ社会を特殊歴史の限界をもつた社会構成体であり同時に最後の構成体であることを洞察し、「資本論」の構成の基本領域を設定できえたのである。そしてまさに唯物史観の共産主義論に支えられたからこそ『資本論』のブルジョワ社会批判が共産主義社会論への実体的原理的関連を開示しえたことを確認する。

④ この後で考え出された純化の為の整理の方法『方法模写説』によって産業資本主義『純化』原理抽出可能、金融資本主義『不純』ではこの方法模写説による原理論はいかにして獲得されるか。

M それはヘーゲルの「上向的综合の存在論的展開は；具体的なものの自体の成立過程」であるという「ヘーゲル弁証法」への再転倒を通して未来永劫的法則として獲得されるのである。(対象の論理自体がもっている歴史的過渡性を捨て去るのである。)(「思维における対象の法則性の再生産と認識主体の思维から独立して存在する実存主体の自立過程とを区別しなければならず、それ故、マルクスの上向には下向の出発点をなした『社会』が常に、認識主体の表象にうかべられていなければならないのであつて時空性を超越した論理学のような思维の側で『自己自身を生む概念の産物』であつてはならないのである」(鉄戦2号P71)そして⑥にか

て明らかにする『資本論』の論理が不可避にもつ歴史的過渡性は
その論理自身の展開のうちにもたされる必然なのである。それ
れ故宇野の「超時空主義」は完全に非マルクス主義の産物である。
① 『資本論』における独占形成の必然性を論証する前に、宇野体
系の構成を整理してよくと、「①十九世紀中葉の産業資本主義、就
中イギリスは純化の傾向をもつていた、それ故マルクスは『資本
論』を書くことができた。②だがマルクスは『種々なる事情』
によって一定の発展段階では純化が『逆転』することを知らな
かった。それ故発展史的な面が原理的な展開の内に混入するとい
うことになった。③これを知ることができた我々(宇野学派)は
発展史的な面、独占的な関係をとり除き原理論を完成するたが
できた。④そして原理からは直接的には展開されない『種々な
る事情』によって『逆転』した不純性を本質とする帝国主義
段階論とを区別しタイプ論的に叙述すべきだということ」以上で
ある。

この①における純化の傾向がマルクスの純化「前社会的残シは
除々に払拭されつつ資本家的生産様式は発展・爛熟していくとい
うこと」とはその意味を異にする整理の爲の拡大解釈であること
そして②③④は方法論で明らかにした論理における歴史的過渡性
の問題であり、そしてその論理の歴史的過渡性は、「『種々な
る事情』によって純化を逆転させた」と宇野が思いついた外的
な不純本質とみる独占をマルクスは『資本論』の内的論理の内に
鮮明に展開しているのである。それでは『資本論』の独占開示の
問題は『資本論』の論理上向の内面より検討していく。(①の目
的とは直接的にはかけはなれた面も展開するが宇野の形態の実体
把握(『流通透視角』)を粉碎していく必要がある。) (i) 論理上向展開のその出発の端緒となる始原は、資本の運動の
最も簡単な諸規定(論理抽象された原基形態商品である(すて
に展開した方法論②、③で明らかにしてある)、この出発にお
いて宇野は共同体間の歴史的商品をとり「形態の実体把握」論

という反上向法・反弁証法をとってしまふ。(初めに交換があ
って→自己の実体をつくっていく)
(iii) 労働の生産物が相互に商品として限定しあえる原因は、つま
り生産物が商品形態という関係を社会的に確立し、自己運動を
してゐる原因は、生産物に即目的にひそむ労働が、抽象的人間
労働として相互に同等性にある一方、具体的有用労働として相
互に不平等性にあるという関連を商品の全面交換という社会関
係の下に確立しうるからである。
(iv) 商品の価値関係はA商品とB商品を同等性としてなく抽象的
人間労働の凝結量によって決するが、A商品の抽象的人間労働
の凝結量(価値)はB商品の具体的有用労働(使用価値)によ
って表現されることによるのみ表現される。つまり価値は他
商品の使用価値によって表現されることによって価値たりえ、
使用価値も価値を表現するものとして商品の使用価値となる。
かかるものとして価値と使用価値は商品の二要因として統一
されるが、この二要因の対立は矛盾を展開するものとして統一
されているのである。
(v) 二要因の対立とは他商品との商品関係についての対立であり、
その対立こそが統一物としての貨幣を求めたのである。(上向
展開は資本の生産物であるものが結ぶ価値関係として展開的に
叙述されるべきである。)

VI) では価値形態論はどのように論じられるか。形態I→形態II
形態IIIは形態IIの矛盾を止揚するものとして生み出される。普
遍的な価値も、みずから全社会的に普遍的なものとする実条件
を得ようとするればどうして個別的特殊な使用価値をもつて
制限される。しかし特殊であるからこそ交換の契機をもつ
のである。全商品にとって等価商品となりうるような「特殊な使
用価値をもつ」商品を媒介として公約性の機能をあたえる。
(全商品はこの特殊な使用価値で表現することによって一般的
普遍的なものたらんと自己主張を形態的に完成する。貨幣形態

(vii) の誕生(商品が自矛盾を解決し得た形態である)
貨幣の「価値尺度」としての機能・貨幣によって商品がその
価値を価格で表現するということとは、貨幣によって何時でも商
品と交換し得る位置にあることを示す。

(viii) それ必然的に「流通手段としての」機能をよび出す。①W
I G、②G I W、③W I G I W、で素材転換を終了した商品は
商品であることをやめて、使用価値として消費され商品流通か
ら消え去っていく。しかし貨幣はのこり、かぎりなく商品を生
通させる。

(ix) さて「流通手段」としての貨幣の数量は、商品流通の変動に
従属してゐる。ところが流通手段としての機能の内には、商品
流通の変動に対応する機能が存在しない、これを止揚するもの
として、貨幣の運動が出てくる。(貨幣としての貨幣)

(x) 貨幣蓄積→支払手段(経済機能としての必然性をもつてゐる)
一国における商品流通は支払手段をもつて完成したが、商品流
通は世界市場として完成されてゐるものであるから諸流通は
「世界貨幣」を媒介として世界資本主義を完成する。

(xi) 商品流通→貨幣の上向産物としての世界貨幣は資本の出発点
である。「貨幣としての貨幣」から資本への転化」は論理的に
展開されるべきものであり、決して宇野のごとく、資本の発生
史の理論化として解かれるべきものではない。世界貨幣から資
本を述べようとするときも歴史的な事象に頼らねばならな
くなるのである。

(xii) ところで資本の一般的範式「G—W—G」貨幣の運動は流通
過程で行われなければならないにもかかわらず、流通過程での
価値増殖は不可能であるという矛盾。(…流通過程は等価交換
である)等価されている商品流通からは剰余価値が形成され得
ないにもかかわらず、商品流通の媒介なしには価値の運動が不
可能である。

(xiii) ところで資本の流過程には商品流通以外の流通条件が「勞

働市場が必要となる。しかしまだ等価交換の支配する流通世界
である。

(xiv) 問題は購売した後の労働力商品の特殊な使用価値の消費とな
る。労働力商品の使用価値→労働であるから労働力の消費とは
新しい使用価値を生産し、抽象的人間労働が生産物に凝結する
ことである。つまり労働力商品の使用価値消費の場こそが剰余
価値形成の場である。生産過程こそ(生産手段と労働力の結
合)増殖の秘密がある。

(xv) 労働力商品の売買の形式と実体はいかなるものであろうか。
労働力商品は売買は等価交換の原則に従って行われているので
ある。にもかかわらず、この関係の中に基本的な社会階級関係
が存在する。階級関係が労働市場の根源的な事実として前提さ
れていなければならぬということであり、この「根源的な事
実」は、労働力の売買が行なわれるが故に発生したのでなく、
逆に根源的な事実(一切の労働対象となる富が資本家階級の私
領有の下にあるということ)→社会階級関係の実体)があるが故
に「労働力」は商品化するのである。

(xvi) 生産過程は本来、いつの時代も生産手段と労働力の結合によ
って行なわれるものであり、この結合が労働であり、結合の形
態が社会的な規定を受けるのである。

(xvii) 資本の運動が(貨幣と商品の二形態に姿を変えながら自己増
殖する運動が実体)生産過程をとらえるということは、生産手
段と労働力の結合を資本の統制下にかくことである。不変資本
の価値と可変資本価値との結合。

(xviii) 資本の自己増殖せんとする衝動、即ち剰余価値の生産は、何
よりもまず、必要労働時間を越えて労働日を無限に延長するこ
とから始めなければならない。(絶対的剰余価値)これは労働
日、人口の自然的な限界によって制限を受ける以前に人間の
本能的な反抗に直面する。(相対的剰余価値・特別剰余価値)
『第七篇二十一章』の「単純再生産」では「資本制の生産過

(xix) 『第七篇二十一章』の「単純再生産」では「資本制の生産過

(XX) 程は、関連において考察すれば、すなわち再生産過程としては、商品を生産するばかりでなく、資本関係そのものを、一方には資本家を、他方には賃労働者を生産し、再生産する」としてこれが第七篇の「資本主義的蓄積の一般的法則」への基本形態を示すのである。

そしてここにおいて、「資本の有機的構成」社会的総資本の構成の考察こそ、労働力の資本への隷属を明らかにし、階級の運命を浮彫りにするのである。それでは資本の蓄積と有機的構成の諸変化、資本の構成と資金はどのように展開されるのだろうか。『いま、資金の下落が無限であれば、資本は機械を導入することをやめ、絶対的剰余価値の法則にしたがって、搾取を行なうであろう。即ち有機的構成の高度化は停止し、可変資本の相対的減少は停止し、反転して可変資本の相対的増大がつづくであろう。それにともない資金の価値以下への無限の下落も停止し、再び価値に一致するほどまで上昇をつづけ、そこから更に価値をこえて、再び資本が不払い労働の獲得を困難とし、蓄積を衰えさせるまで上昇するだろう。だがしかし、今度は資本がそこまで有機的構成を高度化して可変資本の節約を計り資金を押し下げると、資本は機械の導入による有機的構成の高度化を停止して絶対的方法で剰余価値を得んとするであろう』(暴革P68) そしてこの中にこそ蓄積とそれにもなり集積と、多数小資本の小資本への集中の基本論理骨格を開示するのである。『競争戦は商品を安くすることにやがて戦われる。商品の安さは、他の事情が同じならば労働の生産性によって定まり、この生産性はまた生産規模によって定まる。したがって、より大きい資本はより小さい資本を打倒する』(『資本論』一卷第七篇二十三章)と。そしてさらに『やがて競争戦で一つの新しい恐ろしい武器になり一つの巨大な社会的機構に転化するのである』(『資本論』一卷七篇二十三章)と、『信用制度』の形成とさらに『株式会社設立』をも指摘している。

論が永久に繰り返すが如くに断定しているのである。我々はマルクスがこの平均利潤論のうちに、有機的構成の高位化に規制されもたらされるところの利潤率低落の法則をその内的矛盾の展開である利潤量「増大」で止揚せんとし、激化させ、ついに資本の集中を論理的に明らかにしていることを見ることができ、つまり均等化の論理は蓄積論を骨格にして独占に止揚されていくのである。『資本論』における独占の論理的解明を否定する者は「資本論」をも否定しなければならなくなるのである。しかし「集中」の促進は、自由競争の障害となり、自由競争の流れの中でこそその生命力を湧きあがらせることのできる資本の原動力「特別剰余価値」の法則で弱めよう。しかしこの矛盾は、諸外国の資本と世界市場で競りつとる「対外商業」によってその生命をとりもどし「世界資本主義体制」によって止揚されるのである。「対外商業」は国家を媒介としてのみ世界資本主義体制も、国家間の関係として「対外商業」を全世界の再生産機構の一環として組み入れるのである。

(XXI) 第二点の領域においては、(b)のみできたように、本質論としての論理上向展開が、階級社会の産物たる国家(国家権力)に総括されることにより(国家・世界市場・国家間貿易が資本の生産力の存命にかかわるような必然性としてその任務が及びてくる)歴史性をもった世界的空間に実存形態を獲得するのである。この歴史的段階的発現形態の本質論からのとらえかえしにより「革命」にとつてこの問題をぬきに語ることができない、まさにその「国家権力」階級関係論を体系的に獲得できたのである。

それ故 ⑥我々は「資本論」「帝国主義論」を経済学に段階化してしまい、権力論も国家も把握しえない「宇野」「国内自己純化」国家無関係論の批判から始めていく。⑦そして当然ながら、この根底には(1)の④(1)で明らかにした宇野の科学主義「経済学」の研究によって唯物史観が科学的に確定できる」の搾取を科学とするこ

(XXI) 次に展開するのは『資本論』一卷においてみた蓄積が第一部門、生産手段部門においてその優位性で恒常的にゆずれなければならぬこと、論理的な解明を二巻「社会的総資本の再生産」と流通」において明らかにすることを要する。

(1) 生産手段の生産・ $4000C + 1000V + 1000m \parallel 6000$
(2) 消費手段の生産・ $2000C + 500V + 500m \parallel 3000$
(3) 消費手段、 $1w \parallel 1c + 1l, 1v + 1m + 1l + 1m \parallel 1w$

資本Iのうちの価値額 $V+m$ は部門IIの総商品生産物中の不変資本 $1c$ に等しいことになる。 $(1-v+m) \parallel 1c$ 、それ故 $1-c+v \parallel 1c+v$ となり、この背後に $\Delta C \Delta V$ (可変資本部分に比べての不変資本部分の増分の法則)が買ぬき、部門Iにおける「生産資本の大規模化」と「価値構成の高度化」とが果進的に実現すること、そしてそれが相互の自由移動を否定的なものとしていくこと、つまり「利潤率均等化論」の阻止要因を確定しているのである。宇野の「重工業、特に鉄工業の十九世紀後半における発展は、その経営に要する資本で異常に増加することになった。それは鉄道の普及による鉄の需要増加に伴って…」(宇野「政策論P133」という形態の実体把握という視角は、「それは単に資本主義の発展に伴う集積の増大とはいえない」(同P134)と我々が『資本論』にそって展開してきた内的論理からの解明つまり、重工業における独占の開示を否定するものである。

(XXI) マルクスの「均等化は結果であり決して出発点ではありえない」というところの「諸利潤の一般的利潤への均等化」(平均利潤論)を宇野は「社会的需要をみたすためには、資本構成の高い産業の生産物の価格は、その価値より高く、構成の低い産業の生産物の価格は価値より低いということにならざるをえない」(『資本論の経済学P34)とし資本主義に特有な方式、平均利潤

ろの階級に対する根本的を誤りが宇野の頭脳をうめつくしているのである。

(i) 「資本家の商品経済は、商品形態をもって完全に客体的な、間接的な関係に純化されてきたのである。資本家の商品経済は、経済原則を客観的な経済原則として、同時に他のいわゆる上部構造を分離して実現するところから、その歴史的意義を有している」(『経済学方法P11)とし「『資本論』の上向の過程は『諸階級』で終結せざるをえないのである」(同P43)と独断的に結論を下すのである。

(ii) 「『国際的關係』は奴論のこと、『ブルジョワ社会の国家形態』の総括にしても、形式的には兎も角、実質的には純粹の状態としてありえない」資本主義がその経済的過程を「国家形態」からも「国際的關係」からも独立して展開する機構をもっている」(方法論P44)と、この純化概念を基軸とする(ii)の誤った思考が前半プランと後半プランの次元移行の論理を科学の眼はとらえることができぬのである。資本が国家権力の下に総括され、民族国家にその生産基軸をおき、個別資本間の自由競争を国家権力の階級支配で保障するところの国家と階級の本質的把握を全く欠落してしまっているのである。

(iii) このような国内自己純化「国家無関係論」の中で「階級」に對する把握はいかになされているのであろうか。

(i) 「表面的には階級性のない商品交換関係のもとに種々なる生活資料が生産され、奴隷主や領主が明らかに階級の支配のもとに取りあげた、いわゆる剰余労働生産物、…を商品形態の自由と平等との非階級形式のもとに取りあげた」(『資本論の経済学P11)そしてさらに「労働力商品化は資本主義社会の経済過程を自立的過程たらしめるものである。それは政治的、宗教的等々の上部構造から完全に分離した「土台」を形成し…」(方法P110) (労働力商品化は宇野の云うように生産手段から分離したから商品化するのではなく、(1)の④で明らかにした根源的事実があるから商品化

(一) 我々と宇野体系

(我々)

(宇野)

世界的には、一八一二年におけるナポレオンのモスクワ敗北後、世界金融市場はアムステルダムからロンドンに中心が移り、イギリスを基軸とする単一市場が形成された。単一市場は八永遠のものではなく、既に産業資本「機械制大工業を生産基軸とする大工業民族国家が、仏・独・米そして露と多元化しつつあった。

十七世紀の中葉、商人資本から産業資本主義へ純化をめざして自己運動を続けている。

産業資本は自己完結的な論理をもっていた。産業資本主義が体内に秘めた法則性を、認識主体に反映させたのが「資本論」である。「資本論」を原理論としてとらえ、永久にくり返すかのごとく「原理論」を説く。(経済原論)

(宇野)

一八七三年に始まるイギリス大不況を前後して、イギリス中心の扇状の単一市場が多元的な国家間の多角状の統一市場へと再編される過程に照心していた。ところが、帝国主義(独占)の国家に総括されて貫徹しつつ、世界市場を拡大あるいは防衛しつつ国内産業の発展を上げていく。ところが、帝国主義(独占)の資本主義は産業資本主義のように「純化」をめざして自己運動しなかつた。資本はすべての社会的生産部門を包摂することを止め、「経済的要因」の導入によって延命をはかりはじめた。(不純の時代)

産業資本主義は幾多の戦争を、移行政の論理とは、産業資本主義から、帝国主義への橋渡しを

するのである)つまり労働力商品化による上部構造からの完全な分離、そして表面的には階級関係のない自由、平等な商品交換関係の積極的な主張は、④資本の無政府性とブルジョワ独裁支配と

しての国家形態との関連、⑤資本家間の競争と各資本の生産過程における専制的労働者を支配との関連、⑥形式の商品売買の下に強制されている労働者に対する資本家階級の「社会的支配の確立」が完全に忘却されてしまっているのである。

(ii) 労働力商品化による階級支配(政治権力上部構造からの完全な分離)ではなく明確に資本家は労働者を社会的に従属させ、ブルジョワ独裁としての暴力支配とイデオロギー支配を国家権力に集約し、プロレタリアートの絶対的従属関係を完成し、市民社会の秩序として確立するのである。かかる中において個別資本生産点での支配と、個別資本間の自由競争が保障されるのである。以上労働力商品化による階級支配の思考が④の領域にまで及んでいることがわかる。

⑥ 最後に我々は(ii)における階級から国家への論理の「次元移行」の問題について確認しなければならぬ。

本質論の上向展開が階級から階級独裁国家権力によって民族国家に総括されることを媒介として、今までの一者として抽象されていた本質論が国家に総括されるや、国家間の関係として、世界市場に世界的再生産機構を確立するからである。つまり本質としての資本が歴史性をもった世界の空間に実存形態を獲得したのである。そしてこれらは本質論領域の一者としての上向論理に支えられるべきものなのである。プラン前半と後半の体系的統一が国家の総括を軸にしてこそ可能なのである。

(ii) 領域における「資本論」の論理上向展開のうちに明らかにされる「独占の開示」と宇野が拒否し欠落させたプラン問題における「国家の総括」は宇野体系(黒田体系)のその破産を根底的に止揚し、かつ粉碎しつつするのである。

つまり帝国主義は、一貫した法則性を原理として確立しえない「価値論のない経済学」となる。(経済政策論)

帝国主義の発生をイギリス(株式)帝国主義ドイツ(独占)帝国主義の二つのタイプ論として把える。

産業資本主義と帝国主義時代を貫く「普遍本質論」とその変容発現形態たる「史的戦略基底論」として「資本論」「帝国主義論」を統一して把握する。

「現状分析」として行った。独占は国家権力を従属させて「国家独占資本主義」となった。大内力「国独占」

(i) 独占形成の論理

「資本論」と「帝国主義論」

「資本論」一巻―三巻の中で展開されている「独占」発生の検証は、

一巻 「資本の生産過程」

二巻 「資本の流通過程」

三巻 「資本主義的生産の総過程」

を貫いた一本の論理としてある。

「巻七篇「資本蓄積過程」で展開した蓄積集積集集中の論理蓄積とは

「社会的生産過程は……同時に再生産過程である」(DK59)
「資本制の生産過程は、関連において考察すれば、すなわち

再生産過程としては商品を生産するばかりでなく、剰余価値を生産するばかりではなく、資本関係そのものを……一方に資本家を、他方には賃労働者を生産し、再生産するのである」(607)

「剰余価値の資本への再転化は資本の蓄積とよばれる」(608)

「直接に蓄積にもとづく、またはむしろ蓄積と同一分たる、この種の集積」(659)

「集積とは

「蓄積は、一方では生産手段の、および労働に対する指揮の・漸増的集積としてあらわれれば、他方では多数の個別的資本の相互反撥としてあらわれる」(659)「それは、すでに形成されている諸資本の集積であり、それらの資本の個別的自立性の止揚であり、資本家による資本家の収奪であり、少数の大資本への多数の小資本の転化である」(同)「ひとりの人の手にある資本が大きな分量に膨脹するのは、他方において多数の人々の手にある資本が失われるからである。これは、蓄積および集積と区別される本来の集積である」(同)「資本制の生産および蓄積が発展すると同じ度合で、集中の最も有力な2つのテコたる競争と信用が発展する」(660)

「可変資本にくらべての不変資本部分の漸増の法則」とは

「資本主義制度の一般的基礎がひとたび与えられておれば、蓄積の経過中には必ず、社会的労働の生産性の発展が蓄積の最有力なテコとなる点が生ずる」(654)「生産手段に合体される労働力とくらべた生産手段の量的大きさの増加は、労働の生産性の増加を表現する」(655)「資本の技術的構成に於けるこの変化、すなわち、生産手段を生気づける労働力の分量にくらべての生産手段の分量の増加は、資本の価値構成に、すなわち資本価値のうちに可変的成分をギセイとする不変的成分の増加に反映する」(656)

△ √ △

二卷三篇「再生産表式」の展開
「再生産表式」と「可変資本に於ての不変資本の連(漸)増の法則」から、生産部門Ⅱ第一部門のCⅡ不変資本が増大していくことの論証

(i) $4000C + 1000V + 1000m = 6000$
(ii) $2000C + 500V + 500m = 3000$

単純再生産表式から
(I部門のC+V) √ (II部門のC+V)

(iii) 「通増の法則」△√△Vを加味し
(iv) I部門のCがII部門のCに比して累進的に高位化することを証明

三卷二篇
利潤率の傾向的低落の法則での展開、更なる蓄積衝動→集積→集中促進→不変資本増大、資本の利潤率均等化への不参加の論理
三卷五篇
独占形成

ノーマン「帝国主義論」

一章 生産の集積と独占

二章 銀行とその新しい役割

三章 金融資本と金融寡頭制

四章 資本の輸出

五章 資本家団体での世界分割

六章 列強のあいだでの世界分割
「帝国主義論」は一章で、集中→集積→独占を説いて、四章から六章の過程で「生産の国際的關係」「世界市場」を価値・資本の本質運動である「資本輸出」から展開させ、列強間の世界分割と対立の必然性を把えてくる。

「半世紀まえにマルクスが『資本論』を書いた時には、自由競争

は、経済学者の圧倒的多数にとっては「自然法則」のように思われた。マルクスは資本主義の理論的および歴史的分析によって、自由競争が生産の集積をうみ出し、その集積はその発展の一定段階では独占をもたらし、これを論証したが、公認科学はこのマルクスの著書を黙殺しようとした。だが、いまや独占は事実となった」(帝国主義論・国民版P二六)

「この自由競争は大規模生産をつくり出し……生産と資本の集積を、そのなから独占体がすでに発生し、また現に発生しつつあるという程にまでみちびき、こうしていまや我々の目のまえで、みずから独占に転化しはじめたのである。しかも、これと同時に、独占は自由競争のうちから発生し」(同・P一二六)

かくして独占形成を境として国家による総括は動的な性格転換を誘発され、国家に総括されて現実性をかくとくする資本の有機的な世界的空間とその歴史的顕在性は歴史的段階を画すことになる。すなわち、産業資本段階の世界市場と国家権力から帝国主義段階の世界市場と国家権力へと歴史的段階を本質論に照応して移行する。

第III部

黒田体系の根底的解体

さらぎ徳二

序 黒田理論体系は如何に解体すべきか

第一章 「行為的現在における場所的立場」批判

第二章 西田哲学を批判する党の実践的根拠とは何か

第三章 黒田三段論批判

序 黒田理論体系は如何に解体すべきか

第一章 「行為的現在における場所的立場」 批判

第二章 西田哲学を批判する党の実践的根拠 とは何か

第三章 黒田三段階論批判

序 黒田理論体系は如何に解体すべきか

黒田寛一の理論体系は次の三領域において解体しなければならぬ。

第一は、黒寛の全理論体系の立脚点をなしている「行為的現在における場所的立場」という哲学的立場が果してマルクス・レーニン主義の唯物弁証法であるか否かを、哲学的に根拠から問い、かつその誤りを批判しつくすことである。

黒田寛一が提起してきた諸著と諸理論を一冊ずつ部分的に取りあげ、これを併列的にあれこれと批判しても、体系の枝葉を切り取るだけで、体系の根幹を掘り返し斬り倒すことは出来ない。

黒寛体系の理論的解体は、その理論が成立するところの原点を突くことなくしてあり得ない。そしてその原点が哲学的方法論に立脚している以上、黒田哲学体系の原点であり、かつ理論的党派性の重心である「行為的現在における場所的立場」に哲学的批判の的を焦らなければならぬのである。

第二は、黒寛哲学の原点をなす「行為的現在における場所的立場」が①果して共産主義世界党の質を根拠から指定しえたか否か②果して変革対象世界把握の方法を正しく導き出し戦略確定の体系を確立しえたか否かを検証し、その誤りを批判することである。

即ち、黒田哲学は、行為的現在における場所的立場から、唯物史観をいかに「行為的現在」に引きつけ、共産主義の論理的任務に歴史的任務を凝固結実し得るような党の質を指定したかを検討することである。そしてそのことは黒田体系が唯物史観の弁証法と資本論・帝国主義論の弁証法を、党の綱領戦略論へいかに結実し得たかを問うことでもある。

党の指定において誤りに導くような「場所的立場」はまた、当然、変革し獲得すべき対象世界の把握においても誤りをおかさざるを得

ないが故に、対象把握へ「行為的現在における場所的立場」がいかなる思惟と直観の非連続において適用されるかを検証する。

つまり、「行為的現在における場所的立場」という哲学的立場を、対象把握の結果である方法の体系において検討し、黒田哲学を対象把握という物質的に動く犯罪現場において現場検証することである。主要な任務は、黒寛の「宇野三段階方法論批判」を批判対象とし、対象把握における体系化の失敗を、非連続の連続と異ってとりつくり破産の本質を突き、同時に、国家をプラン体系から宇野と共に切り捨てるがために、戦略確定の基礎となるべき体系に国家の位置が与えられず、したがって、黒寛体系から権力論が完全に抜け落ちることを批判しつくすこととなる。

行為的現在における場所的立場という哲学が真に唯物弁証法であるか否かは、その哲学が変革対象世界に対決して思惟作用を開始してゆく過程において検証することが一番確実だからである。

第三は、「場所的立場」に対する哲学的批判および「場所的立場」の対象世界把握における方法的批判について、黒寛の哲学と対象把握の結果が導く、党の思惟的歴史的实践的位置の指定、および運動組織論・組織戦術論の内的構造を捉え批判することである。

本号（鉄戦版）では第一と第二の課題に答え、第三の課題は次号で説明されるであろう。

第一章

「行為的現在における場所的立場」批判

黒田の場所的立場は、共産主義と党指定の根拠を導くことが出来ず、共産主義の歴史的任務と論理的任務とを党において統一する立場を獲得出来ない。

(一)

黒田寛一の哲学体系を構成する原点は「場所的論理」である。

そして、対象を把握する認識主体党と、即自的プロレタリアートがマルクス主義理論の形成過程を歴史的に反省して向自的プロレタリアートへ自覚する場としての自覚を、主体的に確立する立場が「行為的現在における場所的立場」である。

黒田寛一が「ヘーゲルとマルクス」以来、唯一自己の哲学的立場とし、一切の批判の原点をなしたのは、「行為的現在における場所的立場」であった。

したがって我々は、黒田体系の理論的重心、行為的現在における場所的立場が、哲学的原点であり、認識論型の自覚党形成論の核心であり、対象を把握する認識主体党の方法的立脚点をなすものと考え、これを批判する。

第一章での批判の重点は、行為的現在における場所的立場では、「存在と当為を共産主義において統一し、共産主義の歴史的任務と論理的任務を党において統一する立場」が獲得出来ない根底的誤りを批判することを目的としている。

即ち、黒田哲学によっては、共産主義を人類の普遍的任務として

の当為として、人間存在に社会存在の把握を統一的に獲得出来ないことを批判の軸に捉えなければならぬ。

したがって黒田哲学による党は、人間存在と社会存在の史的矛盾の必然を止揚する党として、即ち党が労働階級斗争↓世界党を通して社会存在の矛盾を共産主義運動という歴史的任務へ凝結する論理的根拠が与えられないということである。

共産主義運動というものが、人類史的普遍的当為であるという根拠が、宇宙的自然から自己を区別した人間の社会存在の史的矛盾の必然との関連において統一的に把握出来ない。故に、黒田の党はたかだか即自的プロレタリアートが、感性的直観(当為的直観)に誘発されて、マルクスが共産主義理論を形成してきた過程を文献解釈学的に反省して向自的プロレタリアートに転化する自覚の場になり下る、自己限定的党に固定化されるのである。

黒田の哲学では、行為的現在に立とうとする主体が、いかにして共産主義者としての党主体とならざるを得ないのか、という根本的な行為的主体の措定の問題を原理的に獲得出来ないのみか、共産主義の運動が人類史的普遍的当為として党に結実され、共産主義運動を人類前史(階級社会)の社会存在の矛盾を止揚するためには、共産主義は何よりも世界共産主義でなければならず、世界共産主義運動として社会存在を止揚する党主体が何よりも世界党形成過程としてあり、世界党のための斗争、世界党建設のための国際国内党派斗争を人類史に果している深い意味が理解出来ないのである。

共産主義の本質を世界共産主義党のための闘いとして定立する人類前史の共産主義党は、世界党建設斗争として、また全世界を獲得する斗争として自己を統一せんとする時、そこに、歴史的任務を論理的任務に凝結する党とならざるを得ないのである。直接現在に於て変革すべき対象世界・獲得すべき全世界の社会存在の矛盾を、即ち資本制生産社会の社会存在としての矛盾を、体系的に論理的に把握し、私的所有の発生以来確立し国家に総括されてきた階級社会が完成された私有財産社会としての資本制生産社会となり、完成され

た国家に総括されて資本の世界性を資本制生産社会として確立していることを把握する任務が果せられるのだ。

我々が、歴史的任務を論理的任務に凝結させるということは、直接変革すべき対象の社会存在を、その下部構造から世界性として把握し、資本を総括して資本の実存条件を世界的空間に有機的に構成している完成された国家の性格を、ブルジョア国家権力として把握し、階級斗争の方向を世界革命戦略へ結実させることである。

そして、この共産主義の論理的任務と歴史的任務は、党の「綱領・戦略」として統一され、「党風と軍紀」において体现されるのである。党斗争とは、世界共産主義獲得をめぐる過程における、世界党建設斗争であり、世界共産主義獲得をめぐる過程における歴史的任務と論理的任務の闘いである。

黒田哲学の党形成論・認識論型自覚党形成論からは、かゝる歴史的任務と論理的任務を統一する党は指定出来ず、自覚する向自的プロレタリアート自覚集団の自己拡張のための手練手管でしかない組織戦術の対象として国際国内党派斗争が位置づけられてしまうのである。

次に「場所的立場」と論理的任務について基本的な問題にふれておこう。

行為的現在にある「行為主体」の歴史的論理的根拠が、共産主義として指定出来ないということは、ザインとゾルレンとを共産主義だけが統一しうるものであることを、場所的立場では把握出来ないということである。

プロレタリアートの即自から向自への自覚という契機だけしか導き出せず、マルクスの文献を学習して頭の主体性を確立して自覚を深めようというような「場所」に、いくら行為者である主体の座標を求め、感性的直観という靈感に依拠して論理的任務を獲得しようとしても、所詮は無理である。論理的任務は「場所」では貫徹出来ない。

も組み入れるのである。これが無の自己限定としての真の場所である。

「過程」の結節点に「場所」を捉えるのではない。

「場所」の無に現在があり現在の無に「過程」がたゞみ込まれる。これが「過程的弁証法」を否定する「場所的弁証法」を対置する西田の基本的立場なのだ。西田は次の如く述べる。

「果なき過去と未来とは此の現在の自己の投げたる陰影に過ぎない。」

「現在というのは一定の方向を有った線の一点でない、無限なる方向の中の選ばれた方向の一点でなければならぬ」

「真の現在とは、かゝる創造の中心点である。現在に於て種々なる『時』の世界が創造せられ……創造的自己の立場から見れば、すべてが自己に対して現前して居る」

「此意味に於てアウグスチヌスの云った如く、過去、現在、未来の三つの時があるのではなく、唯現在あるのみである。過去の現在の現在、未来の現在というものがあるとい得る」(内部知覚について)

以上の如く過程から切断された「現在」に直観から無へ直行する「場所」がある。歴史的必然が拒否された所に場所的現在がある。場所的弁証法は、こうして「場所的現在」において主客の関連を於てある「場所」へ絶対無の弁証法で導く。

西田哲学の「場所」は、一方では思惟の側に意識をおき、対象が映されて移行行く意識現象(作用)の背後に、これを映すところの意識の野をおく。そして他方では認識作用を超越する対象を認めつつ、対象と対象相互の関連が体系をなし、その背後にこめまた対象の体系が存立する場所、対象の背後の鏡をおく。この対象の背後にある鏡としての場所と、意識作用の動きを背後から映す意識の野としての場所とが、行為的直観の立場で結合する時、意識の野は真に自己を空りすることによって対象を於てある場所と合一し、対象をありのままに写す。これが無の自己限定である。

自覚する者の自己変革のために対象把握があり、自覚のために斗争の場所があり、自覚集団の組織拡大のために斗争と党派斗争があるというような主体還元主義的「場所的立場」では、歴史的任務の立場から対象の法則性を把握し対象変革の方向を戦略へ、権力論として煮詰めてゆくという論理的任務は獲得出来ない。場所において自覚するという主意主義は出立点を求める以上、場所的弁証法による対象把握そのものも、主意主義に陥るのである。この点に関しては第三章で展開するが、こゝで基本点に限ってふれておくならば、直接変革対象世界である資本制生産社会の把握においてさえ、「認識主体のかわの問題意識にもとづく認識下向の方向性と限度のちがいがい」によって分析は「対象の法則性の抽象レベル」を変えろという立場をとっていることである。

即ち「要するに認識対象と認識主体の両者の場所的構造そのものの非連続性」を認める立場に立つのである。だから資本制生産社会の論理の本質と歴史的顕在段階との体系的把握が出来なくなると、認識主体の側の問題意識によって、対象の法則性を分断して把握する結果となるのだ。

(二)

こゝで場所的弁証法に対する哲学上の批判点を要約しておこう。まず黒田の場所的立場の秘密が西田幾太郎の「場所的弁証法」にあることを知っておこう。西田はマルクスもヘーゲルも共に「過程的弁証法」であると批判し、「場所」において直観から無へ直行する「場所的弁証法」を主張した。

歴史的な弁証法と論理的向上の中に弁証法を見るのではなくて、「現在」の「無の場所」において弁証法を見る立場である。

即ち過去は現在における過去、未来は現在における未来、現在は現在における現在、という「現在」が設定される。現在とは過程的な内部に組み入れられるのではなく、現在の論理、無に過去も未来

要するに対象の場所と主体の場所とは、論理的分析ではどこまでいっても合一出来ないが、人間の直観によってはじめて合一出来るというのである。

直観を媒介して場所は真の場所となる。直観によって映すものは、論理的な分析で映す対象の表象や法則性ではなく、むしろ対象の背後の鏡、対象の於てある場所であるという論法なのだ。対象の於てある場所は、意識も於てある場所でないならならぬというところが、場所の論理のミソである。

この二つの対立的な場所が、直観によって始めて、真の場所、無になることよって一つになるといふ西田の論理構造が、西田の無の弁証法なのである。絶対矛盾の自己同一である。

いかにも神秘的なこの二つの場所の一つの場所への、つまり無への統一は、西田によれば対象をもっとよくありのまゝ映すことであり、それはひいては自己の中に自己を見ることなのだ。自己の中に自己を見る真の無の場所が真に対象をありのまゝに映すことと同であるという論理は、対象の場所と意識の場所が実は同一の場所であるのだ、という論理的前提に立たない限り成り立たない。

この論理を論理として論証することは困難である。当然の帰結として「直観」に依らざるを得なくなるのである。

では「直観」がなぜ対象の場所と意識の場所を同一のものであると立証する力があるのだろうか、という根本的な問に対して西田は答えられず、最後まで解決出来なかった。

これが西田の突き当たった「場所」の論理の壁であった。西田哲学の『場所の現在』には社会存在を階級社会の矛盾で捉える視座がない。

固定抽象的に、存在（客体）と思维（主体）の対立を、「場所」という観念の仮説の場で統一しようとしても、統一の環に神秘的直観を持ち込まなければならなくなって、結局は失敗する。

思维と存在は、唯物論の立場に立つかぎり対立し媒介する。観念論に立脚して、思维主体を「精神行為主体」として措定するかぎり、

思维主体を自然的存在と精神的存在の労働による統一としての社会存在・人間存在として措定出来ない限り、社会的実践的行為に統一する方向を獲得出来ない。

くりかえし言うが、思维（認識主体）の存在（認識対象）に対する頭脳領域における把握は、感性的表象の抽象的思维への深化と社会存在への実践を経て深まり発展するのである。

「客観的実践の認識の弁証法的行路」（レーニン）とはかくの如きものである。

まず思维主体である人間が自然的存在と精神的存在との労働による統一であるところの社会存在である。だから社会存在である人間は、始めから社会存在であるために宇宙的・自然物質に労働行為者として能動的である。労働行為者であることよって社会存在である人間労働の能動性は、精神労働と肉体労働の統一である。故に、対象に対する認識を目的をもって開始し、かつ労働の諸結果を反省して次の労働行為を社会的実践として繰り返すための認識する力を強めるのである。記憶と推理と判断は、社会的実践を媒介としてのみ認識の力として蓄積され強化される。

記憶と判断と推理が結合する認識の能動性が意識の能動性であるから、人間の認識は一回事象の単純な鏡的反映に終わらない。

この蓄積が、すなわち、始めから行為者でありつづける社会存在としての人間が、社会的実践行為を媒介にして、記憶の蓄積力と、総括にもとづく対象把握の推論力の精練、および行為的方向確定の判断力との総合的蓄積が、レーニンの生きた直観をも呼び出すのである。

しかし、行為の目的と認識の能動性とがたゞちに、人間個人の、または人間の普遍的當為を導出しはしない。

人間の認識は、労働という行為の目的としての當為が、私的所有と分業の発生に規制されて階級社会を構成する時、盲目的當為として階級斗争をくりかえさざるを得ない。

人間の能動的認識力は階級斗争のくりかえしを通して、生産力の

発展を下部構造的基底とする社会存在を把握しはじめる。

人間の労働の諸成果は支配階級によって占有された精神労働としての「技術」に集約されている。また社会存在の矛盾の反映である精神労働の集約も支配階級の支配秩序にみあったイデオロギーとなつてくる。

だから、階級斗争によって発展してきた被支配階級の「闘い」という行為と目的および判断と推理力は、あらたな生産力と古い生産諸関係の矛盾を反映してイデオロギー斗争を発生させる。

ギリシャ哲学をキリスト教神学が否定の継承として体系化し、実念論と唯名論の大論争が中世の末期をづけた。自然科学の発展と生産力のブルジョア的発展が、一方ではイギリスとフランスに端緒的唯物論を生み出し、ドイツに生み出した。

フランスで、デイドローやドルバックを頭に一群の戦闘的だが未熟な唯物論者が封建的イデオロギーと闘っている間に、ドイツでは別個な哲学が発生していた。カントに始まり、フイヒテからシェリングを経てヘーゲルに至るドイツ古典哲学であった。

ドイツ古典哲学はフランス革命のドイツへの反映であり、基本的には封建制度と妥協せざるを得なくなった無力な独ブルジョアジーの意識を反映する枠に止っていた。

「フランスが歴史を創造している間に、ドイツ人は歴史の理論を考えた」

ブルジョアジーに対するプロレタリアートの階級斗争が展開され始めるや、イデオロギー斗争は、ドイツ古典哲学との斗争、イギリス国民経済学との斗争、フランス政治学との斗争として展開された。

「ヘーゲル法哲学批判」「経哲草稿」「ドイデ」「空想的社会主義か科学社会主義か」「共産党宣言」へとマルエンによって結実される人間の普遍的歴史の當為である共産主義は、ブルジョアイデオロギーとの闘いと同時に、階級斗争を闘う者達が生みだした諸々の誤ったイデオロギーとの闘いを通して確立されている。

人類の普遍的當為は、労働という本源的行為から階級斗争を、

「認識Ⅱ行為」者である人間が通過して始めて獲得しえたのである。場所から出発して自覚に帰る思考循環では、思维（認識主体）と存在（認識対象）との関連を通して當為（共産主義）と存在（資本制生産社会）を党の闘いで止場統一する思想が獲得出来ないのである。

だから、①思维する主体と②思维される客体とを、③人間存在Ⅱ行為主体としての社会存在としての認識者Ⅱの立場において統一しないかぎり、④思维と存在との関連を固定抽象的な「場所」に押し込めても統一出来ないし⑤「場所」においては永遠に人類の普遍的當為を歴史的行為の中において把みとすることは不可能なのである。さて後節に検討するが梯も、西田の「純粹経験」と「行為的直観」を、レーニンの「生きた直観」に改作せんとしているが、やはり、「場所」という固定抽象的仮説の立場の中からは、レーニンの「生きた直観」は出て来ないのである。

現在とは、過去の階級斗争の結果であり、人類が労働↓階級斗争を通して共産主義をかくとくし、未来の世界共産主義建設斗争のため世界党を生み出す苦闘の過程として現在である。

だから「場の現在」に始まり「自覚」に終る立場では、精神行為主体がさまざま固定抽象的場所から踏み出せない。生きた権力と闘う世界共産主義、「綱領戦略」と党を結実させることなど思いもよらないのである。

(三)

この西田的「場所」の論理に立脚しつつ、場所的現在に立つ主体を、西田の精神行為主体から物質の主体性に転倒し「場所」を唯物論に改作しようとしたのが梯明秀である。

梯は西田哲学の場所的現在に立ちつつ、これを唯物論に転倒させ、同時に、この「場所的現在」の弁証法に「過程的弁証法」を組み込もうと苦闘する。

「場所的弁証法」に「過程的弁証法」を組み込むこと、即ち過程から切断された「場所的現在」に過去の歴史の意識を凝縮した「共通の意識の広場」があることを認め、この広場において、即自的プロレタリアートが「実践的直観」に触発されて、向自的プロレタリアートに「自覚」する。

これが梯の「場所」の論理である。梯は言う

「戦前、わたしの一途に非妥協的であった社会科学の研究も、西田哲学のこの行為の直観の立場に、無自覚ながら包まれていたと振り返りかえてみるのである」(「資本論への私の歩み」P24)

「西田博士自身は、日本の政治経済の分析のなから思弁を築きあげた人ではないにしても、しかし到達した成果においては、マルクス、レーニンに一致する面もありません。……西田博士も、レーニンも、同一の真理に到達する。」(同P98)

「必然性の自由への転化」というこの弁証法は、過程的な実体の悟性的諸規定を否定する理性の主体的な場所においてのみ可能なことで、これは感性的実在のうちに理念を、当為を、直観することである。……思惟を媒介せずして、感性的に当為が直観できている、……これを実践的直観の立場と呼んでいる」(同P26)

以上に見る如く、梯哲学の「下敷は西田哲学である。西田の「純粹経験」「行為的直観の立場」「物理現象の背後にあるもの」「場所」を物質の自己限定によって唯物論的に転倒する作業から梯哲学は始まる。

梯は、人間の認識と意識から主体的自覚への発展の根拠を、物質の主体性に求めた。だから、一切を宇宙の自然の考える主体性において統一しようとした。即ち、考える地球が主体性をもつが故に物質の最高の産物たる人間頭脳を突き動かし、人間認識を誘発して人間頭脳内部の観念領域における意志への主体性を基礎づけていくと説明した。『宇宙』地球の主体性『対象』と『人間の主体性』主体とを結びものとして感性的直観『当為的直観を用いた。地球の心を

人間の直観が受けとめ、物質の主体性が人間頭脳の主体性を突き動かすという構造である。そこに場所があるのだ。

実践的直観『当為的直観』という概念も、西田の「純粹経験」「行為的直観の立場」「直観と意志」「自覚」を継承するものである。そして、ヘーゲルの論理学における「有論」「本質論」「概念論」に梯の「物質の哲学的概念を導入して『天体史』『生物史』『社会史』という発展段階を想定する。

ヘーゲルの絶対知が「論理学」の始原に立って有論↓本質論↓概念論へと自己展開し、遂に理念、絶対理念に到達したように、物質も宇宙史の自己展開として天体史から生物史へ、そして遂に社会史を生み出したとするのである。

「物質の主体性」をヘーゲルの展開し、「物質は、人間存在によって自覚的に自由な主体となった」(「資本論への私の歩み」という。

これが梯の「場所的現在」に立つ、行為主体である。即自的プロレタリアートは、物質の自覚者であることを第一とし、先に述べた「意識の共通の広場」を第二の媒介として、直観するという理論構造をつくりあげている。

ヘーゲルの「内なる理念」を、「宇宙史の根源的物質」におきかえ、天体―生物―社会の各に意識を認め、『物活論』的に物の自覚を人間の自覚に求める。

「自然は、自己の所産たる人間を媒介にして自己の本質を自覚し、その宇宙の内容を地上に実現してゆく」(「資本論への私の歩み」)

これが梯の『実践的直観』を論証する論拠である。

西田哲学の「場所的弁証法」に立脚して、「場所」を弁証法的に自覚へと展開せんとした場合、まず、場所の現在に立つ行為主体を定立せざるを得なくなり、この解決をヘーゲルの過程的弁証法の導きによって計ったのである。

ヘーゲルのレーニンの転倒と梯がもっともらしく言うところのものは、実は『物活論』的転倒にすぎないのである。

場所的現在における行為主体を、物質の自己自覚とすることは物質の自己限定にほかならぬ。西田の「無」の自己限定が、「物質」の自己限定となるのである。

「わたくしは、天体史、生物史、社会史を全自然史的過程の三発展段階とみて、これをもって物質の自己運動の具体的形態だとしたこれが、わたくしの旧著『物質の哲学的概念』における主張内容であった。」

梯明秀はこの主張内容を『資本論の弁証法的根拠』でいよいよ打ち固める。物質が思惟する、という主張を打ち固める。

「唯物論で、存在が意識を決定するといわれるのは、もともと意識そのものが存在から生れたものと見るからなのである」という。

この場合に梯が自然的物質を、社会存在的物質に直結させ、アリストテレスの質料から形相へ、潜在的形相から顕在的形相へ、という論理で統一しようとするところに特徴がある。ヘーゲル主義の裏がえしの特徴が……自然と社会の対立無き直接性が。

梯によると「概念とは物質のかゝる自覚のことであり、概念の運動とは物質の自覚過程のことである」そして「自覚過程にある物質そのものを物質概念あるいは主体的物質とよぶ」のである。

- ① から次のような命題が導き出されてくる。
- ① 思惟は物質の属性である。
- ② 主体的物質の規定に、その潜在的形相としての可能的思惟がある。
- ③ 思惟は主体的物質の普遍性の契機である。
- ④ 思惟可能性は、物質と思惟との直接的な同一性であり、いまだ物質の自覚にいたらざるかぎり直観である。

以上が梯唯物論の核心である。即ち、人間の思惟とは天体―生物―社会と連なる主体的物質の属性である。物質の主体性が潜在的形相として存在するために、人間の頭脳を通した可能になるのである。潜在的形相としての可能的思

惟が物質にあって、これが主的物質であるからこそ、人間の頭脳は思惟を属性とすることが出来るのである。だから、思惟は主体的物質の普遍性の契機といふことが出来る。主体的物質に秘められた潜在的形相としての思惟可能性が、物質と思惟を同一性とすると、思惟から、可能性が、つまり潜在的形相が顕在的形相となって、思惟から自覚されるまでは、思惟可能性は直観となってあらわれるところである。

即ち、直観は思惟可能性としての潜在的形相の顕在への、自覚への契機として位置づけられている。

デイドローがダラムベールの質問に答えて「石も思惟する」と断言した話は哲学史を学んだ者なら誰れでも知っているだろう。

あらゆる形態の物質に意志を認めるのが、「物活論」であり、「普遍的生氣説」である。

梯は、物活論的思考を根拠において、ヘーゲル論理学を転倒しようとしたのである。ヘーゲルの物質をつくる「概念の自己展開」に物活論的物質を捉えかえて「主体的物質の自己展開」構造を考えだしたのである。

勿論これは、「普遍的生氣説」よりも高級である。ヘーゲル論理学体系の裏返しとして裏打ちされているからである。

しかも、アリストテレスの「質料と形相」がたぐみに組み込まれ、思惟可能性という概念が物質に「普遍的生氣説」的に持ち込まれているからだ。こうして、西田哲学の「直観」に物質的論証の基礎を与えようとしているのである。

梯の唯物論から見ると、レーニンの物質概念も不合格なものとなる。

「意識がこの身体性を原理とするかぎりには、物質の自己運動も単に客体的過程としてしか把握されず、したがってレーニンの物質の概念も、客観主義的に単に外在的な独立性をしかいみせざるをえない」と。

梯の「物活論」的なヘーゲル「概念」の物質化は、実は、唯物論

の仮面をつけた観念論へと埋没せざるをえなくなる。

「わたくしが主体的物質の概念のさらに具体的規定を展開するため、西田哲学における右のヘーゲルからアリストテレスへの移行の論理に惹かれるのは、わたくしとしても、ヘーゲルの具体的一般者としての概念をさらに個物化するために、質料の概念をもとめてゐることをいみする」と。

「人間意識なる形相に現実化する潜在的形相は生命であり、生命なる形相に先行的に潜在する形相は物質である」

「潜在的質料は現実的形相にとって無であるが、この無が全体として特殊な形相に現実化するということは、この有に無が潜在していることをいみする」

即ち、ヘーゲルの判断者は単なる有であるが、物質的判断者は、かゝる無を含んだ有であり、有無の統一として真に内面的発展が可能であるという。これが梯の物質の自覚なのだ。

こゝから梯の「場所」が西田の「場所」へ結合する。

梯は次のように言う。
「西田博士によれば、自覚とは知る我と知られる我とが我を知る場所との同一であって、自己が自己を対象としてこれを知るだけでは直観であり、そこに『自己において』ということが附加されねばならないとされている。そして知るといふことのもっとも完全なかたちは、自己が自己のうちに自己を映すといふことだとされている」

梯は、物質の主体性が直観から知ることに至る自覚を、この西田的な場所的自覚に求めてゆく。

こゝに梯の物質の自覚としての歴史観がある。歴史が場所となるのだ。

即ち、「自己が自己を映す鏡が自己自身であるところに自覚の本義があるのであるが、歴史的自然も、かくて歴史の統覚としては自己自身であり、自己を映す鏡である。すなわち自己を物として構成する場所である」ということになる。

物論の立場であり、歴史の現実を過程的に理解せしむる場所的な実践的直観の立場である」と。

西田が「場所の現在」において、対象の場所と主体の場所を直観を媒介として統一し、自己の内に「自己に於て」自己を見る、真の無の場所に到達し、この「絶対無」を創造の中心点としたように、梯も「自己を無にした普遍的な意識」「無の場所」から史的唯物論と自然弁証法を成立せしめんとする。

これはマルクス・レーニンにおける唯物的過程的弁証法の逆転である。

だから梯は「何故に物質の主体性が潜在的形相とする思惟可能性が、場所的現在に立ちて、その中心点から、史的唯物論や自然弁証法を成立せしめるのか」について論証しえない。

また、物質の主体性が何故に、人間の思惟や意識を「無の場所」たらしめるのかについて論証しえない。

ヘーゲル概念論でも、物活論に依拠しても「無」の場所は論証しえない。
「無」に到達した梯の言い分、「無」に関する規定は次のとおりである。

「認識論において、認識の客体的対象を有と規定すれば、認識する主観的作用そのものは無と規定するほかないであろう。認識する主体としての自己を、反省して対象とすることができるとしても、この反省して対象化された自己は、対象化する自己そのものではない。かくて主体は、どこまでも対象化される働きそのもの、作用そのものであって、対象的には無というほかないわけである」

「無という思想を、たゞちに神秘的であるとか形而上学的であるとか決めてかゝって、この無なる言葉の使用を嫌う人々があるにしても、それは論理的にナンセンスなこととして不問に付すほかはない」と。

後段の引用は開き直りであるが、前段の引用は、あきらかに、サルトルの実存主義から借りた無の位置づけである。

主体的物質の自覚は、物質が『自己において』自己を映すことであり、物質を物質が自覚する場所が歴史的自然であるというのだ。だがこゝで問題がおこる。

歴史は過程的なものであって、唯物史観は唯物論的過程的弁証法であるという根本的問題である。歴史の必然の場所的論証である。この歴史の必然を過程的弁証法から場所的弁証法へいかにして改作するかである。

梯によれば、
「歴史の起源は、つねにかゝる物質的自覚の成立するところの現在にあるのであって、過去から未来に引かれた時間的経過の区画において定めらるべきではない」

「かくて歴史というものは、過去から単なる継続でもなく、また未来から発生するものでもなく、たゞ、この現在の歴史の直観にはじまるものとしなければならぬのである」と。

こゝには、明らかに西田哲学の「場所的弁証法」の根幹をなす『場所的現在』が固く継承されている。継承されている点で一貫性を示しており、規定性をもっている点で黒田の無規定性よりもすぐれているが、より唯物史観の弁証法に対して敵対的である。

場所的現在に歴史の必然の自覚の出発点を求め、場所的現在に物質が『物質において』自覚する場所を求めているということによって、西田の場所的梯の改作が完了する。

物質の自己限定としての「無」の場所は、『ヘーゲル哲学と資本論』によって鮮かに次のように述べられる。

「対象のうちに作用を見、意識のうちに対象の実現を見るこの自己矛盾的な動的直観こそは、物質の世界を絶対的な主体たらしめるところの、自己を無にした普遍的な意識でもあるであろう。このような無の場所としてのわれわれの意識において初めて、そこに受けとめた過程の結果から遡源的に推論して、物質の自己運動としての対象的弁証法、すなわち史的唯物論および自然弁証法を、そこに成立せしめることもできるのである。そして、これが弁証法的唯

サルトルの『存在と無』（人文書院刊第一分冊）に示される「脱自の構造」である。

即ち、私を定立しているものは、その私を脱け出している。脱け出しているそのものを対象化することは出来ない。私は対象化することのできないもの、「無いもの」によって存在せしめられている。私はたえず自分を無化することによって私を存在する。対自はたえず無に喰われていく。人間存在とは無を分泌する存在である。無は人間を通じて世界に現われる。——これがサルトルの脱自の構造である。

梯の物質の自覚の場、場所的現在の場は、正に脱自の構造の裏返しではない。自己の内に社会存在と歴史の必然が把めないのだ。唯物史観の人間は「無」の場所ではなく、四ツの契機によって存在し行為し認識しているのである。

西田哲学の「場所的弁証法」II「場所」の枠内において唯物論的改作を試み、場所において唯物的過程的弁証法を把えようとした梯の到達点は、かゝる「無」であった。

それは到達点において実存主義の核心とふれあうものであった。無の回帰として改作は失敗した。

われわれは、無から物質の自覚と行為の主体を展開することを拒否する。われわれは、無を創造の中心点としてそこから唯物史観や自然弁証法を成立せしめることを拒否する。

かくてわれわれは、宇野科学主義が、原理論から経済原則を導き出し、経済原則から唯物史観の完成を展開する理論構造に反対し、これを理論的に粉砕した。（鉄戦 2 参照）

今、われわれは、場所的弁証法をもって、場所から史的唯物論や自然弁証法を成立せしめる梯と、この亜流としての黒田が場所において唯物史観を史的唯物論へ存在論的に改作する思考に反対する。梯哲学のこの失敗は、根本的には西田哲学の「場所的論理」に固執し、その思考の枠から出ることが出来なかつたことによる。

西田は、場所の論理を、行為的直観の立場で追いつめ、無に到達

していった。その場合、西田の行為者は、フィヒテの事行に学んだ精神行為の主体である。社会的存在としての人間がまず定立出来ていない。

梯も、場所の論理を、感性的直観で追求してゆく。そして無に到達する。その場合、梯の行為者はプロレタリアートという物質であるが、プロレタリアートの即自的意識が思惟を待たずして当為を直観出来るのは、人間と社会と自然とが直観で結ばれる一つの物質であるという論理を前提とするのである。

社会存在を宇宙の物質存在に平板化し、人間の自然と宇宙の自然を直観で合一する論理構造、これが梯による西田の場所の改作の軸である。社会と自然との媒介性と対立の無視である。

かくして、西田の「場所」の論理に立脚するかぎり、梯の「場所」もまた、いかに物質を行為主体に捉えかえようと、そこには、ヘーゲルの過程的弁証法と「物活論」との折衷が必要となったのである。

また「現在」を、西田の「創造的現在」に立脚して指定するかぎり、過程的現在には放棄され、「過程的弁証法」の「結節点」として現在の位置が放棄されざるを得ないのである。

黒田寛一は、この梯の「場所的弁証法」との格闘を通し、梯哲学を通して西田の場所の接近し、「行為的現在における場所的立場」を自己の哲学の立脚点とするようになったのである。

したがって黒田は、梯哲学の枠内であれこれとオーバーフォールを展開しているが、所詮は、西田哲学の「場所的弁証法」のスノの下にあるのである。

(四)

黒田は、『ヘーゲルとマルクス』(六八年版まえがき)で「行為的現在における場所的立場」について次のように述べている。

行為的現在における場所を出発点とし、そこにおける主客の物質的構造を……場所的弁証法として明らかにすることが必要となった。
③ 即ち、行為的現在における場所的立場をまず定立し、この場所を客体(O)と主体(S)との対立として指定、この対立の主体の意識内部における構造を、主語(O)と述語(S)として指定し、両者の関連と統一を媒介的の同一性として捉えることが必要とされる。

④ この立場が場所的立場であり、この客体(O)と主体(S)との対立を、主体の意識内部の(O)主語と(S)述語に転化させて統一する場所的弁証法から、逆に全宇宙史を捉えかえすというが、黒田の自己批判なのである。「マルクス主義形成の論理」等で使用されている「行為的現在における場所的立場」は、この黒田による黒田の『ヘーゲルとマルクス』の自己批判の上に獲得されようとしてゐる立場であろう。以上四が黒田の立場である。

では果して、「行為的現在における場所的立場」は、過程的弁証法をも包摂しうる場所的弁証法となりえたのであろうか。否であるというべきであろう。

それは黒田自身が次のように言っている。「『場所』の論理は現在へ実践・理論・組織の弁証法として哲学的革命理論的に降りさげ追求されつつある。問題追求の次元と角度がこのように具体化されていることからして、たしかに、自然史的過程の論理、物質の自己運動の場所的把握そのものは、その背後におしやられている。だが、まさにこの背後におしやられているところのものは、おのにかんする学問的ほりさげが、なお停滞しているというところは、おのにかんする事実である。追求されなければならぬままにこの領域において、私の過去の理論展開との決定的決別が、いまなお十分なしとげられていないところこそ、こんにちの私の学問的苦悩があるのであって、わが残骸をまえにした屈辱感はそのからうまれるのである」と。

自信に満ちた学究の徒黒田にしては、まことに珍らしい素直な告白

「場所的弁証法の解明にかんしても、なお不徹底な追求のしかたがのこされている。すなわち、行為的現在における場所(あるいは物質的世界)におけるその二契機をなす客体(O)と主体(S)との物質的対立、これを物質的基礎として同時に意識内部におけるそれらの再生産としての、主語面O客体面(S)と述語面(S)との対立および統一の問題があつかわれる場合、「……」としての意識をもつGellensの論理を駆使しながらそれを展開しようとしていることそれ自体は正当である。OとO、SとSとは、それぞれ媒介的の同一性においてとえられているのであるから、けれども、なお梯哲学と同様に「物質」の概念規定の曖昧さから、それは完全に脱却しているわけではない」

「もちろん、物質の自己運動の過程的弁証法のなかに場所的契機を探究するのではなく、逆に、行為的現在における場所(物質的世界)を出発点とし、そこにおける主客の物質的構造を、直接的には人間の自然と、それに対立する外的自然との物質矛盾とそれが不断に解釈されていくという構造を、まさに場所的弁証法として明らかにするとともに、他面では、この場所的世界を同時に全自然史過程の歴史的發展からとらえかえし、それを存在論的に基礎づける(過程的弁証法)——このようなアプローチのしかたそれ自身は、こんにちでもなお儼然として正当であると私は考えている。」

黒田がこゝで言わんとしているのは次の四点である。

① 「梯明秀の戦前の著作のなかから『物質の現象学』という視点を意識的にとりだし、それを展開しようとして苦闘したものとさえいえるものが、この『ヘーゲルとマルクス』でであるが、「自然史的過程にかんする展開は裏返しヘーゲル主義の傾向から完全にまぬかれてはいるわけではない。これが本書の決定的な誤りである」

② つまり「物質の主体性」という梯の基本概念に依拠して「場所」を確立しようとしたが、宇宙史の自己展開を物質の主体性で一貫させる梯の方法は過程的弁証法である。そこで、「物質の自己運動の過程的弁証法のなかに場所的契機を探究するのではなく、逆に、白だといえよう。学者としては立派な態度である。

要するに、場所的弁証法に立脚点を定め、そこから過程的弁証法を捉えようとする立場自身は今なお正しいと確信するが、全宇宙史の「場所的」過程的把握は十分になしとげられなかった、と述べているのである。

だが、われわれは、黒田が今なお正当性をもつと確信する「場所」の論理が果して正しいかどうかという点から批判を開始する。

そして、この立場が誤っていたからこそ、黒田は過程的弁証法を場所的弁証法に包摂して、「場所的」過程的把握をもつて全宇宙史と社会存在を捉えようとしながら失敗してゆくのだと主張するのである。

弁証法は史的過程において包摂されつつ展開されるものである。したがって、主体性の問題にかゝる人類の歴史的行為と歴史の必然との関連も、階級社会における歴史の必然と歴史を造る人間の自発性および行為の動機をなす当為との関連も、更には社会存在の矛盾が生み出し展開する歴史の必然性と人間存在の矛盾が生み出して発展する人類の当為との対立が共産主義によってのみ止場統一しうるという立場も、所詮は、過程的弁証法をふまえて把握されなければならないのである。場所という現在を過程から切断して確立し、「場所的現在」から共産主義と人類の普遍的当為である世界党建設斗争とを導き出すことは不可能なのである。

黒田哲学の根源的弱点はこゝにある。

場所的世界から出発して黒田がプロレタリアートの即自から向自への自覚を立証しようとした場合、先に見たとおり(後にマルクス主義形成の論理を更に検討するが)結局はマルクスの共産主義理論の獲得過程を文献的に捉え返すこととならざるを得なかったのである。この文献研究の態度を主体的に学ぶ立場が「行為的現在における場所的立場」なのであろうが、この立場は次々と弱点をさらけ出さざるを得なくなる。

即ち、「場所的現在」をまず自覚する発条が何であるか、という

問題である。

これには、黒田自身答えうるオリジナルな論理はなく、梯明秀が西田哲学の「行為的直観の立場」とレーニンの「生きた直観」を折衷した「実践的直観」に全面的に依拠せざるを得なくなっている。更には、黒田の『場所的現在』とはいかなるものかという問題である。

先に「場所的弁証法」に対する哲学的批判のポイントとして述べたが、「場所的弁証法」を主張するものにおいて、即ち「過程的弁証法」を否定するものにおいて、この『場所的現在』とは何かという設問は核心的な問題である。黒田は何も答えていない。

黒田寛一は「主客の対立構造とその意識内部における媒介的同一性」を場所的立場だと単純に述べているが、こんなムチャクチャな『場所的現在』はない。

すくなくとも、『場所』は、「場所的弁証法」の立場に立つ限り、『現在』である。

この現在は、過程的現在ではなく『場所的現在』である。正に西田が規定したように「過去、現在、未来の三つの時があるのではなく『真の現在』は、かゝる創造の中止点である」「現在に於て『時』の世界が創造せられ、我々は現在から種々の世界に出入する」のが『場所的現在』であるのだ。

黒田が「逆行為的現在における場所を出発点とし」という時、彼は、まず、「行為的現在」の現在とは何ぞや、現在における場所とは何ぞやを自己規定しなければならなかった。それは、学問を探究する者の初歩的な前提である。

『現在における場所』とは、場所的弁証法の立場からはいかなる『現在』となるのか。この核心に答えられない時、場所的弁証法の立場は過程的弁証法と自己区別がつけられないのである。はっきり言えては、場所的立場がいかなるものだが、言葉を使っている本人が判っていないということになる。過程的連続において現在を把えるならば、『場所的現在』を場所

的弁証法から定立することは出来ない。論理矛盾である。連続即非連続というところに場所がはじめて設定されるべきなのである。

黒田が『ヘーゲルとマルクス』の六八年版「まえがき」で述べた『場所』には、この『場所的現在』に関する核心的回答がない。

『場所的現在』に対する規定のないまま、主客の対立構造と意識内部における主語（客体）と述語（主体）の媒介的同一が場所として理解されている。ここに黒田の「行為的現在における場所的立場」という用語の、哲学としての根本的弱点がある。

例えば次節にみる『マルクス主義形成の論理』における、唯物史観の存在論史的唯物論への改作案、唯物史観と資本論との弁証法的統一における誤りである。そして後章においてみるプラン問題を媒介とする資本論と帝国主義論の体系的把握におけるマルクスとレーニンの場所的立場の分裂である。

われわれは黒田の「現在における場所」の哲学的弱点を批判したので、更に「形成の論理」における場所的立場の適用の批判へと問題を深化してゆこう。

(五)

黒田寛一の「行為的現在における場所的立場」は、西田哲学の「場所的弁証法」と「場所的現在」に「無の弁証法」をその元祖とし、梯明秀の「宇宙史的物質の自己運動」と「物活論」に「物質の主体性」と「実践的直観」を中興の祖としている。

したがって、黒田自身、「行為的現在における場所的立場」について、特別な哲学的な創想的諸規定もっているわけではない。いわば、西田・梯の垂流として登場したものである。だから、梯の場所的自覚がそうであったように「場所」に立脚するかぎり、共産主義も党も措定出来なかったのである。

過程的弁証法を否定する立場に立つて、西田の場所的弁証法に立

脚する黒田が、いかにして論理と歴史を、論理と意志を把えうるか、その失敗の過程を点検しよう。

「マルクス主義形成の論理」は、場所的弁証法の枠内に唯物史観を押し込めようとした好例である。行為主体が、場所的現在の立場を獲得する時、はじめて、現在の現実の論理のうち過去の歴史の反省の論理を「場所」において統一しようという立場がとられていく。黒寛は次の如く云う

- ① 「行為的現在におけるこの実践的にして理論的な主体的反省（下向的分析として意義をもつ）の認識」は「思惟過程においてマルクス主義の歴史的形成を現在の再生産する」（形成の論理 P 二三）
- ② 「場所的立場における人間認識の深まりの論理的過程は他面では同時に歴史的反省」構成という構造をなす」（同）
- ③ 「行為的現在における場所的自覚の論理、対象的現実の論理的認識と過去の現実の歴史の認識との現在の統一という概念把握の論理」これが主体の根拠とされるかぎり、あらゆる一定の思想や理論の形成過程への歴史的反省は必然的同时に論理構成とならざるを得ない」（同 P 二四）
- ④ 「このような問題意識のもとに『ドイッチ・イデオロギー』をとりえかえず場合、その難点がたんなる過程的を叙述にあること、いかにすれば論理的な形態論的把握にあることが、はじめて明白となるのである。ここに『ドイッチ・イデオロギー』において成立した唯物史観を史的唯物論として再構成することが、課題として登場せざるを得ないのである」（同 P 七四）

この例文は、黒寛が「形成の論理」において（一九六一年）「唯物史観を史的唯物論として再構成する」（同 P 七〇）ための方法的論証として適用した「行為的現在における場所的立場」の生きた例文である。

彼は①と②で、論理は下向的分析に立つ行為的現在に始まり、場所における認識の深まりが歴史的反省をも構成するのであるが、歴史の構成は論理的構成にならざるを得ないことを③で主張している。

すなわち、場所において把える現在における過去は過程的であってはならず、論理的上向に構成して存在論とすべきであるといっているのである。

だからドイデの唯物史観は歴史の弁証法であって、認識論規定にとどまっているという弱点もっている。この歴史の弁証法は、現在における過去へ、つまり場所へ把え返すには、存在論としての史的唯物論へ再編しなければならぬ。その叙述の方法は、『資本論』と同じように、下向的分析の到達点としての始原から反転する始原でなければならず、歴史の始原としての、歴史を過程的に展開する起動源としての始原であってはならないということになる。これが④の論点である。

われわれが①と②を平面的に見ている限り、黒寛の主張は、あたかも、現在の現実の実践的任務に歴史の理論の形成過程を統一する主体的立場として受け止められやすい。このため、中核派の中谷論文のような、黒寛の唯一の功績は「行為的現在における場所的立場」であるということの本質を転倒してみる評価が生れてくるのである。ここに簡単な例文をあげて①と④の「場所」の論理を見たように、黒寛の歴史と論理の現在の統一としての「場所の論理」は、決してわれわれが主張している。共産主義党史観に立つ党が世界党・世界プロ独のための闘いの過程で共産主義の歴史的使命と論理的任務を党において統一し綱領戦略と党風軍紀に結実する立場とは全く異なるのである。

即ち、変革主体であり認識主体である党主体の措定の方法が全く異なるのである。いや、黒寛の「行為的現在における場所的立場」からは、変革対象世界の存在に対する認識と共に変革かつ認識主体である自己が共産主義党として発生し存在する歴史的位置を認識して導き出すことが出来ないのである。

われわれは、唯物史観を単なる唯物弁証法的な歴史の観方などと矮少には把えない。唯物史観は人類史の存在を人間存在に社会存在として把え、人間労働としての行為者が人間をも含む社会存在の階

級社会の分裂の中で生産力と生活関係に下部構造を規制され、上部構造における階級斗争を歴史の起動力へと（人間労働を越えるものとして）突き出してゆく。かくして階級斗争は人類史を貫く歴史的行爲の基となるが、それは、人間の社会的労働が精神労働と肉体労働に分裂して以来、生産手段と国家を占有する支配階級の手にかざされた精神労働をもうばいかせずといふと発展せざるを得ないものとする。したがって階級斗争は資本の世界性がプロレタリアートの世界性を生み出すに至るや、精神労働の諸成果をあるいは技術論（人間社会の自然に対する闘いの諸成果の蓄積）として、あるいは支配的イデオロギーとして占有していた階級に対してイデオロギー斗争を展開するに至るのである。

階級社会の下では、自然と社会との対立を媒介とする人間社会存在と人類の普遍的当為とを絶対的に統一しえなかつた旧来の哲学・ブルジョアイデオロギーに対して公然たる闘いを展開して唯物史観を世界観として獲得するのである。

精神労働の諸成果を階級社会の下で占有してきたブルジョア哲学は、支配階級のイデオロギーとしての位置しか占めることが出来なかつた。

それは、極限において国家に総括された私有財産社会である階級社会をアンジツヒなものとする立場に立っている限り、人類の歴史的行爲を社会存在の認識把握との関連において人類の普遍的当為にまで高めることが出来なかつた。常に連惟と存在との関係は逆転し、ゾルレンとザインとの統一は分裂しつづけた。

そこでは、分裂したゾルレンは社会存在の階級支配形態に基本的に包摂される個人の道徳や社会的倫理としてしか体系化することは出来なかつた。思惟と存在を概念の自己展開において統一しようとしたヘーゲルも、階級社会である社会存在と国家に人間の個の総括権を論理として認めざるを得なかつたのである。

これらのブルジョアイデオロギーでしかあり得なかつた哲学との闘いを階級斗争が生み出し、未だ未熟なイデオロギーながら闘いの

党史観という歴史的使命に支えられた党が世界革命戦略という現在の現実の論理的任務を貫徹することが出来ると考える。

③ そして、かゝる歴史的使命と論理的任務を統一しうるものは、西田哲学的「場所」における歴史の現在への閉じ込めや、即目的プロレタリアートの梯的「当為的直観」に依拠した「場所的自覚」ではなく、世界共産主義党建設を闘い取るうとする主体としての党でしかないと考える。

④ また、論理的任務として把握する資本制生産社会が、論理性と歴史の過度証を内に統一して段階を史的に画し、産業資本段階の世界革命の客観的条件と帝國主義段階の世界革命の客観的条件を移行的に異にするが故に、我々は、等しく普遍的に世界共産主義を獲得せんとする党が、マルクスの世界党からレーニンの世界党への質的發展を対象把握との関連において発展させ、飛躍させねばならなかつたと考える。そして、変革主体である党が獲得すべき世界の一角を変革して自己を「労働者国家」に対象化した故に、階級斗争の世界的性格を飛躍的に変化させた過渡期世界として、現在のわれわれに過渡期世界党の質を獲得すべく、変革主体の変革、党の革命を要求しているのである。これらわれわれの共産主義を軍事において組織する過渡期世界党の位置なのである。以上がわれわれの「場所」であり、行爲的主体の存在根拠を歴史的に共産主義として突き出せない黒寛の「行爲的現在における場所的立場」と完全に異なるところである。そして同時に歴史と論理の統一をプロレタリアートの向自への「自覚の場所」に自己限定する「場所」の論理と異なるところだ。

(六)

われわれは、「形成の論理」における黒寛の唯物史観に対する「場所的立場」がわれわれの世界共産主義党史観と根底的に対立する立場であることを確認した。

諸思想を生み出してきた。それ故にこそ、マルクスは、これらの、限界性をもった、あるいは反動的なものでさえあった。維多の共産主義や社会主義の諸傾向を、マルクス主義の共産主義へ体系化し、人類史の人間存在・社会存在から把え通して人類の普遍的当為と人類前史の階級社会とを共産主義運動という普遍的人類の行爲として獲得することが出来た。

そして、共産主義の運動を人類史を貫く普遍的行爲として確定したマルクスは、この歴史的使命を世界観に武装された世界党へ結束させた。プロレタリアートは、即目的な階級斗争を世界観に共産主義に武装された。マルクスは、この世界党の歴史的使命を論理的任務に、世界革命戦略に結実させるために、直接変革対象世界の論理的解明を行った。国家に総括された私有財産社会の最高の発展段階であり階級社会の最後の社会構成体である資本制生産様式の論理的解明を、下向的分析をもつて認識し、上向的論理体系をもつて総括した。

だが、マルクスは、そのプランにおいて、唯物史観の歴史の弁証法が解き明かした国家による階級対立社会の総括と、最高の私有財産社会である資本の国家による総括とを結合させて、唯物史観と資本論の弁証法を、歴史的過程的弁証法と論理的上向的弁証法を体系的に把えようとしていた。

そこから世界革命戦略確定という論理的任務に共産主義運動という人類の普遍的当為である歴史的使命の統一を導き、これを世界党建設のための闘いに結実させようとしたのである。

だからわれわれは

① 唯物史観は歴史的過程的弁証法として展開されることが正しいと考える。そして、かゝる弁証法においてのみ、人間の労働↓階級斗争↓共産主義世界党という、世界共産主義の指針を獲得する根拠を導き出しうるものとする。また、

② 資本論は、論理的上向的弁証法によって展開されることが正しいと考える。そして、かゝる弁証法においてのみ、世界共産主義

そして、この検討から次のことが明らかになった。

まず、「場所的立場」からは、現在に立つ行爲者の質と主体的根拠が全く指定出来ないことである。即ち、最高の私有財産社会として国家に総括される資本制生産階級の階級対立に投げ込まれ、階級斗争の国際的経験と世界党建設過程の歪曲の下に、共産主義がイデオロギー斗争を通して生れて、世界革命綱領戦略をめぐって分裂する現在に決するところの革命主体を、普遍的人類の歴史的行爲の尖端として指定出来ないことである。

そこには、即目的プロレタリアートという死んだ抽象が、資本主義の原則的批判を自覚的に深化し、そこからマルクス主義形成の歴史過程を存在論へ再構成することが向自的プロレタリアートへ転化するといわれるだけである。

人間の労働をもつて人類の歴史的行爲を生物的生存と区別して社会存在を形成した人類が、何故に階級斗争を通してイデオロギー斗争を開始し、ブルジョアイデオロギーにはなしえなかつた当為と存在の統一を共産主義の運動の思想として獲得し、世界党のための斗争へと人類の歴史的行爲を高めざるを得なかつたのか、ということ、この世界党のための闘いなくして人類は万人のための行爲とする世界共産主義という真の人類史を闘いとりえなないのかということ、

「場所の論理」は導き出せないものである。

「場所の論理」が導き出したものは、せいぜいプロレタリアートの人間論理への自覚である。自覚の党として自己限定するものが、

「場所」が導いた革マルの党である。

さて、第二は、「行爲的現在における」即目的プロレタリアートが、何を根拠にして向自的自覚に立ちうるやの根拠をも「場所の論理」は説明出来ないことだ。

大衆の自然発生性に根差す根拠とご自覚の根拠を「場所の論理」は解明出来ない。

黒寛はプロレタリアの人間の論理で「プロレタリアートの存在論」を設く。賃労働と資本という原則的対立という存在から、上向的に

自覚を一面化し、その自覚の場を斗争といいうるのである。それは、人類の歴史的行為が、人間的労働↓階級斗争↓世界共産主義党へと発展する必然的根拠の中に、論理的に位置づけられなければならないのだ。

若し、この人間の深底に流れる弁証法的根拠があきらかに見えなければ、なぜ「場所」という立場にプロレタリアートは立ちうるのだろうか。

この難問には、黒寛の場所的立場は応えられない。袋小路から抜け出すためには、梯明秀の「当為的直観」Ⅱ「実践的直観」に依拠して「場所」への入口を見い出さなければならなかったのである。

梯の「当為的直観」は西田幾太郎の「純粹経験」Ⅱ「行為的自己の立場」の改作である。主客未分の合一を純粹経験に求めた西田哲学は主体（主観）と客体（対象）の合一をフィヒテのA事行V（行為）に求め絶対矛盾的自己同一で解決を計ろうとしたものである。したがって黒寛が梯の「当為的直観」Ⅱ「実践的直観」に依拠して感性的直観から場所への自覚を導こうとするかぎり、黒寛そのものが、西田の「場所」に依拠せざるを得なくなるのである。

すでに述べたように、ブルジョアイデオロギーのまぬかれない宿命であるところの当為（ゾルレン）と存在（ザイン）の不統一的分裂は、階級社会という存在をフェルジュシヒなものとして把握することの出来なかつた西田哲学においてもまぬかれ得ない宿命としてまといつていた。

昭和初期の暗い階級社会存在の下において、当為の概念を、意識Ⅱ判断、意志の概念に格下げしてしまい、主体と階級概念のない社会存在との未分合一を求めようとした西田哲学は、「場所」という固定抽象的認識の中に存在の合一を閉じ込めざるを得なくなつたのである。

この主客対立の底を身体の直観の中を通過してぐり抜けて達した西田幾太郎の合一の「場所」も、結局は、人類の普遍的な歴史的行

為であるべき当為を導き出すことは出来なかつたのである。そこから生れたものは、「無」の自覚的自己限定であり、「働くものから見るものへ」の退去であった。自分の内側の暗い深淵をもっとよく見つめることを通して、そのことが外（対象）にあるがまじく見ると「無」の立場に達した。これがいわゆる「無」の自己限定としての「場所」の論理であった。

ここでは、社会存在としての人間存在の実践が人間労働↓階級斗争を通して世界共産主義党への当為を獲得する可能性は一カケラもない。マルクスとヘーゲルの弁証法を「過程的弁証法」として共に否定し、「無」の弁証法「絶対矛盾的自己同一」としての「場所」に主客合一を求めた西田の「場所」からは当為を導き出せなかつた。そこから生れたものは当為ならぬ「無為」でしかなかった。

西田哲学が直面しながら通つたザインとゾルレンの分裂の立場に関する盲点を、梯も黒田も総括することなく唯物論へ改作しようとしたから彼等は無残に失敗したのである。

ここで本章の批判点を最終的に集約しよう。

場所的立場では、①当為と存在の統一の問題を哲学的に解決出来ない。したがって②共産主義運動を人間存在と社会存在の人類史における矛盾止場の必然的普遍的行為として指定出来ない③社会存在の指定が階級社会の行為的現在における場所限定されているため、共産主義はイデオロギーとしての枠で抱えられ、「現実的ヒューマニズム」が若きマルクスの立脚点だとか、マルクス主義的ヒューマニズムなどに当為が限定されていく。④これでは当然、イデオロギーの枠に唯物史観が逆押し入れられ、唯物史観は「唯物論的な歴史の観方」となってしまうし、存在論と唯物史観との関連がつかめない。⑤社会存在であり労働行為である人間の認識が社会存在の矛盾の中から労働↓階級斗争↓世界共産主義へと当為を高めてゆく唯物史観の核心が把握出来ない。だから唯物史観を存在論としての史的唯物論へ改作するというような発想が生れる。唯物史観と資本論の統一をも、場所において存在論で統一しようとする。歴史発展

の法則（つまり社会存在として存在する人間の歴史が、社会存在論的法則である生産力と生産関係・上部構造と下部構造に規定されながらも、人間が主体的に参加することによって、つまり始めから労働主体として行為者である人間のいとなみが歴史をつくり、階級斗争を通してのみ、生産力と生産関係、下部構造と上部構造という存在論の矛盾を歴史的発展と認識するという歴史的発展の弁証法）を、一つの社会構成体である資本制生産社会の論理的把握（下向的分析と上向的综合による論理的把握）と混同することになる。

このように存在に對する誤った考え方や把握の混同が黒田の対象認識ということになれば、人間の当為・人類の当為・共産主義が人間存在Ⅱ社会存在の中から生み出される過程の必然的根拠はなくなる。場所的立場では当為を存在の外から直観を契機にして導入せざるを得なくなるのである。⑥誤った存在論にもついで対象認識として自覚する場所的立場では、行為的現在の行為主体の根拠を、人間存在の関連で押えられない。⑦行為主体の根拠を、存在と当為の統一の論理によって押えることが出来ずして、対象認識という思惟作用を共産主義の論理的任務に高めることは出来ない。行為的現在にあることを場所的に自覚しなくとも人間は歴史の始めから労働の主体として行為者であり認識者であった。行為者はすでに自然発生的に人間存在として生きる目的を労働能力の内を持ち、階級社会では反抗の即自的行為をくりかえしている。⑧対象認識を世界共産主義の論理的任務のうち位置づけるには、認識主体が歴史的任務を獲得せねばならぬ。だから、共産主義は歴史的任務と論理的任務を切り離せず、共産主義の歴史的任務を現在の現実を生かそうとする立場のみが、対象把握を国家論、権力論へと煮つめ、世界革命戦略へと結実する共産主義の論理的任務に高めることが出来るのである。

⑨この立場をつかめない黒田の場所的立場は、対象認識を認識論型自覚党形成へと矮小化し、宇野科学主義は対象認識を整理主義へと歪曲するのである。⑩場所的立場は、対象認識の作用とマルクスの文献的反省とを、自覚の暗室へ導く立場である。そのかぎり宇野

整理主義よりも能動的であるが、党組織論Ⅱ認識論型自覚党形成論へ導くものであるが故にその能動性はネガティブである。この意味で、黒田の場所的立場が招くネガティブなものは、組織的なものとならざるをえないのである。

以上、第一章では「場所的立場」が導く自覚の限界性を批判し、われわれの世界共産主義党史観の立場を対置して突きつけた。第二章では「場所的立場」の根拠となつた西田哲学の「場所」の概念を批判する。

〔注〕西田哲学は、ヘーゲル弁証法を理性的自己限定による過程的弁証法、マルクス弁証法を物質的自己限定による過程的弁証法として歪曲的に抱えた。ヘーゲルは思惟が物質を限定しマルクスは物質が限定するから媒介のない対立であると解釈した。

西田は思惟と存在を絶対的対立に指定し、両者の矛盾と媒介が弁証法であることを理解せず、この絶対的対立を「場所」の自己限定で解決しようとした。即ち直観で絶対矛盾を自己同一するものが場所であるとした。

西田哲学は①過程的弁証法を否定するが故に存在の歴史的必然を把握出来ず②弁証法の核心が矛盾の媒介による発展であることを把握出来ぬため③存在の認識と当為との統一を共産主義として導き出すことが絶対に出来ない理論構造となつていたのである。

第二章

西田哲学を批判する党の

実践的根拠とは何か

(一)

なぜ西田哲学の「行為的直観の立場」を我々は批判するのか。思想斗争の实践的根拠は何処にあるのか？

答は次の一点につきる。
すなわち、「革命の決意」を唯物論—共産主義の決意として打ち固めるためである。

「哲学がプロレタリアートのうちにその物質上の武器をみいだすように、プロレタリアートは哲学のうちにその精神上の武器をみいだす」。「解放の頭脳は哲学で、その心臓はプロレタリアートだ。哲学はプロレタリアートを場棄せずには実現されえず、プロレタリアートは哲学を実現せずには自己を場棄できない。」（ヘーゲル法哲学批判序説）

革命的決意の哲学は「宗教的決意」でもなく「実存の決意」でもない。唯物論が導く共産主義の決意である。

革命的決意の内容は社会存在に規制された人間存在に對する思惟の洞察にもとづく理論的判斷の行為への飛躍である。

宗教は人間本体を空想的に実現したものであり、現実の不幸にたいする抗議である。それは人間が自分自身を中心にして運動しないあいだ人間の周囲をめぐる幻想的大陽であり、精神なき状態の精神である。

唯物論が神学を破って「真理の彼岸がきえうせられた以上、此岸の真理を確立することが歴史の任務である」（ヘーゲル法哲学批判）

機械的唯物論は、たかだか、社会存在に規定される人間だけを説明するか、せいぜい反射説によって上部構造と下部構造の相互渗透あるいは上部構造の下部構造への逆作用を説くに停るのである。逆作用説では、権力の対応は説明出来るが、革命的意識の能動性が説けない。ましてや「革命的決意」の哲学は放棄され、経済決定論的階級対立の反映意識か、人民に捧仕する心理学的倫理観か、ヒューマニズムの普遍化に陥らざるを得なくなる。

この機械的唯物論のスキ間に、「精神なき状態の精神である」宗教的意識の能動性がよみがえるのである。

「此岸の真理を確立することが、歴史の任務である」（傍点はマルクス）という立場から、「経哲草稿」↓「ドイデ」を通して唯物史観を確立し「共産主義を現実的に生みだす行為」として歴史の全運動を扱えたマルクス・エンゲルスの生々とした唯物論を見失う時、機械的唯物論は「宗教的意識の能動性」を哲学化した西田哲学や、「実存の決意」で社会存在としての人間存在をアトム的個に分解させる実存主義哲学を生み出したのである。

梅本克己は「意識する物質と意識なき物質、乃至は生命と物質という二つの境界には、自然科学にとって至難な関門が横たわっており、観念論最後の拠点もここにあり」（唯物弁証法と無の弁証法）といっている。即ち、生物と天体との境界線、意識する物質と意識なき物質との境界線を自然科学が解明出来ないで、観念論者は唯物論哲学に反証を示すことが出来ないに拘らず、唯物論では扱えきれない世界存在の深い底を「思惟しえぬ空間」とし、そこを観論最後の拠点として実存主義を生み出したと見ている。

そこから「元来『決意』は実存哲学で見られたように思惟しえぬ空間に何ものかの実在をつかまんとする情熱の賭に成り立つ。だから決意が成立するためには対象が不確定であることを前提する。だから実存の決意は同時に信仰への決断である」（唯物論と自覚の問題）という。

梅本の指摘を待つまでもなく実存主義、就中、サルトルの実存主

精神と物質のいずれが先かを迫られて観念論の立場に立ちうる者はいない。精神から物質が生れたことが論証しえない以上、観念論哲学者も物質から精神が生れたことぐらいいは認めるようになってくる。

公認のスターリン主義唯物論は、この立場にとどまっている。公認の機械的唯物論は、精神と物質の後先を論じ、対象の意識への反映を語ることは出来るが、人間の意識が意志へ高まり、決意をくぐって革命の実践へ有限なる個体を死滅させ、悠久の歴史の中に生きるところの『決意の哲学』をもちえない。

機械的唯物論は、物質と精神の認識上の関係を単純な反映論において把える。

対象を写す頭脳、頭脳に映される対象という、対極の反映論では『意識の能動性』を論証出来ない。

では、何をもちて意識の能動性とするか。それはまず記憶と反省を基礎とする対象把握の「推理力」と、対象に迫る行為の「判断力」であり、「判断」がもたらす「意志力」と科学を媒介とする「決断」と「決意」である。

機械的唯物論の単純反映論は、『意識の能動性』を論証出来ないために、物理的「鏡の反射力」を反映論に導入する。反映は受動的反映から能動的反射へ転化するという論理である。

だが反射説もまた「行為者の認識」が出発点から目的性と反省を含むものであることに無自覚なるが故に、「推理」と「判断」の誤りの根拠さえ説明出来ない。

だから、機械的唯物論は意識の物質からの発生と、対象の反映を説くことは出来るが、対象世界を突き破ろうとする人間の能動的意志力も、能動的意志力（意識の能動性）が情念にまで高められる弁証法を根拠づけられないのである。

即ち、社会存在（環境）に規定される人間と社会存在（環境）を变革する人間との関連を、過程的弁証法において唯物論的に統一出来ないものである。

義は、思惟しえぬ存在と脱自論とによって、決意を賭に求め、個の決意の結果に對する個の責任において人間の可能性と主体性を見ている。梅本は実存の決意を信仰への決断と規定しているが果してその断言出来るであろうか？

(二)

河上肇は獄中斗争を経て、己を律したものを次のように書いている。

「今年六十五才、人生を終らんとするに臨み、絶対的無我という一つの宗教的真理と、マルクス主義という一つの科学的真理とは、私の心の中に牢固として抜くべからざる弁証法的統一を形成しつつ我をして無上の安心に住して瞑するを得しむる我が一生の所得であったと私は確信して動かない。」（自叙伝）

河上肇の科学としてのマルクス主義、宗教的情念としての絶対的無我の統一とは何であろうか。

対象把握の論理的任務と、歴史的必然洞察の歴史的任務が、党に結実する人間存在の必然性としては統一されず、歴史にかゝわる人間の意の能動性が脱落した社会存在の必然

河上肇のマルクス主義においては、歴史的發展の必然と資本主義の論理構造が、客観主義的左下部構造の必然として把握されていたのだから、世界を打ち破る意識の能動力の根拠から見れば、対象の推理と理解を河上のマルクス主義が果し、能動力を決意せしめて一個の有限なる固体を革命運動に投ぜしめる人間観、人生観は絶対的無我という宗教が支えていたということになるのだから。

この立場は、西田哲学が提起している「対象認識」と「自覚的方向」の分離の立場を克服出来ない。いや正しく西田哲学の主張に足をすくわれる主張なのである。客観的唯物論の弱点である。

『左右田博士に答う』という論文の中で西田幾多郎は次のように言っている。

「知識とは如何なるものかを問題としてみたい。……知識というものの中に於て、少くとも種々の種類があり、種々の次元を区別し得ると思う。先ず客観的对象を認識するということが、主観的作用を反省するということは、……相反する立場によって成立する知識」である。

即ち「理論性によって知ること」と、理論性が自己自身を反省するということは同一である。そして自己自身を反省し、知識を批評するのが自覚的立場だという。そして自覚的立場を対象認識の立場と区別する。西田は次のように区別する。

「知ることと、少くとも根本的に相反する二つの方向を区別せねばならぬと思う。一つは対象認識の方向であり、一つは自覚の方向である。」

そして対象認識は更に「限定的判断による自然界の認識と、反省的判断による合目的的世界の認識」とに分岐されるが、要するに、この「対象認識の方向に於て意志を認識することは出来ぬ」のである。

他方、自覚の方向は、「その最も深い底」に「真の無の場所たる直覚的自覚」。「その中間に於て意志的自覚を見る」のだが、要するに「自覚の奥に意志的自覚の立場を見ることによって、対象界に心理的意志を認識することができるのである。」

西田のこの主張をわけて解明である。いくら論理的に対象の存在を分析し総合して把握しても、そこから人間の意志は生れやしない。意志や決意は論理的对象把握とは全く別の次元から理解から生れてくるものであるというのだ。すなわち、知識を深め理解力が増えれば高めて「判断」を正しいものとしよう、判断の下に意志が従属するとは考えられない。むしろ意志は主観そのものとして自覚であり、自覚が判断を従属させると考えているのである。

直接西田の言葉で聞こう。

「対象認識の論理的主観を何処まで押し進めても、意志主観がそ

の下に入ってくることは考えられない。判断主観の下に意志主観が従属する様になるとは考えられない。意志主観およびその対象界を包むものと考えられるものは、実は判断主観という如きものではなくして、主観そのもの即ち自覚という如きものではないからか。」「意志の意識なくして知的自覚は成立せぬ。カントの純粹統覚がフィヒテの事行に到らねばならなかったのも此故である。」「自覚は無限の深底であり、自覚の意識其者をも失ふところに、真の自覚がある」

「自覚の意識の存立せられるかぎり、尚認識主観の意義を有し、何等かの意味に於て対象が見られるのであるが、之を越えれば、全然所謂知識の領域を脱して、直観の世界に入る、而してそこに真の自覚が現われるのである」

「私は此の如き意味の直観を知識の極限として、概念的知識ではないが、真の知識と考えると共に、知識成立の根本条件とも考えるのである」。以上が西田の主張の核心だ。

(三)

このような西田哲学の行為的直観の立場を止場しない限り、マルクス主義は、絶対無我を乗り越えることは出来ない。

西田が言う自覚する意識を越えた自覚としての直観、絶対無我における知識の領域を越えた直観、真の自覚としての意志を克服することなくしてマルクス主義は共産主義の意識の能動性としての革命の意志と決意を哲学的に打ち立てることは出来ない。即ち河上肇のような立場に追い込まれるか、「実存の決意」を導入せざるを得なくなるのである。

かくして、西田哲学の「場所」の論理が設定する土俵に唯物論が引きずり込まれ、「場所的立場」から唯物論を改作して機械的唯物論の反映を止場せんとする発想が生れるのである。梯と黒田の哲学がそれである。梅本の出发点もまたここにある。

西田哲学の場所的弁証法を觀念論として切り捨てることはたやすく。機械的唯物論の伝統を守る正統派も西田哲学を觀念論として単純に切り捨て、その延長上に梯とその亜流である黒寛を串刺しにする。しかしそこからは何も生れてこない。

我々は、マルクス主義唯物論が社会存在の史的自己展開の必然を洞察しうるのみならず、社会存在である人間存在そのものが労働という目的性をもった行為者でありかつ認識者であるが故に、対象世界を破る能力をもつものと考えている。

即ち、社会存在の歴史の必然と、下部構造の上部構造に対する必然的矛盾の自己展開としての把握することを退け、人間存在が社会存在として存在する世界自体を唯物史観の四ツの契機において把握し、存在自体が労働という行為者を前提とする世界であることを確認する。だから人間の労働をもって社会存在を天体的存在、生物的存在から区別した人間存在は、当初から存在の底に存在自身を破るものが、労働に秘められた存在を破って歴史を主体的につくってゆく人間の能動的意識力が潜在的に指定されていると考えるのである。ここを起点として、社会存在と人間を考え、物質と精神を人間の中に統一して考える。

行為が意識を規定しているのであって、近代哲学が始原に求めた「自己意識」が行意を規定したのではない。しかも、行為は労働（精神労働と肉体労働の統一としての人間労働）を基体とする人間存在の歴史的行為としてのみ能動的意識をもっているということが重要なのである。

精神労働と肉体労働の分割が、分業と私的所有の概念を生み、そこから階級社会が発生し、生産と所有の分割が精神労働と肉体労働の分割を規制して労働主体は精神労働を剝奪され生産手段の占有者にイデオロギーと労働の成果である技術をも占有され、歴史的行為によって生み出される精神労働は支配者によって、非労働主体によって蓄積されてきたのである。

階級斗争が盲目的な段階では下部構造の矛盾、生産力と生産関係

の矛盾に階級斗争は大きく規定され、階級斗争を自然発生的意識にとどめ、宗教に包摂される弱点をもっていたのである。

階級斗争が精神労働の奪還斗争として被支配階級にイデオロギーを獲得させる過程は、正に、歴史的行為が意識を取りもどしつつ思想を獲得する過程であった。

階級社会の下では人間存在の認識と人間の当為は常に分裂するし統一は出来なかった。ギリシャ哲学から神学を経て近世に至る哲学は、一貫してザインとゾルレンを統一しえなかったし、これを思想と対象の対立として把握し主観の側で包み込もうとした。

カントからハイフテとシェリングを挟んでヘーゲルに至るドイツ哲学も、当為を倫理と道徳としてしか押えられなかった。

ここに、当為を人間にアプリアリなものとし、存在を思考するパターンが生れるのだ。

カントも、哲学の根本問題たる思惟と存在の關係に挑戦した。カントは、一切の経験は人間の感官に対する物自体の作用によって始まることを認めて唯物論に一步接近した。

ところが、物自体は感官を触発するが、感覚によって与えられた「もの」は物自体ではないとして、物自体を経験の彼岸に追いやった。実存としての物自体が思惟され判断された脳細胞内部のものとは異なることは唯物論も認めるところであるが、カントは「知識から発展する吾々の認識は、だから、物自体に関する認識ではない」と觀念論の側へ後退し「物自体は独立な存在であるが不可知である」と考えた。

「カント哲学の根本特徴は唯物論と觀念論の和解であり、両者の妥協であり、異質な哲学的諸流派を一つの体系のうちに結合することである」とレーニン指摘している。

かついて形而上学的対象認識から脱却しかけたカントも、当為を

あつて人間、古典的形而上学の倫理学に止るのである。カントは人間の当為を「道徳」と考え、道徳生活存立の可能条件を「意志の自由」と「靈魂不滅」と「神の存在」に求めた。

そして「理論理性」の領域では解決しえない質の問題として当為を指定し、「実践理性」の領域、つまり論理的理性的認識の枠外にある問題とした。西田と同じように。

このカントの行詰った問題を、フイヒテが「事行」という概念で説かうとした。先に西田の引用文に出てくるフイヒテの事行である。精神的行為主体の生命が内的に呼び出すものとして主意主義であった。西田が『善の研究』のカテゴリーとした「純粹経験」も、フイヒテの事行からヒントを得てマッハの表現を借りてつくりあげたものである。

さて、フイヒテの事行に根拠を与えようとするものがシェリングの「絶対者」である。フイヒテはカント体系から物自体と不可知論を追放して、カントの「先験的統覚」を原点にすえた。そして、先天的統覚を自我となすけ、自我の定立が非我を定立させるといふ形式論理をもって自我に対する非我の制約の突破を事行とした。先天的統覚を原点とする自我は、その本質を活動とし、これを事行と呼んだ。

当然、当為の始原である絶対自我の定立の根拠が問われたが存在論的に説けないのである。みずからカントと共に「先天的認識論」の立場を守り、先天的認識論を否定する主観的観論とも自己を區別して、「先験的観念論」と自己を規定した。

西田もこの系譜を『禅』に結合したものと見てよいだろう。青年ヘーゲル派のモーゼス・ヘスも、師ヘーゲルの自己意識と概念の自己展開に反撥し「行為の哲学」をつくりあげるが、行為する哲学の主体は、精神的行為主体の我へヘーゲルの自己意識を改作したものである。

シェリングはこのフイヒテの主意主義を克服し、カントの物自体とフイヒテの自我を統一する環をつくり出そうとした。

自然が思惟から完全独立すれば観念論は成立しない。そこで、主客同一論を仮定する。主観と客観、精神と物質は同一で、磁石の両極の如き両極対立をなすが、これを絶対者が統一すると考えた。

義から直観主義への転換は、前期から後期への西田体系の発展的移行であった。

要するに、ヘーゲルを観念的過程の弁証法として拒否し、マルクスを唯物論的過程の弁証法として拒否し、直観と自覚を意志の源と見、過程から切断した「場所の現在」において絶対無の立場を確立する場所的弁証法を提唱したのである。

即ち、自己の中に自己を見る「無」の立場が、対象の背後に有る場所をも無に統一する、主客の絶対矛盾の対立の中に自己同一を見る立場である。

この絶対対立するもの、非連続なものが無に於て（場所）に於て同一するものが、非連続即連続、無即有、の思想である。

我々はすでに一章で、西田の場所が何等人類の普遍的当為を導き出せないことを見た。場所の弁証法から人類の歴史の普遍的当為を導き出せないことは当然である。

そして今我々はこの二章で、西田が依拠したシェリングからフイヒテ、カントに溯源的に発想の秘密を探り、思惟と存在との関連に挑戦し、当為の把握においてカント、フイヒテ、シェリングが、共に挫折した姿を見、この先天的認識論、自我の主意主義、知的直観を継承する西田の「純粹経験」「行為的直観の立場」「場所」「絶対矛盾の自己同一」が、無為に帰着する認識論的根拠を見たのである。

(四)

我々は、唯物史観においてマルクス・エンゲルが「此岸の真理」を確立する「歴史の任務」を「共産主義」として果したと主張する。唯物論的過程の弁証法において人類の歴史の普遍的当為を共産主義として確立した。我々は人類の歴史の行為を労働↓階級斗争↓世界党と発展する世界共産主義党史観として把握、この共産主義を現実のものとする実践を党の歴史の任務と指定し、唯物史観に導かれて

- ① 自然は無意識状態にある絶対者。
- ② 精神は絶対者における叡知の方面。
- ③ 無意識は絶対者の叡知の潜在。

即ち、客観的観念論といわれるもので、後のヘーゲル体系の原理を整えている。（シェリングはヘーゲルを自己の盗作とののしっている）

シェリングは絶対者の存在と人間の認識を「知的直観」で直結しようとした。ヘーゲルは「知的直観」を拒否している。シェリングが天才の人間にのみ限定して認めた「知的直観」を西田は人間に普遍的なものとして撰取して「行為的直観」とした。フイヒテの主意主義とシェリングの直観との結合である。だが西田は、シェリング的・ヘーゲルの絶対者による主客の合一を拒否している。

西田は「私は、深くベルグソンの哲学に同感すると共に、リッターの如きカント学派の哲学に対して、如何にして自己の立場を主張すべきかを考えた。而して当時 私はかゝる立場をフイヒテの自覚の如きものに求めた、……：兎に角フイヒテに似た一種の主意主義の立場に立つて種々の問題を考えて見た」そして「……：『場所』に於ては超越的述語という如きものを意識面と考えることによつて……：久しく私の考えの根底に横たわっていたものを把み得たかに思い、フイヒテの如き主意主義から一種の直観主義に転じたのである。……：主客合一の直観を基礎とするのではなく、有るもの動くものすべてを自ら無にして自己の中に自己を映すものの影を見るのである」（動くものから見るもの（序文）と告白している）。

フイヒテの主意主義的自我から「純粹経験」を『善の研究』で導出し、この概念を基礎的カテゴリー的な主客合一を説こうとして挫折し、ヘーゲル（過程的弁証法）的な主客の絶対者（観念）の自己展開による統一を拒否し、主客の対立を固定化して対立させ、自の場所と客の場所が、直観（非論理的神秘的）主義によつて直の自覚の場所に至るといふ場所の論理をきつきあげたのである。主意主

党が直接変革対象とする世界の論理的把握（下向・上向法）と戦略確定を論理的任務とした。歴史的任务によつて意識の能動性は論理的任務を深化し、論理的任務によつて歴史的任务は、過去から現在を経て未来を獲得しうる。この党による統一が綱領戦略への結実であり、党風軍紀への結実なのである。

これが、共産主義の歴史的任务と論理的任務を党において統一し、軍事を組織する我々過渡期世界党の立脚点である。

さて、革命的な同志諸君はゲバ権をふりかざす腕に、火焔ビンを振りしめる掌に、決意を凝結させた経験をもっているのだらう。自己のイデオロギーが血管を冷えびえと走り抜けて肉体に熱い決意の炎を燃したことを知っているのだらう。この始めての決意が肉体をどんなにかけめぐったかを思い出すのだらう。

経験豊かな革命的同志は、独房の冷い壁と鉄格子に一人で対面し、あの熱い革命の決意を自己の中から引き出して対象化し、外の同志との感性的交流を断られた自分の中の決意と静かに対面したのである。

そして、先進国武装斗争を担う決意を固めて斗っている革命的同志は、全青春を革命運動に捧げることの意味を、精神の底に大切にしまっているのだらう。七年以上の刑に耐えうることへの己の強さを、己の共産主義に問うているのだらう。

階級の原則・完熟・非転向・組織に対する責任・権力への憎しみ・闘い抜いた自己確認とさゝやかな自信。永い独房生活で自己を律することの出来た思想は今再び獄舎生活を思い出して、革命生活の日常を固に解体することはない。永い獄中での既存の自我との不調の対決に耐えたのだから日々の革命生活に軍紀を呼び込むことが苦痛ではない。イデオロギーや思想は、党の共産主義として日々の軍紀に結実してこそはじめて『決意』が自分のものとなったことを自覚するのだらう。

『革命的決意』『共産主義的決意の哲学』とは、党の歴史的任务と論理的任務の統一として哲学となり、哲学は党風と軍紀に結実し

てはじめて精神的武器となるのである。

党風と軍紀に結実しうる決意こそが、共産主義の決意なのである。またかゝる決意を倫理・道徳ではなく、人類の歴史的行為における普遍的当為の決意に高めうる哲学こそが、共産主義の思想なのである。

生命を賭した武装斗争・日々軍紀に自己を律する非合法活動・永い永い独房生活は、革命的同志の共産主義を遠慮なく点検する。

この検証の実践に練えられる共産主義者こそが、有限なる固体の死骸を悠久の歴史に生かせるのであって、このような意識の能動性こそが主体性なのである。一般的な主体性などは社会存在でしかない人間存在にはありうべくもない。実存の決意！実存の選択！個の責任における思想的強靱さは、決意の根拠が「無」であるが故に、必然への歴史的任務が固体の死骸を人類の普遍的当為に高めることが出来ないため、「歴史」を切断了た「場所的現在」での個人的強靱でありえても、全人類を変革して全世界を獲得する人類の強靱さへと高めることは出来ない。

共産主義の歴史の任務と論理的任務を党に於て統一する立場が、党風と軍紀を通して肉体化し得えない「唯物弁証法」の知識人は、藤本進治の階級斗争自己展開史観や梅本克己の人間環元主義までしか到達出来ないものである。

〔注〕西田は対象認識の論理的直観の下に意志直観は従属しない。直観の世界に入って真の自覚はあらわれる。直観が知識成立の根本条件と考えよう。

社会存在（対象）が歴史的必然を拒否されて場所的現在に限定される時、対象認識と当為の直観は絶対的に分離されるのである。我々は歴史性Ⅱ唯物史観の弁証法と論理性Ⅱ資本論・帝国主義論の弁証法を、共産主義の行為主体である党の実践Ⅱ過程の結接点である現在の実践において統一するものである。

第三章

黒田三段階論批判

法則の内的連関を放棄した非連続体系批判

(一)

黒田三段階論の方法的致命傷は、『資本論』と『帝国主義論』との法則的連関を本質論としての向上論理のうちに内的に把握することが出来なかったがために、内的把握からの体系化を放棄し、対象的実在の内的論理と無媒介に場所的立場を外側から押しつけて、『資本論』と『帝国主義論』を外から切り盛りして整理した点にある。

この主観的な切り盛りの帰結が

(I) 資本制生産の普遍的本質論としての『資本論』。

(II) 資本主義の特殊的发展段階論としての『帝国主義論』。

(III) 個別的現象分析論としての各国の資本主義政治経済論。

(宇野経済学方法論批判P一八三)に外ならない。

この整理に根ざす方法的誤りは次の方法的対象把握の無自覚にある。

すなわち、史的過渡性をほらむ対象世界の論理的把握として資本の本質論が向上的弁証法を展開するものであるから、資本の本質としての普遍的力には有機的空間として実存するためには産業資本主義段階と帝国主義段階との、二つの歴史的段階として頭在せざるを得ず、かかるものとして両段階の頭在を可能とする本質であるが故に本質論は資本の普遍的なる力として本質論たりうるということを方法的に把握出来なかったことにつきる。

かかる方法論を対象の論理の本質と空間的実在、力と発現、論理的向上と歴史の頭在、という関連において把握出来なかったところに、黒田三段階論が①段階設定の根拠を対象の内的弁証法とし論証することが出来ず、②普遍本質論の内的論理から特殊段階論を二つの歴史的段階として論理的に導出することに失敗してしまい③遂に、段階設定の根拠を認識主体の側の問題へと逆転させ、場所的立場に立つ認識主体の行為的現在における問題意識が規定する「抽象レベル論」に根拠を求め④普遍本質論の論理構造Ⅱ法則性と特殊段階論の論理構造と内的連関が不問に付されたまま段階論体系は「非連続体系」(?)とされてしまう根拠があったのである。

何のことはない。『資本論』は完結した普遍本質論と規定されるが、産業資本主義の(就中イギリスの)法則性を論理的かつ歴史的に把握したということになり、『帝国主義論』は帝国主義段階の法則性を論理的かつ歴史的に把握したものと成り、特殊と段階は『帝国主義論』という著書のなかで押し込められ、この二大著書を整理させて段階論という名称を与え、場所的立場で非連続性を(実は内的把握の放棄を)合理化したにすぎない。

『資本論』を丸ごと普通本質論、『帝国主義論』を丸ごと特殊段階論とする黒田の外的切り盛り操作法は、つまり『資本論』と『帝国主義論』の内的本質論として把握と歴史的段階把握との統一把握の混乱の根源は、当然、次の三点における正しい把握を欠落させる。

第一は、マルクスの六部構成によるプラン体系における「国家による総括」が「前半体系」と「後半体系」に占める位置の把握である。

「前半の体系」は資本の普遍的力を本質論として把握するべきものとしてあり、この論理的向上展開が「階級」において前半を終えると同時に階級独裁国家に総括される。ここで、資本の抽象的本質論はその普遍的力を国家に総括された多者相互の国家間関係Ⅱ生産

の国際的関係として実存形態を与えられ世界的空間として、生きた世界市場の有機的生命として実存する。

ここに資本の普遍的力の本質論としての把握と、資本の本質が歴史的段階論として実存し発現する世界的空間と歴史的頭在の関連が、統一的に把握される。

この本質論から段階論への論理的次元向上としての転回軸が、正に「国家形態におけるブルジョア社会の総括」(一八五七年八月『経済学批判序説』)「国家・外に向っての国家、ブルジョア社会が国家をのりこえてすすむこと」(一八五七年八月『経済学批判要綱』)にあたることを拒否する黒田は八国家を抜きにした資本Vの本質論と段階論を体系化せんとする。

宇野弘蔵はマルクスの六部構成プランを解体して①国家無関係論と②国家関係不純国内経済純化論とによって③国内資本自立純化論を導き④産業資本の純化傾向Ⅱ原理論開示可能論を確立したが、黒田も八国家を抜きにした資本Vの本質論を産業資本主義のイギリスに求める限り、宇野三段階論の方法を根底的に批判出来ぬこと、これもまた当然の帰結だ。

経済学者たる宇野は、段階設定の根拠、原理論開示の根拠と段階論分離の根拠とを、誤まってではあれ内的論理をもって提起しているが、黒田においては、内的論理の根拠、普遍本質論と特殊段階が設定されるその弁証法的根拠が対象の内的論理として全く提起出来ない。

だから、段階構造の設定根拠において宇野三段階論は、原理論Ⅱ「経済原論」から段階論Ⅱ「経済政策論」を導出することに失敗しているのであるが、黒田三段階論の場合には、段階構造の内的根拠を提起することが出来ないが故に「普遍Ⅱ特殊」「本質Ⅱ段階」の導出が出来ず非連続体系(?)に終ったのである。

〔注〕「鉄の戦線」巻2、A宇野体系の根底的解体にむけてVの三章を参照された。

第二は、本質論における「独占形成論」の必然的開示に関する把

握の問題である。

『資本論』で開示されている資本の本質論は、国家形態による総括を受けて、産業資本主義段階の世界市場を、外に向っての国家・国家をのりこえてすすむブルジョア社会として顕在化させている。

だが、資本の普通の力としての本質は、未来永劫の法則ではない。すなわち資本は繰り返す超時空的な法則ではなく、むしろ、唯物史観の法則に類した歴史的發展を内に秘めている。それ故に、本質論として把握された対象的實在の弁証法は、論理的把握の内に歴史の過渡性を内含する。資本の普通の力としての法則の根拠である本質的論理は、したがって、みずからの法則の論理的展開の内のみずからの内的止揚と移行を必然化させざるを得ない。かくして資本の本質論は、国家に総括されて、生きた世界市場を顕在化させつつ、その深部で内在的必然としての独占を形成する。

本質論の独占形成の必然性は、国家形態におけるブルジョア社会の総括を通して転換させ、『資本論』が言明するように、「独占を生み出し、したがって国家の干渉を誘発する」ものとする。

かくして独占を内に必然的に開示した資本の本質論は、もたらした国家形態における総括を媒介として、世界的空間として資本の実存形態を顕在化させている世界市場の有機的構造を質的に変える。

すなわち、この本質論内部の独占形成の必然的力があるからこそ、国家に総括されることを通して、世界的空間として実存する資本の世界性の有機的構造を、産業資本主義的段階の世界市場性格から帝国主義段階の世界市場性格へと、歴史的に移行させうる力となるのである。

独占開示論の欠如に関しては、別稿で独自に批判してあるが、問題の核心は以上にある。詳しくは別稿「鉄の戦線」第2章「宇宙体系の根底的解体にむけてVの一章—第二章を参照せよ。

第三は「国家形態における総括」を転回軸に「前半体系」本質論と「後半体系」段階論の関連を把握すること、本質論の対象が歴史的過渡性をもつことに刻印されて本質論が内的論理の向上展開

ないまま、『資本論』前半体系↓「帝国主義論」後半体系を直接的に連結させてしまおう。

高木幸二、原田三郎、宮本義男等の向上が「後半体系」を産業資本主義段階と帝国主義段階との両段階を本質論から導出しえなかつたのも、一切の原因は、本質論の把握における独占論の開示と国家総括との関連把握の失敗にある。

梯明秀が、『資本論への私の歩み』（一九五四年）で展開した体系的シニエマが、やはり論理と歴史の関連を統一しえずに失敗している原因もまた、高木、原田、宮本等の失敗の原因に共通するものである。

梯においては『ヘーゲル哲学と資本論』（一九五九年）の本質論把握において、やはり『資本論』の向上論理を一巻から二巻および三巻を通して蓄積論として把握する視野が欠けており、ヘーゲル円環体系をアテハメて解釈する思考に終っている。したがって梯の『資本論』と『帝国主義論』との体系化は、円環で循環する『資本論』に、本質論の欠如する歴史的述論としての『帝国主義論』をドッキングするというシニエマになるのである。

そこでは論理的縦軸としての向上体系と歴史の横軸としての時間体系とが独占論を内在させることなく無規定のまま、A国家による総括Vという視点が欠落したまま、図式の上で、『資本論』と『帝国主義論』の接点において合流させられ、向上体系の論理的縦軸が、いつの間にか、どういふわけか時間体系の歴史の横軸にのみ込まれて横倒しされてゆくのである。

黒田は、この時間体系と横軸と向上体系の縦軸との無媒介な合流に対し、直感的な反撥を示して、この両者の切断をなしたげた宇野弘蔵に惹かれてゆくのである。

宇野は、論理の縦軸を原理論のうちに閉じ込め、原理論を論理学として完成する。

そして、原理開示の条件から排除された①商人資本の重商主義段階と②金融資本の帝国主義段階と③産業資本の不純な国際経済の三

の内に独占を形成することの関連を、統一的に現在の把握返し体系化することの問題である。

この内幕については、すでに第二の問題、独占開示論の指摘において展開しているところであるが、いかに統一し、いかに体系化するかに、プラン問題と「資本論」と「帝国主義論」を現代的任務として把握しうかがかかっている。

この統一的把握において宇野弘蔵も失敗し、黒田寛一も外的な批判といくつかの問題提起に終って敗れざるを得なかつたのである。

黒田が宇野批判において核心を突かず、黒田三段階論が『資本論』と『帝国主義論』の併列名称論に終った原因はここにある。

本質論と世界的空間としての歴史の顕在との関連を把握出来ない者は所詮は、本質論としての論理向上展開と、この本質論が導出する資本の実存形態としての世界的空間と歴史的顕在（発展段階）との関連を、統一的に把握出来ないのだ。

問題に対する無自覚故に、歴史的叙述に論理を解消するのが「歴史」論理」説であるが、この批判は蛇足となるうらからはぶく。

いわゆる単純向上論の致命的欠陥は①プランの前半、後半を向上論で単純に結ばうとすつ②前半と後半の論理体系における真の差に無自覚故に次元向上の意味がつかぬ、したがって③前半の論理向上体系が後半に向上するや否や、産業資本主義段階を脱脚して帝国主義段階の歴史の叙述に横倒れして④論理向上の歴史の段階叙述とが体系的に混同したまま連続させられることにある。

黒田は批判の専門家として単純向上論者の論理と歴史の体系的混同様木性を見抜いてこれを批判したが、これを克服する変るべき体系的方法を提起出来なかつたが故に、宇野の分離非向上論に惹かれ、大棒として宇野に屈服しつゝ黒田非連続体系を主張するに至るのである。

さて単純向上論者は本質論としての「前半体系」から世界的顕在としての「後半体系」への移行において、産業資本主義段階と帝国主義段階を二つながら、歴史的顕在の歴史的段階移行として導出しえ

つを歴史的時間の横軸において段階論としてまとめ、論理軸と歴史軸との完全分離および相互の論理的関連の断絶が、黒寛を惹きつけた魔力であった。

したがって宇野に惹かれて梯を批判した。すなわち、梯へ切断を要求した。だがみずから統一すべき体系的方法を提起しえず、また宇野批判にも挫折したまま、断絶の歴史と論理を統一しようとしたが故に、「非連続の体系」を場所的立場に立つ認識主体の側の抽象レベル論としてしか論証出来なかつたのだ。

黒田は、宇野的な純化としての超時空的原理論の完結に反対しながらも、体系的シニエマをもった本質論の完結を認め（P一八二）たり、対象の歴史的過渡性を自覚しながらも、向上論理が本質論の内に独占を開示して帝国主義段階をも顕在させる普通の力をもった本質論となることを把握することが出来なかつた。したがって、『資本論』には、従来体系への論理的過渡性をそのうちにはらむ（P一七九）などと直感的には言いつつも、そのはらむものが何であるのかを『資本論』の全二巻に照して内実的に展開することが出来なかつたのである。

ここで遂に黒田は「宇野三段階論の批判的摂取といわれわれの立脚点」（P一八四）に立ちつ宇野体系的枠内に（つまり断絶体系の枠内に）のめり込み、宇野と共に、「国家形態での総括」を転回軸として後半体系へ次元向上することを否定し（P一七一）マルクスの六部構成プラン体系の意義を宇野と共に解体し、黒寛と宇野に反対する者をスターリン主義者として断定するに至るのだ。そして同時に、非連続体系という整列名称の三段階論が失敗の産物として生み落されるのである。

認識主体の場所的立場と抽象レベル
に依拠する段階論構成法批判

(二)

黒田が宇野経済学方法論批判で挫折したのは、彼の提起する段階論が、何ら、段階構成の内在的根拠を対象世界の法則性の関連で示すことが出来なかったからであり、対象世界の歴史の段階と法則性との関連で段階構成の根拠と方法をそれなりに内実をもって提起した宇野にこの点で黒田がおとっていただけにほかならない。

資本主義社会は歴史的過渡性をもちつつも一つである。だから対象世界の一貫した弁証法との関連で、本質論と段階論との、論理次元の同一性における区別をを与えなければ、『資本論』と『帝国主義論』の二者表を丸ごと二つ併列し、整理名称として、外から普遍本質論と特殊段階論の順位称号を与えても無内実無内容である。

無内容を段階順位称号に外部から意味づけを与えるための操作が次の三点なのである。

(1) 対象の論理性と歴史性を統一し、かつ、対象の普遍性と特殊性と個別現状性をも、歴史の段階で区分するための行為的現在における認識主体の場所的立場。

(2) 論理性と歴史性が二つながら叙述されていると黒田がともに認めている『資本論』と『帝国主義論』に対して区別を与えるため、それぞれ、その論理性と歴史性に、ともに普遍性と特殊性の規定を与えるためにデッチ上げた、黒田寛一手づくりの「普遍論と特殊論との関連規定」

(3) 『資本論』の歴史的叙述と『帝国主義論』の歴史的叙述に、普遍性と特殊性を押しつけるデタラメな黒田家特製の「普遍論と特殊論」も、『資本論』の法則性と『帝国主義論』の法則性に対して、

主義段階の法則性を認めているのだから、当然この『帝国主義論』の法則性と『資本論』の法則性とが同一性と区別性において問われるのである。

法則とは現象を規定する根拠として力であり、発現しない力は力でなくかつ法則でもありえないのであるから、法則を認める者は、そこに根拠として本質を認めなければならぬのである。

このジレンマを説明するは、産業資本主義段階の本質と帝国主義段階における本質とにわけて解決しようとした。だが、対象世界の歴史的過渡性は、世界的空間の歴史的頭在として産業資本主義段階の世界市場から帝国主義段階の世界市場へと歴史的段階をその有機的構造において移行させてはいるが、この移行を発現させる力の根拠は本質論にあると見なくてはならない。かかるものとして本質論は二つの本質論の接木としてではなく、(叙述の方法としては)一貫して向上する論理体系としてではなくならないものである。黒田は梯のジレンマを批判しつつも、このみずからのジレンマ『資本論』の法則性と『帝国主義論』の法則性とのジレンマを解決できなかった。

だから黒田は、対象の法則性の問題を、認識主体の側の問題、場所的立場の側へもち込むという逃亡路線をとった。

彼はいう「構成さるべき学問的体系の本質は概念的に把握さるべき現実的対象の法則性そのものの構造と、それをいかなる『抽象レベル』において論理的・歴史的にとらえるかによって決定されるのである」と。(P二九七)

ここで彼が言わんとしていることは、学問的体系は、対象の法則性そのものの構造によるが、その構造を、どのような「抽象レベル」で把握するかという認識主体の側の問題によって決まる、ということである。

だから彼は遂に場所的立場で問題を解決し「非連続の連続」という誤った規定を与える。

即ち、「『資本論』として概念的に把握された現実的対象の法則

これを普遍と特殊に分割規定することが困難になるため、この難点をカバーせんとして持ち出された——これまた武谷三段階論の誤解にもとづく——抽象レベル論。

以上の三つである。

まず(イ)と(ロ)の問題から検討しよう。黒田が「方法論批判」で宇野に対し唯一示した区別性はこの場所的立場と抽象レベル論である。

『資本論』を普遍本質論とする黒田も、『資本論』の物質的基礎を宇野と同様に「一九世紀中葉のイギリス産業資本主義社会の法則性」(P二九七)に求めている。そして宇野が産業資本主義(イギリス)国内経済の自己純化傾向に原理論開示の根拠を求めると対し、黒田は「認識対象の個別特殊性において同時に資本制生産様式に普遍に妥当するところの運動法則を解明したのが、資本制生産様式の本質論としての『資本論』にほかならない」(P二九七)といっているにすぎない。

純化傾向と言わないだけが宇野との差異であり、産業資本主義が、産業資本主義段階の個別的特殊性を運動法則としつつ、同時に、この産業資本主義段階のイギリスの個別的特殊性が資本制生産様式に普遍的に妥当するところである。

若し、産業資本主義段階の資本主義の法則だけが個別特殊性の中に同時に普遍妥当性をもつのなら、まずもってその根拠を示してもらわねばならぬ。宇野はその根拠を純化傾向に求め、帝国主義段階の不純傾向と対置したが、黒田はその根拠を示すことができなかった。

黒田は、帝国主義段階の特殊の運動法則と産業資本主義の特殊かつ普遍妥当の運動法則との関連と差異性を、区別と同一性において述べなければならぬ。すなわち、宇野の場合は、純化↓原理論・不純↓段階論という分離で断絶し、不純な帝国主義段階では法則性を否定したから、それなりの(誤ってはいらぬが)筋を通すことができた。しかし黒田は段階論をレーニン『帝国主義論』に求め、帝国

性と、『帝国主義論』として対象化さるべき現実的対象の法則性とあいだの質的相違を、それぞれの認識主体の場所的立場、その非連続の連続性・連続の非連続性において基礎づけるならば、当然にも、『開かれた学問的体系』がたんなる「向上的演繹」によって構成されるのではなくしてまさしくそれ自体抽象レベルにもとずいた段階構造をなす『開かれた学問的体系』であることが帰結されるであろう」と。(P三〇〇)

ここでは、完全に対象の問題が認識主体の問題に還元され、マルクスの行為的現在における場所的立場とレーニンの行為的現在における場所的立場とに、それぞれの認識主体の場所的立場へと還元され分離される。

そして対象把握のジレンマを、場所的立場の行為的現在のそれぞれ(マルクスとレーニン)に引きさいて、そこから対象法則の体系化を非連続の連続として構成しようとするのである。このスリカエはヒドイ。

「一方では認識把握さるべき客観的の法則性のこのようながいゆえに、他方では法則性の抽象レベル、およびその歴史的特殊性や段階性の確定などにかんする認識主体の側の問題意識にもとづく認識下向の方向性と限界のちがいゆえに、要するに、認識対象と認識主体との両者の場所的構造そのものの非連続性のゆえに、『開かれた学問的体系』そのものにも段階構造が、論理的にも歴史的にも必然的に発生するのである。宇野弘蔵が『原理論—段階論—現状分析』の三段階論の設定を社会科学の方法論として提起せざるをえなかったゆえんの認識論的根拠は、まさに右のような点にあったといわなければならない」と。(P三〇一)

① 認識主体の側の問題意識にもとづく認識下向の方向性と限度のちが

② 認識対象と認識主体との両面の場所的構造そのものの非連続性。

この二つが、黒田三段階論の順位名称を理論化する根拠であった

わけだ。正に西田の対象の場所と主体の場所との合一である。したがって、一切が、認識主体のそれぞれの行為の現在における場所の立場によって逆転的に規定される。

マルクスの行為の現在Ⅱ商業資本主義段階

マルクスの場所的立場Ⅱ普遍本質論

レーニンの行為の現在Ⅱ帝国主義段階

レーニンの場所的立場Ⅱ特殊段階論

こうしたシェーマが定立すると今度は場所的立場の側から、『資本論』の法則性の普遍性と『帝国主義論』の法則性の特殊性を規定しなければならなくなる。

黒田が「方法論批判」で指摘した「マルクス主義形成の論理」は次の如く。

『一般に、ある特定の個別的現象形態は、それ自身同時に、論理的により低次の（または歴史的に後続する）運動形態にとって普遍的であり、また他方、論理的により高次の（または歴史的に先行する）運動形態にとっては特殊なものであるという立体構造をもつ（これは対象の分析という立体的見地からでない）と決して出てこなす』（P161）

即ち、マルクスの行為の現在における場所的立場の対象産業資本段階は後続する帝国主義段階に対して普遍性をもち、帝国主義的段階は、後続するが故に、かつ同時に論理的に低次なるが故に先行する普遍性に対して特殊性をもつということになる。

これが黒田寛一の手づくりの「普遍・特殊論」である。全くデータラメさは一目瞭然である。

先行するものが普遍であるという根拠は全くないし、いかなる論理を駆使しても成立しない命題である。また、先行するものが、どうして論理的に高次であったのだろうか。このことも論証できぬ独断である。かくして

産業資本・『資本論』Ⅰ普遍本質論

帝国主義・『帝国主義論』Ⅰ特殊段階論という黒田の整列操作に

ている。

黒田も、現実の内容に無頓着に、宇野の上向段階論に武谷の下向的認識の段階思考論をハリつけ、上向序列と下向的思考道程を対置させようなどと考へてはならぬのだ。

最後に、武谷三段階論の誤解にもとづく抽象レベル論の認識主体本位の乱用について批判しておこう。すなわち『帝国主義論』の法則性を本質論の法則とは非連続な実体的法則として措定することの無意味についてである。

さてマルクスが『資本論』の始原を、原基形態としての商品においたことは、つまり、ここを下向の到達点として反転させる端緒としたことは、決してマルクスの認識主体側の勝手な問題意識によって決められたものではない。資本の本質を把握するには、価値増殖する運動としての資本の原基形態を把握しなければならぬからである。すなわち、対象世界の弁証法の構造に規定されているのである。これを支えるものとして、唯物史観があり、資本を永遠の法則性ではなく歴史的な時代の産物として批判的に解明せんとする革命的な世界観がある。こうして革命的な世界観と歴史観によって、ひとたび対象世界の論理把握と原則的批判の領域が設定されるや、認識主体がどこで下向を停止すべきかは、対象の弁証法的構造に規定されて決るのである。

決して、それは、行為の現在や場所的立場に立つ認識主体の問題意識が勝手に決めたり、独断したりするものではない。

したがって、同一の資本制生産社会である帝国主義段階を、下向的分析の側からだけ攻めようとして、（それは『資本論』からの論理上向の道を非連続として切断了結果であるが）或る段階で下向を停止させ、『資本論』の法則性（本質論）とは全く連続しない非連続の『帝国主義論』の法則性（実体論）を設定しようとしてもそれは無理である。

レーニン『帝国主義論』の法則性は、独占を本質的基本根拠としているのだから、黒田が非連続を論証せんとするならば、『資本論』

もとづく『資本論』と『帝国主義論』の切り盛り法は崩れざるを得ないのである。

さて、ここで黒田寛一は、みずからの切り盛り法を、その内的論理にもとづく体系化で克服することなく、再び、武谷三男の下向的認識過程における三段階論で補填せんとするのである。黒田は言う

「宇野三段階論には欠如しているまさにその問題を、つまり対象的認識過程そのものの段階的深化の構造を『現象論Ⅰ実体論Ⅰ本質論』として本質論的に解明する道をひらいたものが武谷三段階論にほかならぬ」と（P235）そして

武谷の下向Ⅱ「現象論・実体論・本質論」

宇野の上向Ⅱ「現状分析・段階論・原理論」

を科学的方法論として論理化すること——これが、論理学研究の課題としてのこざれている（P236）という。

しかし、この作業は「方法論批判」が刊行されて以来、今日までなされていない。

それは、武谷三男の認識過程における三段階論をシェーマ化して全く異質な宇野シェーマの裏側にハリつけようという思考がそもそも誤っているから始めからできない相違だったのである。

宇野特製の対象把握法と段階構成法が導き出した宇野上向体系のシェーマ、現状分析、段階論、原理論に武谷の現象論・実体論・本質論をハリつけて裏打ちしようという黒田の思考には、武谷三男自身が辞退するだろう。

武谷三男は、対象の法則性を解明するという具体的実践的目的から離れ、方法論を抽象的なカテゴリー体系としてシェーマ化することに最も反対するからである。

マルクスも、分析即綜合・前進即復帰の円環体系をなすカテゴリー集成たるヘーゲル理論学に対し、現実の内容にたいしてまったく無頓着であると同時に、まさにそれゆえに、いかなる内容にも適用するところの、抽象的な思维形式であるにすぎない」と批判を加える

の上向論理体系としての本質論と独占形成論が非連続であることを宇野と共に反マルクス、レーニンの立場で論証しなければならなくなるだろう。

黒田は一面では、帝国主義段階の法則を認めており、同時に段階論にレーニン『帝国主義論』を丸ごとすえたのであるから、この筋を通せばレーニンと共に、独占形成論がマルクスによって『資本論』で論証されたのだといわざるを得なくなる。しかし他面では『資本論』と『帝国主義論』の法則性の非連続を主張するのであるから、本質論で独占が開示されてゆくことを認めると、丸ごと『帝国主義論』を段階論とする意味、即ち非連続の意味が崩れる。

彼が非連続の連続という体系を提起しているかぎり、宇野と同じ途へ落ち込むのだ。

かくて、武谷三段階論の乱用で、非連続体系を位置づけようとする展望も挫折さざるを得ないだろう。

「マルクスは資本主義の理論的および歴史的分析によって、自由競争が生産の集積を生み出し、その集積はその発展の一定段階では独占をもたらしすことを論証した」（レーニン『帝国主義論』国民文庫版P26）

我々は以上で、行為の現在における場所的立場が変革対象世界に思维作用を開始する過程の検証を終えた。この哲学が唯物弁証法であったか否かは、すでに検証の結果が答えてくれたであろう。

鉄の戦線——第3号

1971年10月

共産主義者同盟鉄の戦線編集委員会

TEL 03 (446) 0832

〒 東京都本郷局私書箱第96号

定価400円



¥400